宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第13集

UENOHARUDAI 3

上の原第３遺跡

—県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

１９９９年

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第13集

UENOHARUDAI 3

上の原第３遺跡

—県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

１９９９年

宮崎県埋蔵文化財センター

上の原第３遺跡全景（西から）

２号竪穴住居土器出土状況

2号竪穴住居　出土土器

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、県営農地保全整備事業時屋地区に伴い、時屋地区遺跡群の発掘調査を行いました。調査は平成６年から３ヵ年にわたり、５遺跡６地点、約14万㎡の大規模なものとなりました。本書はその報告書で、第１集として上の原第３遺跡を報告します。

上の原第３遺跡では、古墳時代中期～後期の集落が検出され、多くの土器が出土しました。これらは当地域の土器編年にとって重要な位置を占める資料になると思われます。また、時屋地区の他の遺跡では、旧石器時代から江戸時代にいたる各時代の遺構・遺物が大量に検出されています。一つの遺跡から得られる資料は断片に過ぎませんが、ある一定の広がりを持つ範囲で多くの遺跡が調査されたことにより、地域の歴史をより具体的な姿として浮かび上がらせることも可能になると思われます。こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成１１年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　田　中　守

例　言

1　本書は、県営農地保全整備事業時屋地区に伴い宮崎県教育委員会が実施した、時屋地区遺跡群・上の原第３遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県中部農林振興局の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、平成６・７年度は県教育庁文化課が、平成８年度は県埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地での実測等の記録は、吉本正典、東憲章、鎌田次郎が行い、一部を業者に委託した。

4　本書に使用した写真は東が撮影し、空中写真については業者に委託した。

5　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面の作成、実測、トレースは主として東が行い、一部を整理作業員の協力を得た。

6　本書に使用した位置図は国土地理院発行の５万分の１図を基に作成し、調査範囲図は宮崎県中部農林振興局作成の２千分の１図を基に作成した。

7　本書の執筆は、第Ⅱ章第２節を吉本が、他は東が担当し、編集は東が行った。

8　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 2
第Ⅱ章　時屋地区遺跡群について
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 4
　第２節　時屋地区遺跡群の調査 …… 7
　第３節　基本層序 …… 8
　第４節　報告書の記述について …… 9
第Ⅲ章　上の原第３遺跡の調査
　第１節　調査の概要
　　１　調査の経過 …… 10
　　２　層序 …… 10
　第２節　調査の記録
　　１　Ⅲ層上面検出の遺構・遺物 …… 13
　　２　Ⅳ層以下の遺構・遺物 …… 45
　第３節　まとめ …… 54

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　時屋地区遺跡周辺地形図 …… 5～6
第３図　基本土層柱状模式図 …… 8
第４図　上の原第３遺跡　遺構分布図 …… 11～12
第５図　１号竪穴住居跡 …… 14
第６図　１号竪穴住居跡出土土器 …… 15
第７図　１号竪穴住居跡出土石器 …… 16
第８図　２号竪穴住居跡 …… 18
第９図　２号竪穴住居跡土器出土状況 …… 19
第10図　２号竪穴住居跡出土土器（１） …… 20
第11図　２号竪穴住居跡出土土器（２） …… 21
第12図　２号竪穴住居跡出土土器（３）・鉄器 …… 22
第13図　２号竪穴住居跡出土石器 …… 23
第14図　３号竪穴住居跡、出土土器 …… 24

第15図　４号竪穴住居跡 …… 25
第16図　４号竪穴住居跡出土土器（１） …… 26
第17図　４号竪穴住居跡出土土器（２）・石器 …… 27
第18図　５号竪穴住居跡 …… 30
第19図　５号竪穴住居跡出土土器（１） …… 31
第20図　５号竪穴住居跡出土土器（２）・鉄器・石器 …… 32
第21図　６号竪穴住居跡 …… 33
第22図　６号竪穴住居跡出土土器・石器 …… 34
第23図　７・８号竪穴住居跡、７号出土土器 …… 35
第24図　８号竪穴住居跡出土土器 …… 36
第25図　８号竪穴住居跡出土石器 …… 37
第26図　９号竪穴住居跡 …… 38
第27図　９号竪穴住居跡出土土器・石器 …… 39
第28図　10号竪穴住居跡 …… 40
第29図　10号竪穴住居跡出土土器 …… 41
第30図　集石遺構 …… 46
第31図　縄文時代早期土器（１） …… 48
第32図　縄文時代早期土器（２） …… 49
第33図　表土出土遺物（１） …… 50
第34図　表土出土遺物（２） …… 51

表目次

第１表　上の原第３遺跡出土土器観察表（１） …… 17
第２表　上の原第３遺跡出土土器観察表（２） …… 28
第３表　上の原第３遺跡出土土器観察表（３） …… 29
第４表　上の原第３遺跡出土土器観察表（４） …… 42
第５表　上の原第３遺跡出土土器観察表（５） …… 43
第６表　上の原第３遺跡出土土器観察表（６） …… 44
第７表　上の原第３遺跡出土土器観察表（７） …… 52
第８表　上の原第３遺跡出土石器・鉄器観察表 …… 53
第９表　上の原第３遺跡竪穴住居跡一覧表 …… 53

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

県営農地保全整備事業時屋地区は、宮崎市から清武町にかかる約60haの広大な面積を対象に、県中部農林振興局が平成元年に採択、実施したものである。事業は、南九州特有のシラス台地でのほ場整備、畑地灌漑、農道・排水路の設置が主たる目的である。

文化財の取扱いについては、事業採択の平成元年10月に県中部農林振興局長名で県教育委員会文化課に文化財の所在の有無について照会があり、同課は同年12月に事業予定区内に12カ所の遺物散布地が存在する事を回答している。その後、事業の進行に対応しながら県文化課による試掘・確認調査が行われた。文化財の保存に関する協議（切り盛り調整等）を経て、事業施工により文化財が影響を受ける範囲については事前に発掘調査を行い記録保存の措置をとることとなった。

宮崎県の場合、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は、原則として市町村教育委員会が調査主体となって実施している。平成３年度から５年度の調査（椎屋形第１・第２遺跡、上の原遺跡）については、県文化課と宮崎市教育委員会文化振興課との協議の結果、当時多大な量の発掘調査を抱えていた宮崎市の状況を鑑み、市教育委員会が調査主体となり、県文化課から調査員を派遣して調査を実施した。調査の結果については、平成８年３月に報告書が刊行されている。

平成６年度以降については、遺跡が宮崎市と清武町にまたがることから、県と両市町との協議の結果、県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。各遺跡の調査面積と期間は以下の通りである。

平成３年度	椎屋形第１遺跡（市）	4,500m²	平成３年10月31日～平成４年２月10日
平成４年度	椎屋形第２遺跡（市）	4,500m²	平成４年10月15日～平成５年２月12日
平成５年度	上の原遺跡（市）	4,200m²	平成５年６月14日～平成５年９月14日
平成６年度	上の原第２遺跡（県）	45,500m²	平成６年４月22日～平成６年11月１日
	上の原第３遺跡（県）	15,500m²	平成６年７月26日～平成６年11月25日
	上の原第１遺跡（県）一次	48,000m²	平成７年２月14日～平成７年３月31日
平成７年度	上の原第１遺跡（県）二次	(48,000m²)	平成７年４月24日～平成７年11月28日
	上の原第４遺跡（県）	3,400m²	平成７年５月15日～平成７年８月29日
	白ケ野第３遺跡（県）	300m²	平成７年８月30日～平成７年10月12日
平成８年度	白ケ野第３遺跡Ｂ地区（県）	25,000m²	平成８年５月１日～平成８年10月15日

なお、調査にあたっては、地元の時屋地区土地改良区の皆さんに作付け調整や休耕措置、さらには作業員の確保まで多大な協力をいただいた。

〈参考文献〉

宮崎市教育委員会　1996　『椎屋形第１遺跡・椎屋形第２遺跡・上の原遺跡』県営農地保全整備事時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宮崎県教育委員会　1995　『上の原第２・第３遺跡』県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

宮崎県教育委員会　1996　『上の原第１・第４遺跡、白ヶ野第３遺跡』県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（2）

宮崎県埋蔵文化財センター　1997　『白ヶ野第３遺跡B地区』県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（3）宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第３集

第２節　調査の組織

時屋地区遺跡群の調査の組織は次のとおりである。

調査主体　　宮崎県教育委員会

（平成６・７年度）

教育長	田原直廣
教育次長	八木　洋・中田　忠
文化課長	江崎富治
課長補佐	田中雅文
主幹兼庶務係長	高山惠元
主幹兼埋蔵文化財第２係長	岩永哲夫（平成７年度）
埋蔵文化財第２係長	面高哲郎（平成６年度）
主査（調整担当）	菅付和樹
主事（調査担当）	吉本正典（平成６・７年度）
主事（調査担当）	東　憲章（平成６年度）
調査員（嘱託）	鎌田次郎（平成６年度）
調査員（嘱託）	井田　篤（平成７年度）

（平成８年度）　宮崎県埋蔵文化財センター

所長	藤本健一
副所長	岩永哲夫
庶務係長	三石泰博
調査第２係長	北郷泰道
主査（調整担当）	谷口武範
主事（調査担当）	松林豊樹
調査員（嘱託）	児島由紀

調査協力　　宮崎県中部農林振興局　　時屋地区土地改良区　　宮崎県農業開発公社

1：上の原第１遺跡　2：上の原第２遺跡　3：上の原第３遺跡
4：上の原第４遺跡　5：椎屋形第２遺跡　6：椎屋形第１遺跡
7：上の原遺跡　8：白ヶ野第１遺跡　9：白ヶ野第３遺跡
10：白ヶ野第２遺跡　11：白ヶ野第４遺跡

第１図　遺跡位置図

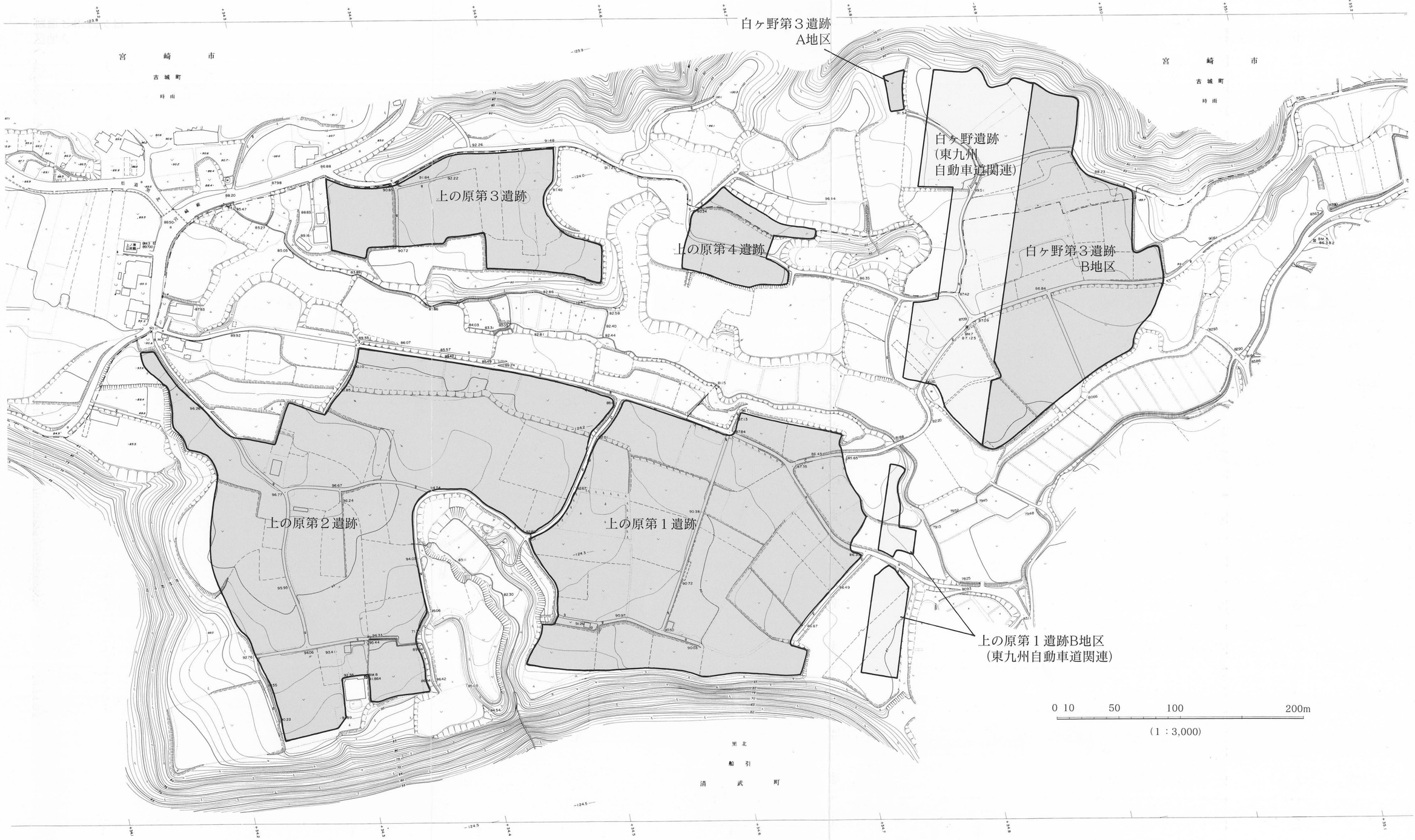
第Ⅱ章　時屋地区遺跡群について

第１節　遺跡の位置と環境

時屋地区遺跡群は、宮崎平野の南西部、宮崎市大字細江字椎屋形・時雨柳迫から清武町大字船引字上の原・白ケ野にかけての標高90m前後の台地上に立地する。宮崎市南西部域では、鰐塚山系から連なる丘陵と浸食の進んだシラス台地が展開し、その間を大淀川をはじめ清武川、加江田川などの大小河川が東流し日向灘へ注いでいる。台地縁辺の崖面や浸食小谷には所々に湧水地が見られ、遺跡立地の好条件が備わっている。

県営農地保全整備事業時屋地区では、清武川とその支流黒北川の合流地点左岸の約60haという広大な面積が事業の対象となり、これに伴い数多くの遺跡が発掘調査されている。なお、平成７・８年度には同事業地内で東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われた。また、隣接する清武町船引地区での農地整備事業でも発掘調査が行われている。以下はその概要である。

遺　跡　名	調査年度	調査主体	遺　跡　の　時　代（時期）	備　考
椎屋形第１遺跡	平成３年度	宮崎市教委	縄文（草・早）、弥生（後）	時屋地区
椎屋形第２遺跡	平成４年度	宮崎市教委	縄文（早）	時屋地区
上の原遺跡	平成５年度	宮崎市教委	旧石器、縄文（草・早）、古代	時屋地区
上の原第２遺跡	平成６年度	宮崎県教委	縄文（早・後）、中近世	時屋地区
上の原第３遺跡	平成６年度	宮崎県教委	縄文（早期）、古墳（中）	時屋地区
上の原第１遺跡	平成７年度	宮崎県教委	縄文（草・早・中・後）、古墳（前）	時屋地区
上の原第１遺跡B地区	平成７年度	宮崎県教委	旧石器	東九州関連
上の原第４遺跡	平成７年度	宮崎県教委	縄文（早）、古墳（前）	時屋地区
白ケ野遺跡（第２･第３）	平成7･8年度	宮崎県教委	縄文（早・中・後）	東九州関連
白ケ野第１遺跡	平成7･8年度	清武町教委	旧石器、縄文（早・前）、古代	船引地区
白ケ野第３遺跡A地区	平成７年度	宮崎県教委	縄文（早）	時屋地区
白ケ野第３遺跡B地区	平成８年度	宮崎県教委	縄文（早・後・晩）、古代、中世	時屋地区
白ケ野第４遺跡	平成８年度	清武町教委	縄文（早）	船引地区



第２図　　時屋地区遺跡周辺地形図

椎屋形第１遺跡では、縄文時代草創期～早期の集石遺構が検出され、隆帯文土器・爪形文土器・前平式土器等が出土している。また、竪穴住居と掘立柱建物からなる弥生時代後期の集落も検出されている。椎屋形第２遺跡では、縄文時代早期の集石遺構69基、連穴土坑（炉穴）24基が検出されている。

上の原遺跡では、縄文時代早期の集石遺構３基が検出され、ナイフ形石器・爪形文土器・前平式土器が出土している。

上の原第１遺跡では、縄文時代草創期～早期にかけての遺物群、縄文時代中期～後期の竪穴遺構（住居やその他の機能を持つものを含めて）29基、古墳時代前期の竪穴住居６基などが検出された。

上の原第２遺跡では、縄文時代早期の集石遺構45基、縄文時代後期の竪穴住居48基・土坑65基、中世～近世の掘立柱建物群や通路、墓壙、土坑などが検出された。

白ケ野第３遺跡では、縄文時代早期の集石遺構、後期から晩期の土器、古代の竪穴住居が検出された。

時屋地区遺跡群が立地するシラス台地は、標高90ｍ前後の広い平坦面を持つ。背後には北から延びる丘陵が迫る。南は清武川による開析谷の断崖で、その比高差は約50ｍを測る。台地上の広い平坦面はほぼ全面が遺跡と言っても過言ではなく、前掲の表のとおり多数の遺跡が調査された。

時屋地区の各遺跡は台地平坦面上に刻まれた小規模な谷地形により区分されているが、これはあくまでも便宜上のものであり、本質的な意味で人間の活動範囲を指すものではない。一つの遺跡の調査で得られる資料は断片的なものであり、遺跡群全体を見渡すことによってはじめて本来的な地域の歴史像が浮かび上がるのである。

第２節　時屋地区遺跡群の調査

時屋地区遺跡群の各遺跡に付された遺跡名やその範囲は、前述の通り便宜的なものであり、年度単位で行った調査の成果をつなぎ合わせて後の作業を進めていく必要がある。通常、このような広域的かつ中・長期的な調査においては、国土座標に準じたグリッドを設定し、記録作成がなされることが望ましい。しかしながら今回の調査では、調査開始時の混乱した状況もあり、当初設定した任意のグリッドを最終年度の調査まで踏襲する形となった。

グリッドの基準線は、東西方向を貫く計画道路のセンターラインに基づくもので、Ｎ－23°－Ｅの方向をとる。これを基に時屋地区の台地全域を覆う形で10ｍグリッドを組み、北西端部のＯ点から南方向10ｍ地点の杭を１杭、20ｍ地点の杭を２杭とした。区の名称は、Ｏ～１杭までを１区、１杭～２杭までを２区とした。東方向についても同様とし、南北方向・東西方向の数字をハイフンでつなぎ杭・区名を設定した（○－○杭、○－○区など）。従って、グリッドの南東隅の杭とその区の数字が一致することになる。

調査にあたっては、後に述べるⅢ層が鍵層として重要な役割を果たしている。Ⅲ層の上位にある文化層の調査では、この層の上面が遺構検出面となる。また、下位に予想される文化層の状況を知る上で、Ⅲ層の存否が目安となる。なお、Ⅲ層の上下にわたって文化層が遺存する場合、調査期間の制約から下位の文化層の調査が十分に行えないという状況も生じている。詳しくは個々の遺跡の報告に譲るが、トレンチによる状況把握→調査範囲拡張という手法を採るなど、出来うる限りの記録化を目指した。

第３節　基本層序

時屋地区遺跡群の各遺跡の層序は基本的には共通であり、宮崎県中南部域に発達するシラス台地の代表的なものと一致する。以下、その特徴を概観する。

Ⅰ層：暗褐色土　表土（耕作土）である。柔らかく粘性が低い。

Ⅱ層：黒色軟質土　やや粘性を帯び、柔らかく黒みの強い層である。縄文時代前期以降の遺物包含層であり、地形や土地の利用状況で層厚は異なる。遺跡によっては、包含遺物の時期等により細分が可能である。

Ⅲ層：黄褐色土　プライマリーなアカホヤ火山灰層である。層最下部には直径数mmの軽石粒が見られ、上部にいくほど緻密になる。層上部に２次アカと呼ばれる風化層が見られることも多い。

Ⅳ層：黒褐色硬質土　ローム層である。この層の下半部に白い粒子と光沢のある粒子を多く含む火山灰が混じる。

Ⅴ層：暗褐色硬質土　Ⅳ層よりも明るい色調である。Ⅳ・Ⅴ層は縄文早期の遺物包含層である。

Ⅵ層：褐色硬質土　ローム層である。粘性が高く硬質である。微小なパミスを疎らに含む。

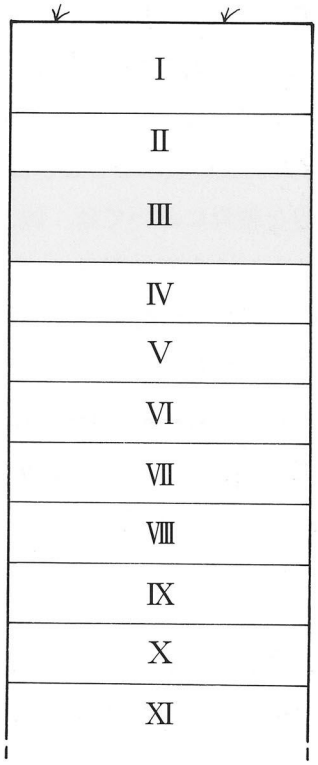
Ⅶ層：明黄褐色土　基層はローム層であり、粘性が高い。含水量により硬度が大きく変わる。霧島小林軽石を多く含む。

Ⅷ層：明褐色土　粘性の高いローム層である。炭化微粒と小林軽石をわずかに含む。

Ⅸ層：明黄褐色土　粘性が高く、柔らかなローム層である。粒子が細かく、パミス・スコリアをほとんど含まない。

Ⅹ層：明褐色土　Ⅺ層よりもやや暗い色調で、粒子もやや粗くざらついた感触である。

Ⅺ層：淡黄褐色土　やや土壌化したシラス（姶良火山入戸火砕流）である。５mm程度のパミスを疎らに含む。粘性は低く、粒子の粗いザラザラした感触である。



第３図　基本土層柱状模式図

第４節　報告書の記述について

県教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施した遺跡は、３か年で５遺跡（６地点）である。報告書については、その資料の膨大さと整理作業の進捗状況を考慮し、２巻に分けて年次的に刊行することとなった。本書はその第１巻であり、平成６年度調査の「上の原第３遺跡」のみを報告する。報告書の執筆・編集にあたっては各調査担当者がその責を負うが、記載・記述に関しての基本方針を明確にしておく必要があろう。以下、本書及び第２巻（平成12年３月刊行予定）について若干の説明を付す。

（1）遺構

遺構の略号は次のとおりとする。

ＳＡ　竪穴住居　　ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＣ　土坑　　ＳＤ　土壙墓　　ＳＥ　溝状遺構

ＳＩ　集石遺構

遺構図のスケールは、原則として竪穴住居跡１／60、土坑１／40、集石遺構１／30とし、分布図については１／500 を基本とする。

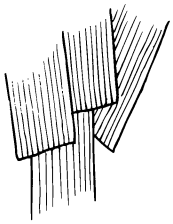
方位は座標北・磁北を用い、それぞれG.N.・M.N.で表記する。レベルは海抜絶対高である。

（2）遺物

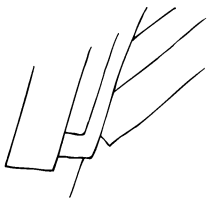
遺物実測図のスケールは、原則として縄文土器・須恵器・古代の坏皿類を１／３、弥生土器・土師器を１／４とする。鉄器・石器類は１／２を基本とし、小型の打製石器を３／５（60%）、大型の石皿等を１／４とする。須恵器の断面は黒塗りする。

土器実測図の調整表現は以下のとおりとする。ナデ調整は特に単位が明瞭な場合以外は図示しない。

ミガキ

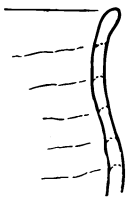


ハケ目

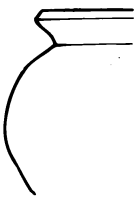


工具ナデ・ケズリ

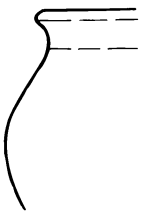
指オサエ（指ナデ）



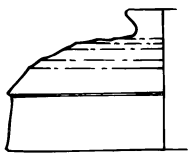
接合痕
（粘土の継ぎ目）



明瞭な稜線



やや曖昧な稜線



回転ケズリ

（3）観察表・計測表

土器観察表・石器計測表は、報告書掲載のもののみ作成した。土器の色調は『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修）に拠った。法量の（　）は現存値である。

第Ⅲ章　上の原第３遺跡の調査

第１節　調査の概要

１　調査の経過

調査対象面積は15,500m^{2}である。重機により表土を除去し、アカホヤ火山灰（第Ⅲ層）上面で遺構検出を行った。Ⅲ層上面は、旧地形にそって南東から北西方向に緩やかに傾斜しており、調査区西寄り約４分の１程の地点で畑の区画境の段落ちが見られた。比較的高位な部分では、表土下にⅣ～　層が表出し、畑地造成の際の地形改変が読み取れた。

Ⅲ層上面で検出された顕著な遺構としては、竪穴住居跡10基がある。全て調査区西半部に検出され、２基が切り合いを見せたものの、他は近接することなく散漫な分布状況であった。３号住居跡は、調査区北縁に約３分の１が検出され、残りは舗装道路下に延びていたため全体を調査することができなかった。また、６号住居跡は旧畑地境の段落ち部に検出されたため、西側壁が検出されず正確なプランを把握できなかった。

検出された10基の住居跡は、全て方形プランで、ほとんどのものが４本柱である。遺物の出土状況は各住居毎に差が見られ、比較的完形に近いものが床面付近から多数出土したものと、小破片のみが床面から浮いた状態で出土したものが見られた。いずれの住居跡も炉跡（火処）は明確でなく、６号住居跡に床面の被熱痕と、９号住居跡で床面中央に焼土の高まりが見られたのみである。

竪穴住居跡以外には顕著な遺構は確認されていない。土坑状の掘り込みが多数見られたが、遺物の出土はなく、埋土も畑耕作土に近似した灰褐色の濁ったもので、後世の耕作に伴うものと判断された。

Ⅲ層検出の竪穴住居跡の調査を終了した時点で、アカホヤ下層（縄文早期）の調査について検討を行った。農地整備施工上、盛土あるいは現状の高さが維持される調査区西半部についてはⅣ層以下の調査を除外し、切り土施工の東半部のみを対象とした。また、調査期間の制約上、東半部全面を４層以下まで掘り下げることが困難であったため、遺憾ながらトレンチにて遺構・遺物が確認された部分のみを掘り広げることとした。その結果、集石遺構９基と礫群２ヵ所が検出され、貝殻文円筒形土器を主体とする土器、石鏃・スクレイパー等の石器が出土した。制約の多いなか、遺構・遺物ともに断片的な資料を得たに過ぎないが、小谷を挟み対峙する上の原第１・第２遺跡や白ケ野遺跡の当該時期資料と比較検討することによって、調査の不備を埋め本遺跡の縄文早期像の輪郭を浮かび上がらせることも可能であると考えている。

２　層序

上の原第３遺跡の基本層序は、時屋地区の他の遺跡と大きく異なることはない。表土（耕作土）下に黒色土（第Ⅱ層）の堆積が見られたものの非常に薄く、包含遺物の時期による分層把握は困難であった。部分的には表土直下にアカホヤ火山灰（第Ⅲ層）やその下層が表出する箇所も見られた。アカホヤ火山灰は一次堆積で、約20～30cmの厚みが見られた。アカホヤ下の黒褐色土（第Ⅳ層）、暗褐色土（第Ⅴ層）は縄文時代早期の遺物包含層であり、礫群・集石が検出されている。

第4図　上の原第3遺跡　遺構分布図（1／500）

第２節　調査の記録

検出された遺構・遺物を、調査の進行に従いⅢ層検出のもの（古墳時代）、Ⅳ層以下検出のもの（縄文時代早期）の順に記述する。表土（耕作土）中からの出土遺物、明らかに所属時期の異なる遺構への流れ込みについては、最後に一括した。なお、掲載した遺物については観察表・計測表を作成した。個別遺物の観察所見はそちらを参照されたい。

１　Ⅲ層上面検出の遺構・遺物（古墳時代）

竪穴住居跡を10基検出した。遺構番号は、プランを確定し竪穴住居と認定し得た順に付している。

１号住居跡（第５図）

１号住居跡は、調査区北縁ほぼ中央に検出した。5.5×5.1ｍの方形プランで、検出面からの深さ50cmを測る。主柱穴は方形配置の４基で、床面には貼り床が見られたが、柱穴で囲まれる床面中央部は貼り床が見られず浅い土坑状の落ち込みとなった。また、西壁中央に張り出し部が、南壁沿中央に土坑状の落ち込みとその左側に灰白色土による土壁が検出された。後者はその構造からカマドと推定されたが、被熱による変色や炭化物・焼土等は見られなかった。構築途中で放棄された可能性もあろうか。住居埋土はレンズ状の堆積を見せ、遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した（第６・７図）。

１～４は甕である。１・４は住居北東隅、２は北東ピット横で、それぞれ床面直上に倒位で出土した。頸部に稜を持たず、口縁は緩やかに外半する。器面調整はナデ・ハケ目で、粘土の輪積み痕を残す。底部は、やや丸みのある厚手の平底と径の小さな平底が見られる。

５・６は壺である。ともに埋土３層からの出土で、住居の半分以上が埋まった時点での流れ込みと考えられる。５は刻み目貼付け突帯を有し、刻み内に布の圧痕が認められる。６は、やや突出する小さな平底を呈す。

７～14は坏である。大きく２つのタイプに分けられる。平底で口径のやや小さなもの（７～10）と、丸底で口径のやや大きなもの（11～14）である。前者にはナデ・ハケ目調整が、後者にはミガキが施され、口縁部は短く内湾する。11・12は、床面から若干浮いた位置で伏せた状態で出土している。

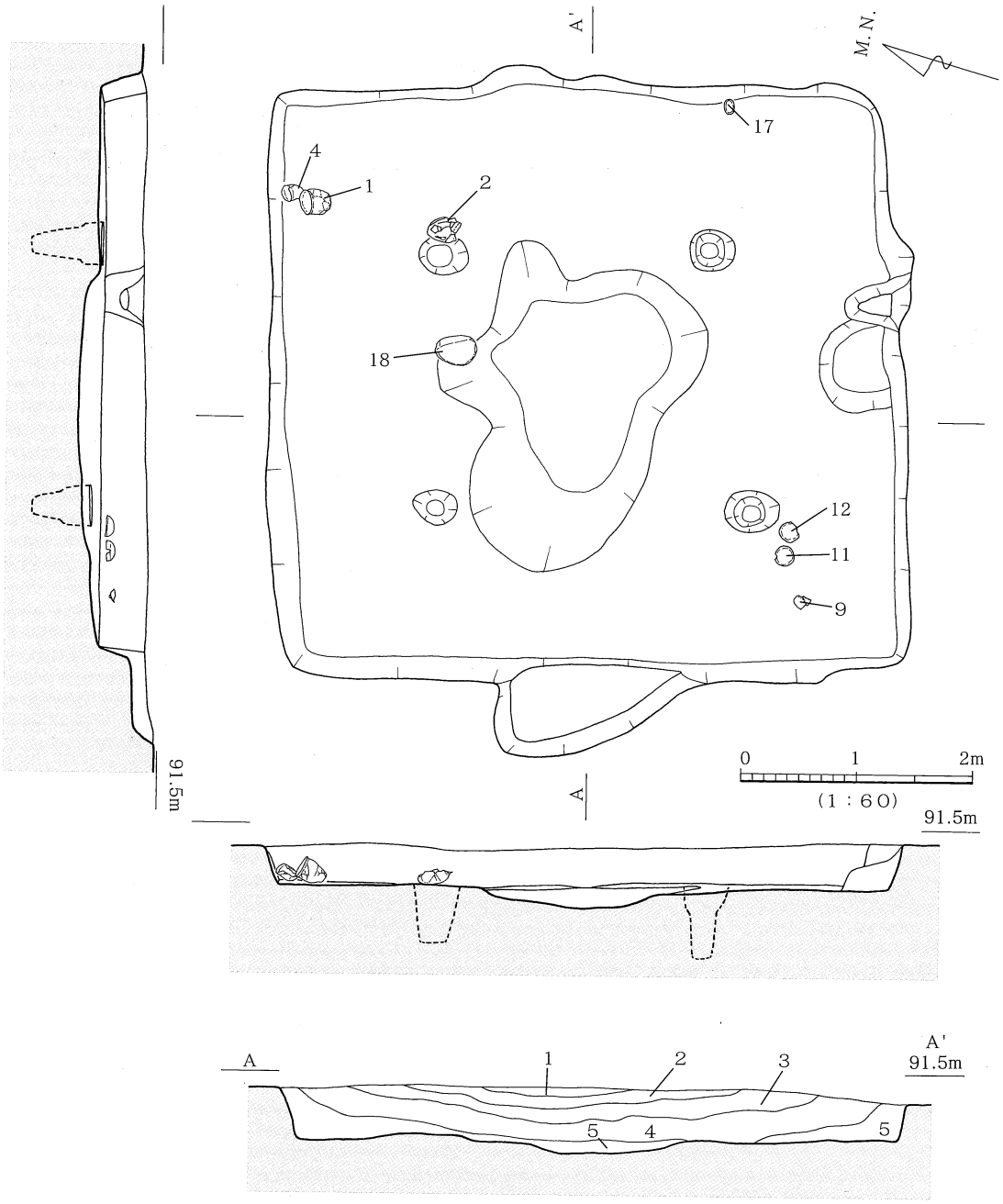
15は須恵器の坏蓋である。口縁端部に段を持ち、天井部と口縁部の境に１条の沈線が見られる。ＴＫ10に相当する。

16は円盤状高台を有す古代の坏で、埋土上位に流れ込むかたちで出土した。高台は左右に張り出し、体部にはロクロ成形の稜線を明瞭に残す。

17は尾鈴山系酸性岩の磨石、18は砂岩の石皿で、ともにほぼ床面上から出土した。

２号住居跡（第８図）

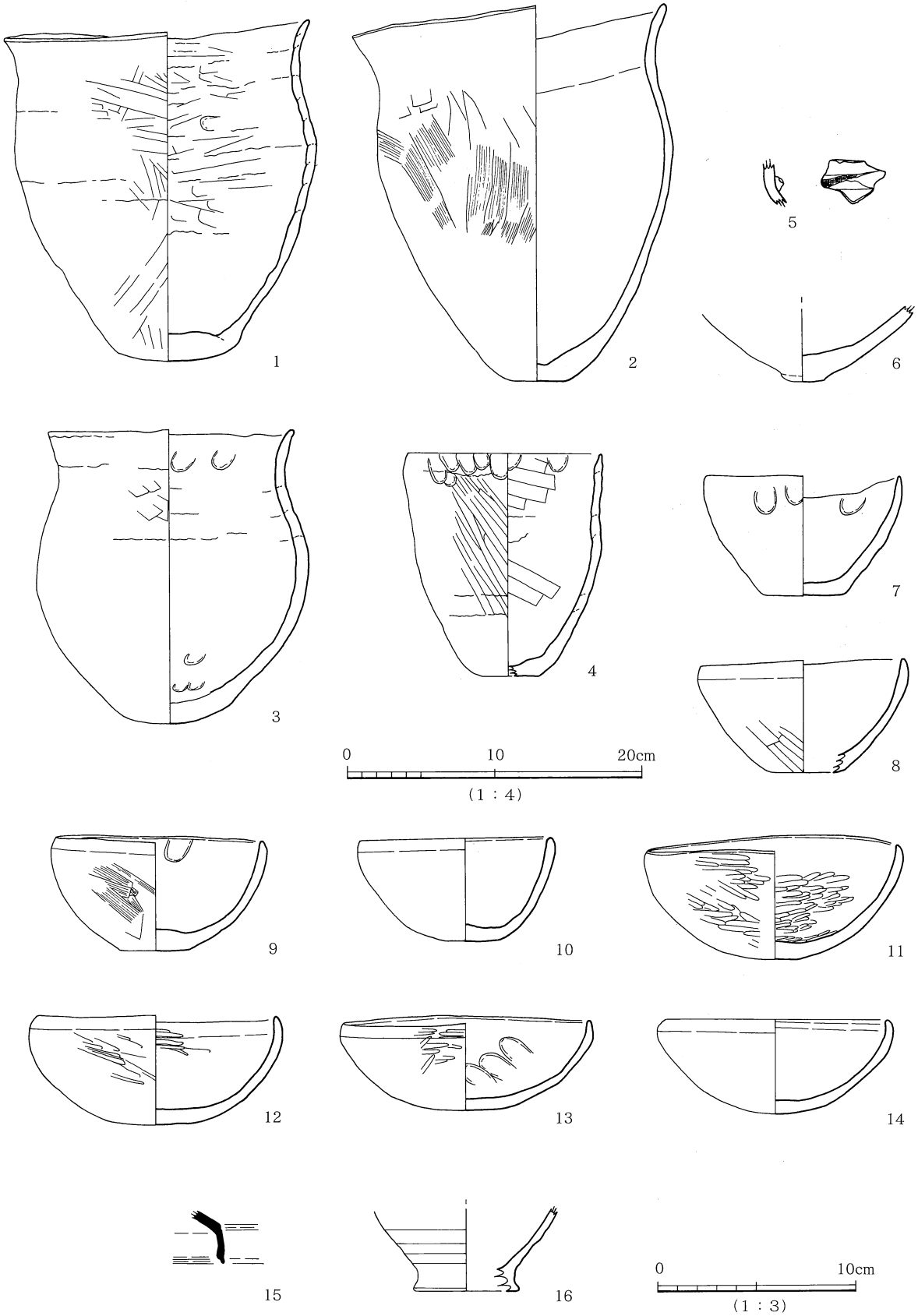
１号住居跡の西側約６ｍの位置に検出した。一辺約6.5　ｍの方形プランで、検出面からの深さは約80cmを測る。主柱穴は４基。床面には貼り床が見られたが、住居中央部では硬化面が不明瞭となり、やや軟質の土を除去すると、柱穴を囲む範囲よりも一回り大きな段落ちとなり、東を除く三方がベッド状となった。炉跡や焼土は見られなかった。埋土はレンズ状の堆積を見せ、床面直上や10～20cm浮いた状況で多くの遺物が出土している。住居南東隅では、完形の高坏が３個体床面直上で出土している（逆立位２、倒位１）



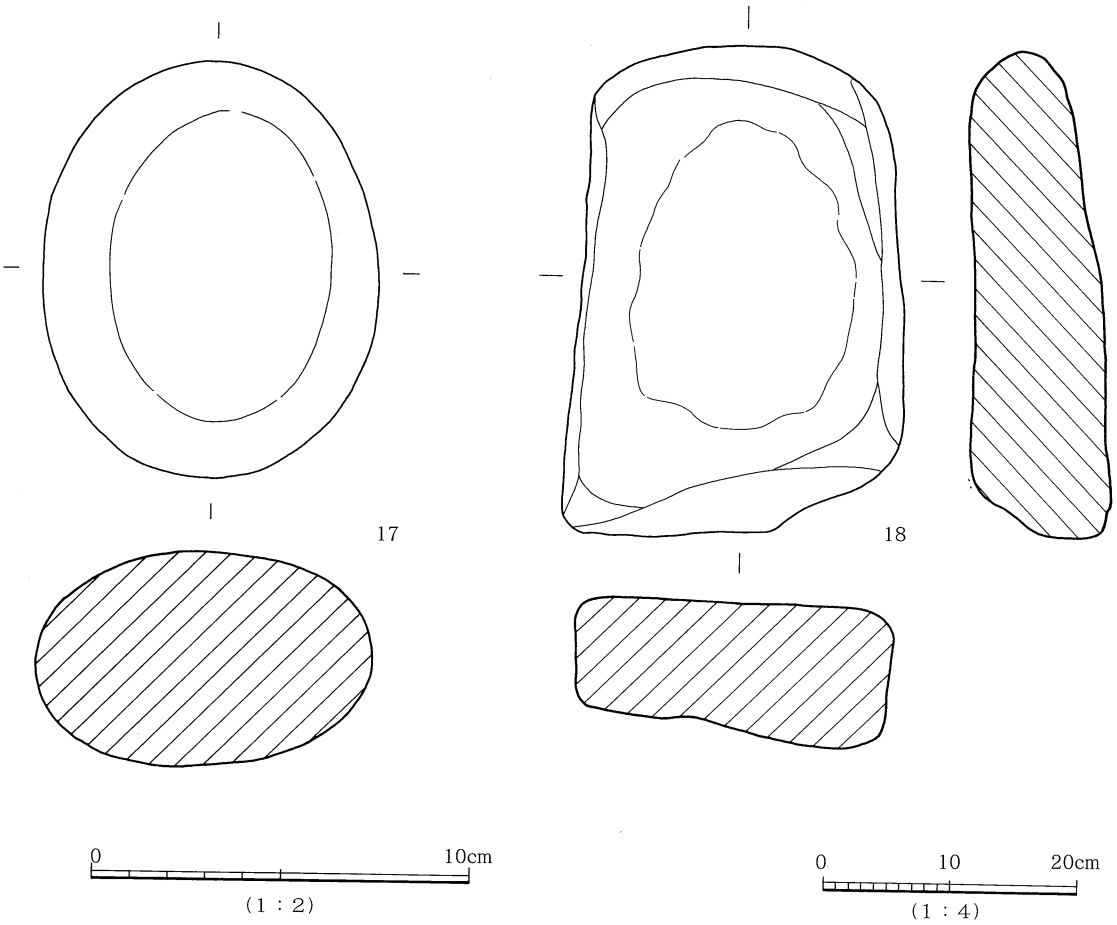
1号住居跡埋土土層注記

1　黒褐色土　白・橙色のパミス（1～3mm）を含む。
2　暗褐色土　砂質。橙色のパミス含む。
3　暗褐色土　炭化物細粒を多く含む。
4　淡褐色土　砂質。炭化物粒を含む。土器片が多く混入。
5　褐色土　炭化物粒含む。完形土器はこの層から出土する。暗褐色ブロック（やや硬）を部分的に含む。

第5図　1号竪穴住居跡（1/60）



第６図　　1号竪穴住居跡出土土器（15・16は1/3、他は1/4）



第７図　　1号竪穴住居跡出土石器（17は1/2、18は1/4）

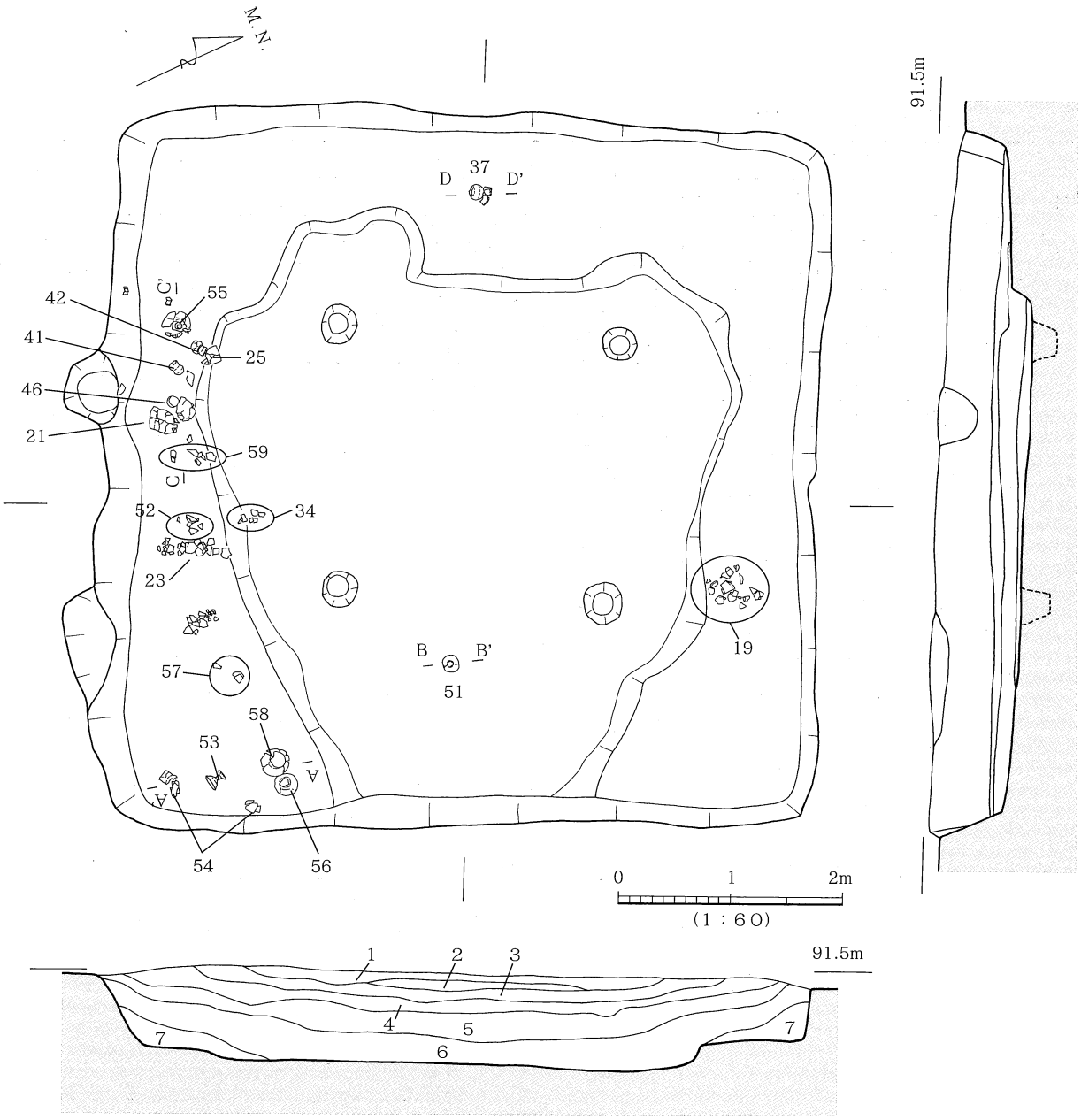
（第９～13図）。住居中央東寄りに出土した高坏はかなり浮いた状態であるが、レベル的には南東隅の高坏群と等しく、住居の床面を掘り過ぎた可能性もある。そうなると、住居床の段落ち部は方形となり四方がベッド状となることになる。

19～33は甕である。形態的にいくつかのタイプが見られる。屈曲する頸部に稜が見られ、口径と胴部最大径がほぼ等しいもの（19～21）。頸部屈曲が緩やかで、貼付け突帯を持つもの（23）。頸部屈曲がさらに小さくなり稜を持たず、胴部最大径が口径をやや上回るもの（24・25）。口縁部のみを見ても、直線的に延びるもの、外半するもの、先細りするものなど、いくつかの形態が見られる。底部は尖底気味の小さな平底である。また、図示はし得ないが、タタキを施す甕の小破片がまとまって出土している。

34～46は壺である。34は、球形の胴部に強く屈曲し外半する口縁部が付き、刻み目貼付け突帯を持つ。調整は丁寧なナデである。37～40は中型の壺で、球形・扁球形・倒卵形のものが見られる。37は丸底、39・40は平底である。41～46は平底の小型壺である。形態はそれぞれに異なり、41は大きく開く口縁部に肩張りの胴部、42はやや内湾する口縁部に扁球胴、45・46は底径が小さく球形の胴部となる。41・46は、底部外面に凹みを有する。

第１表　上の原第３遺跡出土土器観察表（１）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
1	土師器	甕 完形	SA1	20.7	7.2	22.4	横・斜方向のナデ 粘土の継ぎ目　スス付着	横・斜方向のナデ 粘土の継ぎ目　指頭痕　黒斑	にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の茶褐色　灰色の粒	
2	土師器	甕 完形	SA1	21.3	4.1	25.6	ナデ　ハケ目 粘土の継ぎ目　スス付着	ナデ	橙	橙	5mm以下の暗褐　灰褐の粒	
3	土師器	甕 完形	SA1	16.6	5.6	20.2	横・斜方向のナデ　粘土のかえり 粘土の継ぎ目　スス付着	横ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目	にぶい橙 褐	にぶい黄橙	4mm以下の黄褐　黒褐の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
4	土師器	甕 口縁～底部	SA1	13.1	4.2	15.2	斜方向のナデ　粘土の継ぎ目 指頭痕　スス付着	横・斜方向のナデ 粘土の継ぎ目　指頭痕	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の黄灰　褐色　乳白色 黒の砂粒	
5	土師器	甕 頸部	SA1				ナデ 刻み目突帯（布痕）	ナデ　風化気味	にぶい橙	橙	2mm以下の赤色の粒 1.5mm以下の黒色　透明光沢粒	
6	土師器	壷 胴部～底部	SA1		2.9		ナデ　工具痕	ナデ	橙	橙	1mm以下の黒褐色　灰褐色の砂粒 微細な透明光沢粒	
7	土師器	鉢 口縁～底部	SA1	13.0	5.6	8.1	ナデ　工具ナデ 指頭痕	ナデ　指頭痕	にぶい橙	橙	2mm以下の褐・灰・乳白色の砂粒	
8	土師器	坏 口縁～底部	SA1	13.8	5.3	7.5	ナデ　工具痕 黒斑	ナデ　黒斑	橙	橙	2.5mm以下の赤褐色 灰色の砂粒	
9	土師器	坏 完形	SA1	13.9	4.9	7.8	横ナデ　工具痕 ハケ目	ナデ　指頭痕	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の褐色・灰褐色・灰白色の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
10	土師器	坏 口縁～底部	SA1	12.8	4.4	6.9	ナデ	横ナデ	橙 にぶい橙	橙	2mm以下の茶・灰・褐色の砂粒	
11	土師器	坏 完形	SA1	16.8	2.5	8.4	ミガキ	ミガキ	橙	橙	2mm以下の赤褐・灰色の砂粒	
12	土師器	坏 完形	SA1	16.2	5.6	7.5	ミガキ　ナデ　黒斑	ミガキ　黒斑　ナデ	にぶい黄橙 橙	橙	2mm以下の乳白色の砂粒 1.5mm以下の透明・黒色光沢粒	
13	土師器	坏 完形	SA1	16.7	5.8	6.4	ミガキ　ナデ　黒斑	ミガキ　ナデ　黒斑 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい橙	1.5mm以下の灰褐色の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
14	土師器	坏 口縁～底部	SA1	15.0	5.2	6.4	ナデ	ナデ　ミガキ　指頭痕	橙	橙	2mm以下の褐色・灰・黒の砂粒	
15	須恵器	蓋 口縁	SA1				ナデ	ナデ	灰	灰	精良	
16	土師器	坏 体部～底部	SA1		5.2		ナデ　円盤状高台	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の灰色の砂粒	
19	土師器	甕 口縁～底部	SA2	26.3		33.8	横ナデ　スス付着	横・斜方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 黄灰	4.5mm以下の褐色・黒の粒 1mm以下の透明光沢粒	
20	土師器	甕 口縁～頸部	SA2	22.1			ナデ　スス付着	ナデ　スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の透明光沢粒	
21	土師器	甕 口縁～底部付近	SA2	20.8			横ナデ　ハケ目 指頭痕　黒変　スス付着	横ナデ　工具ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい橙	0.5mm以下のにぶい赤褐・灰黄の砂粒 0.5mm以下の透明・黒色光沢粒	
22	土師器	甕 口縁～頸部	SA2	22.9			横ナデ　スス付着	横ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	橙	3mm以下の黒・褐・灰白色の砂粒	
23	土師器	甕 口縁～底部付近	SA2	21.3			ナデ　刻み目突帯　黒斑	ナデ　黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の黒・褐・ にぶい黄橙・灰白色の砂粒	
24	土師器	甕 口縁～胴部	SA2	22.1			ナデ　スス付着	ナデ　工具痕　指頭痕 粘土の継ぎ目　黒変	浅黄	浅黄	3mm以下の灰褐・黄褐の砂粒	
25	土師器	甕 口縁～胴部	SA2	25.4			ナデ　刻み目突帯　スス付着	ナデ　粘土の継ぎ目	浅黄	灰黄	2.5mm以下の黒色光沢粒 1mm以下の透明光沢粒	
26	土師器	甕 口縁	SA2				ナデ	風化気味	浅黄橙	黄橙	3mm以下の黒・乳白色の砂粒 1mm以下の透明・黒色光沢粒	
27	土師器	甕 口縁	SA2				工具ナデ	工具ナデ	灰黄	灰白	2mm以下の黒・灰色の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
28	土師器	甕 口縁	SA2				ナデ　スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の黄灰・灰褐の粒	
29	土師器	甕 口縁～胴部	SA2				ナデ	ナデ　粘土の継ぎ目	にぶい黄橙	暗灰黄 橙	4.5mm以下の暗灰黄色の粒 2.5mm以下の褐色の砂粒	
30	土師器	甕 口縁	SA2				ナデ　スス付着	ナデ	灰黄	にぶい黄橙	1mm以下の透明光沢粒	
31	土師器	甕 口縁	SA2				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙 灰黄	1mm以下の黒の砂粒	
32	土師器	甕 口縁	SA2				ナデ　スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰色・黒の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
33	土師器	甕 口縁～頸部	SA2				ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	4mm以下の褐・灰白色の砂粒	
34	土師器	壷 口縁～胴部	SA2	15.1			ナデ　刻み目突帯 工具痕　スス付着	ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目	橙 黄灰	橙 黄灰・灰	1.5mm以下の褐・赤褐色の砂粒　透明光沢粒 3mm以下の柱状の黒色光沢粒	
35	土師器	壷 頸部～胴部	SA2				ナデ　スス付着	ナデ　粘土の継ぎ目	浅黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の灰色と光沢の砂粒	
36	土師器	壷 胴部	SA2				ハケ目　黒斑	ナデ	灰黄	灰白	1mm以下の黒の砂粒	
37	土師器	壷 口縁～底部付近	SA2	12.3			ナデ　ハケ目　黒斑	ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目　黒斑	橙	黄橙 暗黄灰	1.5mm以下の黒灰色　2.5mm以下の 乳白色の砂粒　光沢粒	
38	土師器	壷 口縁	SA2	14.5			横・斜方向のナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の黄褐色の砂粒	
39	土師器	壷 胴部～底部	SA2		5.2		ナデ　ミガキ	ナデ　粘土の継ぎ目	明黄褐	明黄褐	3mm以下の茶色・黒色光沢粒 1mm以下の透明光沢粒	
40	土師器	壷 口縁～胴部	SA2	11.3			横ナデ　黒斑	ナデ　ハケ目	黄橙	淡黄	1.5mm以下の黒色光沢粒 1mm以下の茶色の砂粒	
41	土師器	壷 完形	SA2	9.8	5.2	10.9	ナデ　指頭痕　黒変	ナデ　指頭痕	にぶい黄橙	橙	3mm以下の黒色光沢粒 灰褐・灰白・黄褐・黒褐・無色透明の粒	
42	土師器	壷 口縁～底部	SA2	7.8	5.9	10.4	ナデ	ナデ　指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の透明・灰白・黒い砂粒	
43	土師器	壷 口縁	SA2				横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1.5mm以下の灰と黒の砂粒	
44	土師器	壷 口縁	SA2				ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の褐色の砂粒	



2号住居跡埋土土層注記

1　黒褐色土　しまりなく、乾燥すると脆く崩れる。白のパミス（1～3mm）を含む。
2　黒褐色土　白・橙色のパミス（1～3mm）を含む。
3　暗褐色土　砂質。橙色のパミス含む。
4　暗褐色土　炭化物細粒を多く含む。
5　淡褐色土　砂質。炭化物粒を含む。
6　褐色土　炭化物粒含む。完形土器はこの層から出土する。暗褐色ブロック（やや硬）を部分的に含む。
7　暗褐色土　アカホヤブロック、炭化物粒を含む。

第8図　2号竪穴住居跡（1/60）

47・48は鉢で、粗いナデ調整である。

51～65は高坏である。53は倒位で、57・58は逆立位で、北東隅床面直上から出土した。

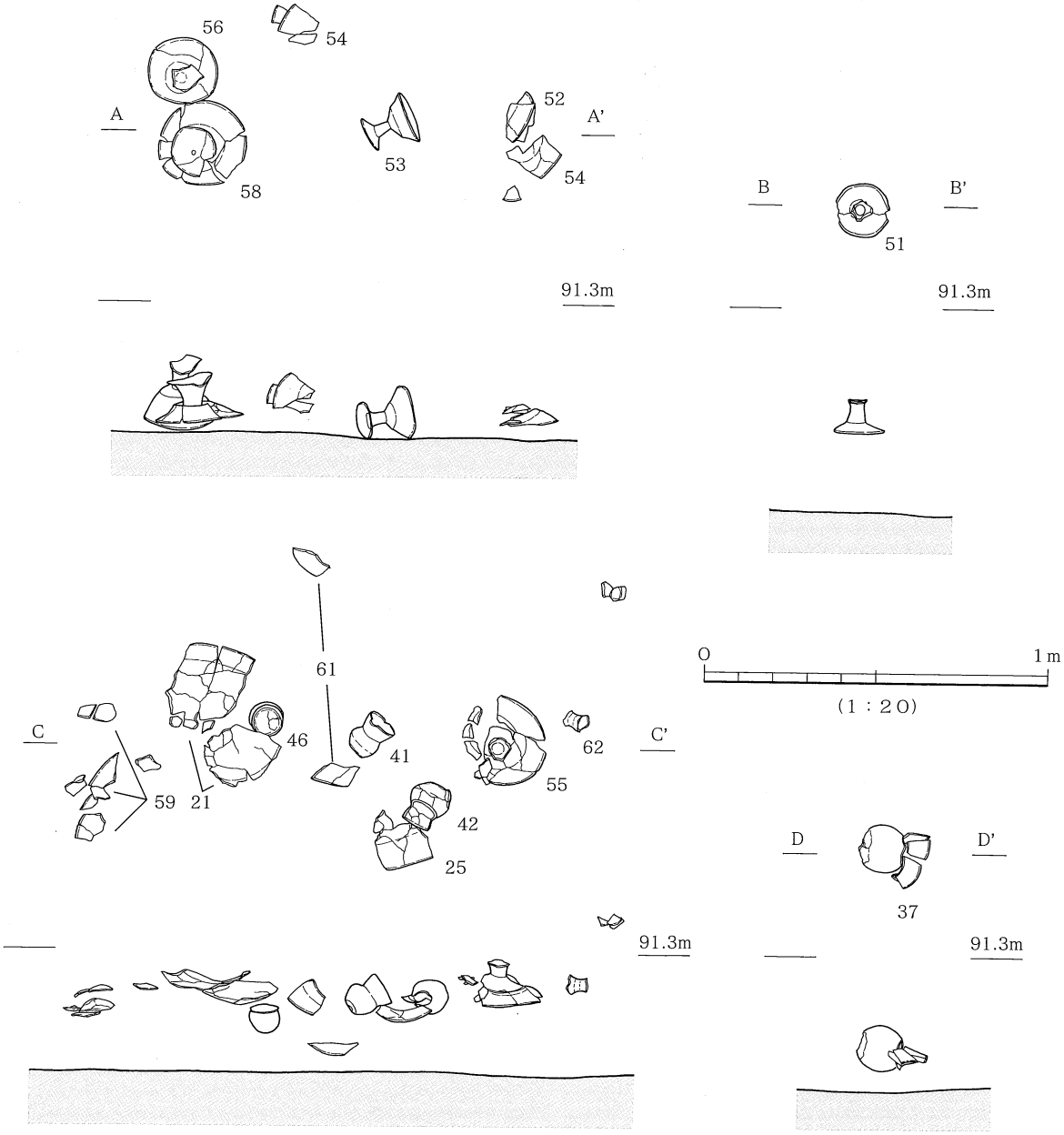
形態的バリエーションが多様であり、坏部と脚部に分けて分類する。

坏部a　浅い体部に直線的な口縁部が付き、稜が明瞭なもの。（51～53）

b　やや深さの有る体部に大きく延びる直線的な口縁部が付くもの。（54～56）

c　やや深さの有る体部に大きく外半する口縁部が付くもの。（57～59）

d　全体に丸みを持ち、稜の不明瞭なもの。（60）



第９図　　2号竪穴住居跡土器出土状況（1/20）

脚部a　やや開き気味の直線的な脚に強く内湾する伏鉢状の裾部が付くもの。（51）

b　やや開き気味の直線的な脚に強く屈曲する直線的な裾部が付くもの。（52・53）

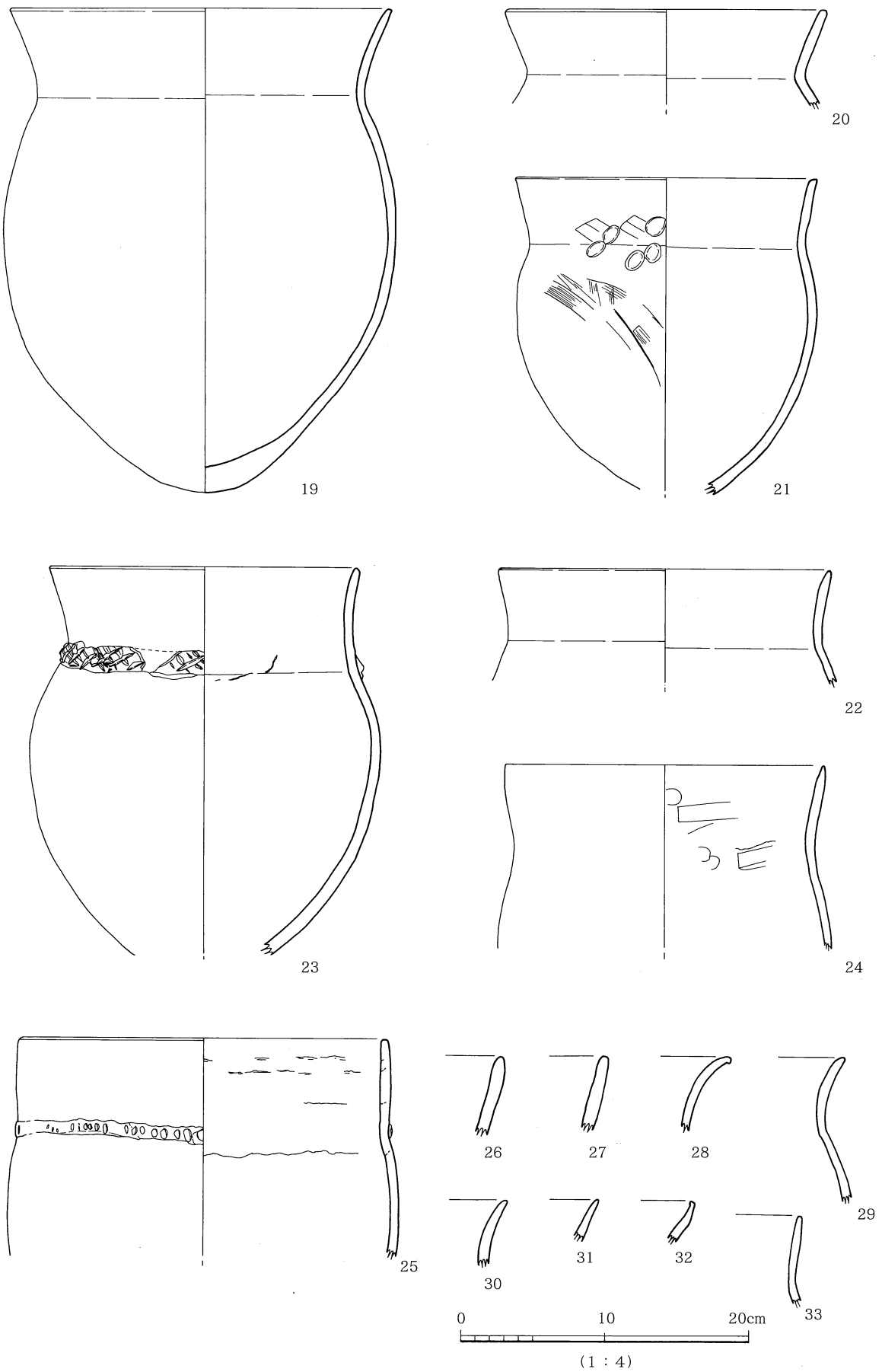
c　滑らかな「八」字形を呈し、裾部との区分が不明瞭なもの。（55・56・58）

さらに、坏部と脚部の接合法には、粘土塊の充填と脚の貼付けの２通りが見られる。

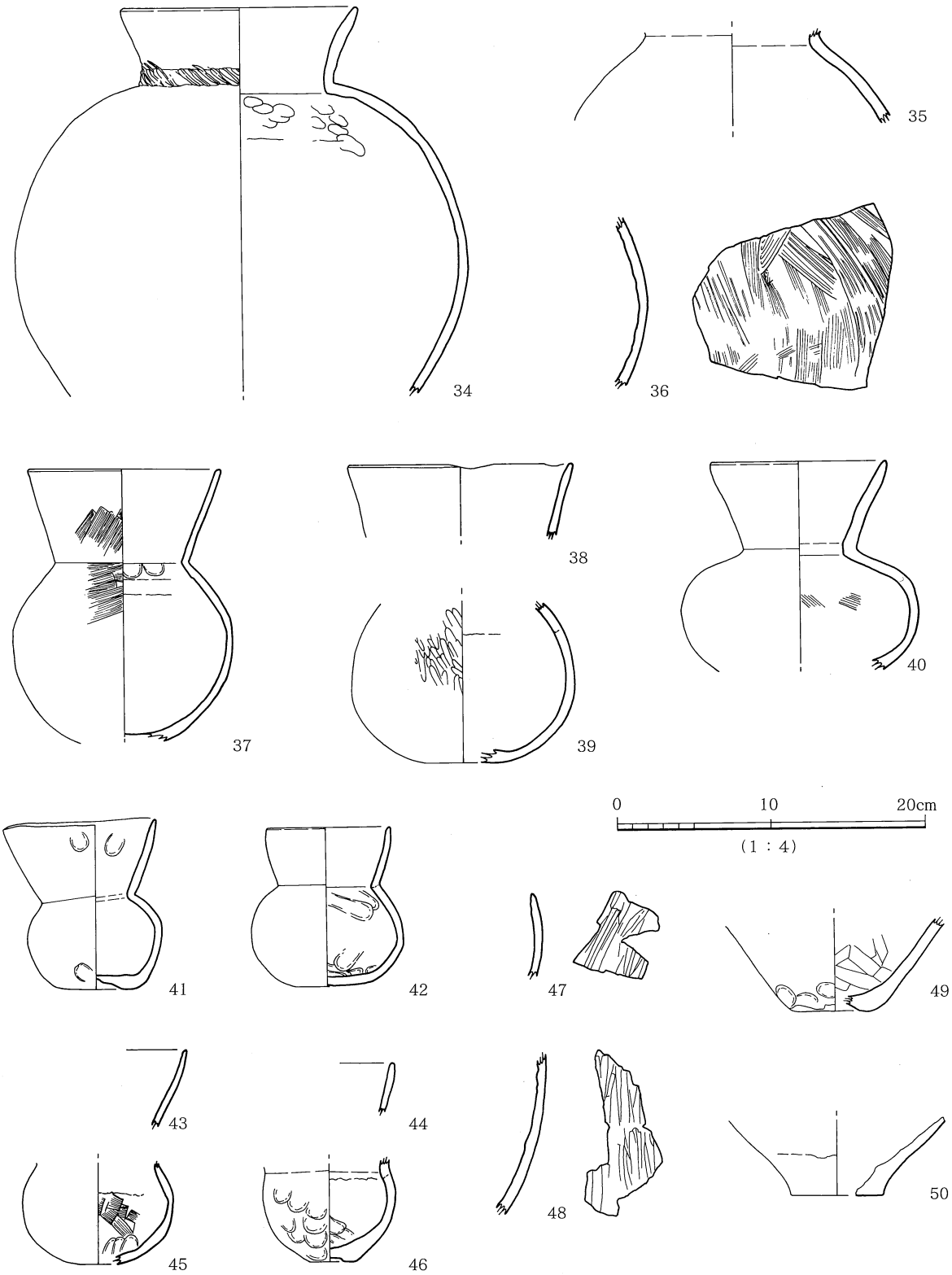
66・67は須恵器である。66は坏身で、たちあがり部のみ残存する。端部には段を残す。ＴＫ47に相当する。67は甕胴部で、外面に平行タタキ、内面は同心円当て具痕をナデ消している。

68は鉄器片である。直線と円弧の組合せから半月形をなすと思われるが、欠損のため全体形は不明である。厚さ２mm。端部は平坦な仕上げで刃部等は確認されない。用途不明である。

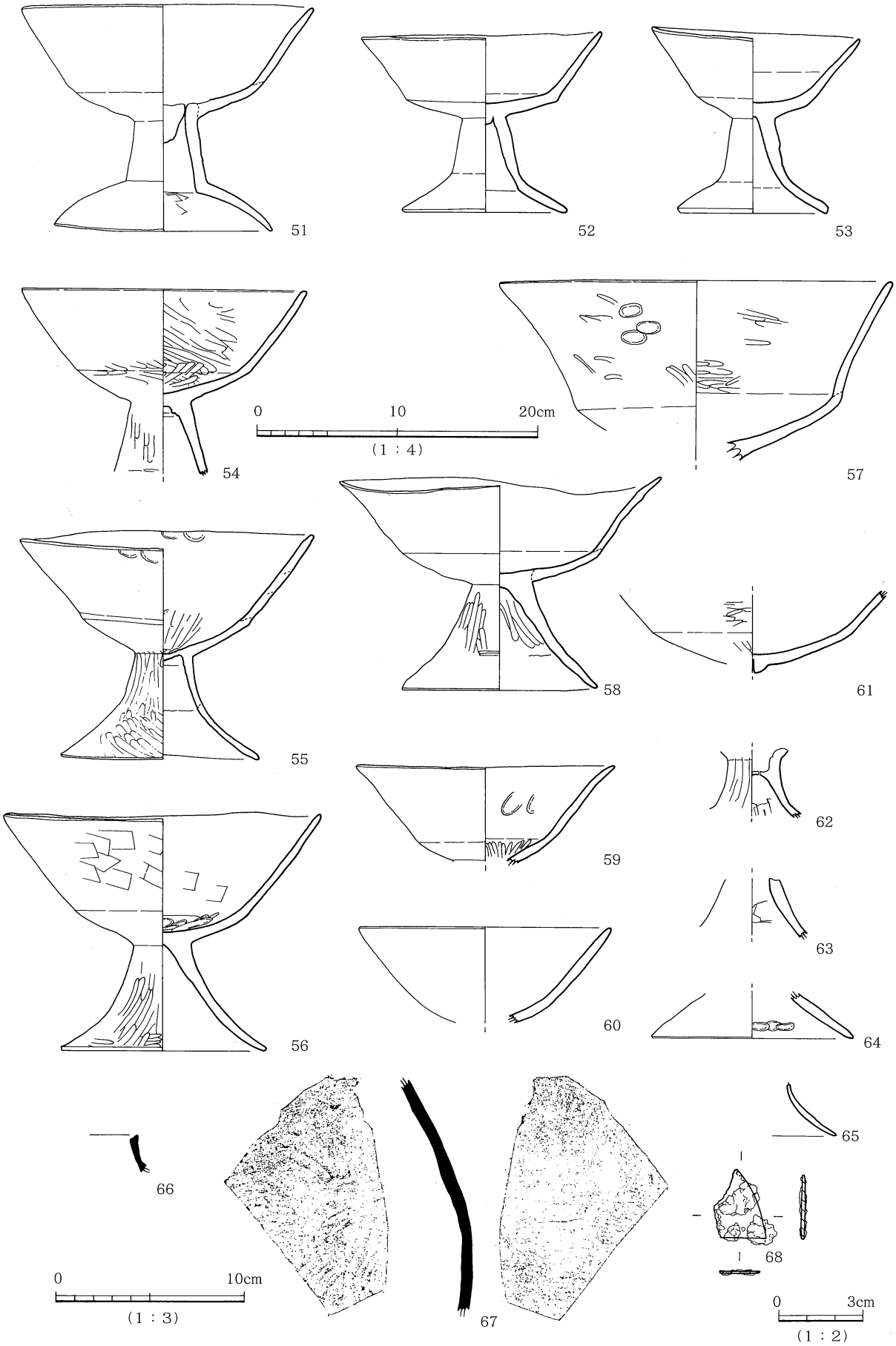
69は砂岩製の磨石で、側端部に敲打痕が見られる。70は頁岩製の打製石斧で、両面からの大まかな剥離をほぼ全周に施している。



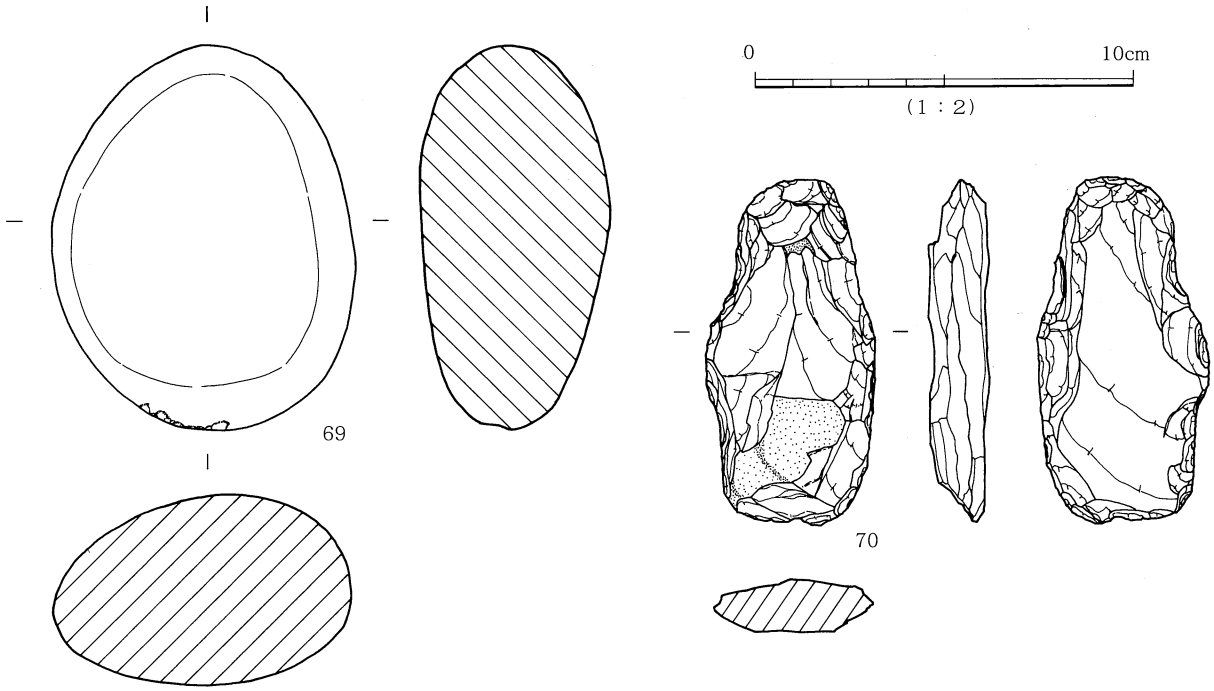
第10図　　2号竪穴住居跡出土土器(1)（1/4）



第11図　　2号竪穴住居跡出土土器(2)（1/4）



第12図　　2号竪穴住居跡出土土器(3)・鉄器（66・67は1/3、68は1/2、他は1/4）



第13図　　2号竪穴住居跡出土石器（1/2）

3号住居跡（第14図）

２号住居跡の北側約５ｍ、調査区外の道路下に逃げるかたちで、プランの約３分の１を検出した。一辺約4.2ｍの方形プランで、検出面からの深さは約１ｍを測る。主柱穴は４基と思われるが、そのうち２基を検出した。貼り床は見られず、焼土・炉跡も確認されなかった。遺物は、床面直上で数点出土した他は、埋土中位の第５層から破片が多数出土した。

71～74は甕である。71～73は、明確な接点がないものの同一個体と思われる。薄手の器壁にタタキが施される。74は、口径が胴部最大径を上回る。

75・76は壺で、接点は見られないものの同一個体と思われる。薄手の器壁で頸部に刻み目貼付け突帯を持つ。77の貼付突帯上の交差刻みには、先行のもの（左下り）のみ布の押圧痕が認められる。

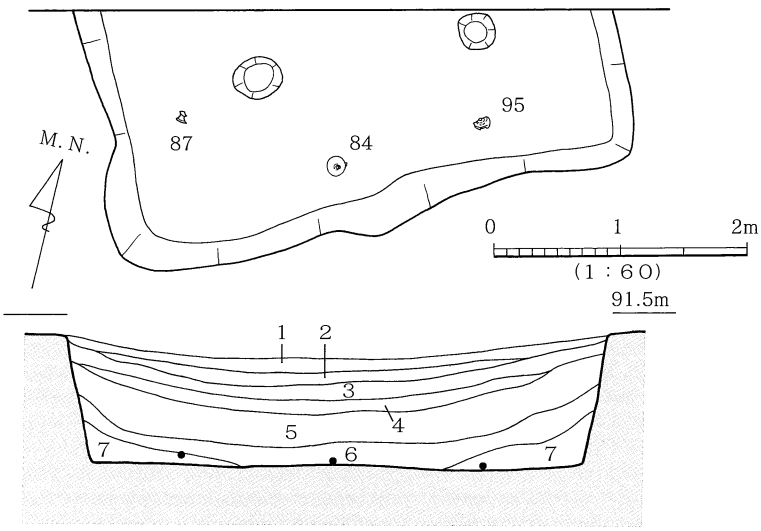
79～82は、小破片のため甕か壺かの判断をし得ない。やや肥厚するもの、先細りのもの、外半し口唇部を外に折り返すものが見られる。

84～86は高坏である。84は、円柱状の脚に伏鉢状の裾部が付く。85は裾部で、内側に屈曲し稜を有す。

87は脚付の鉢で、口縁が小さく外半する。器面は丁寧にミガキが施される。床面直上から出土した。

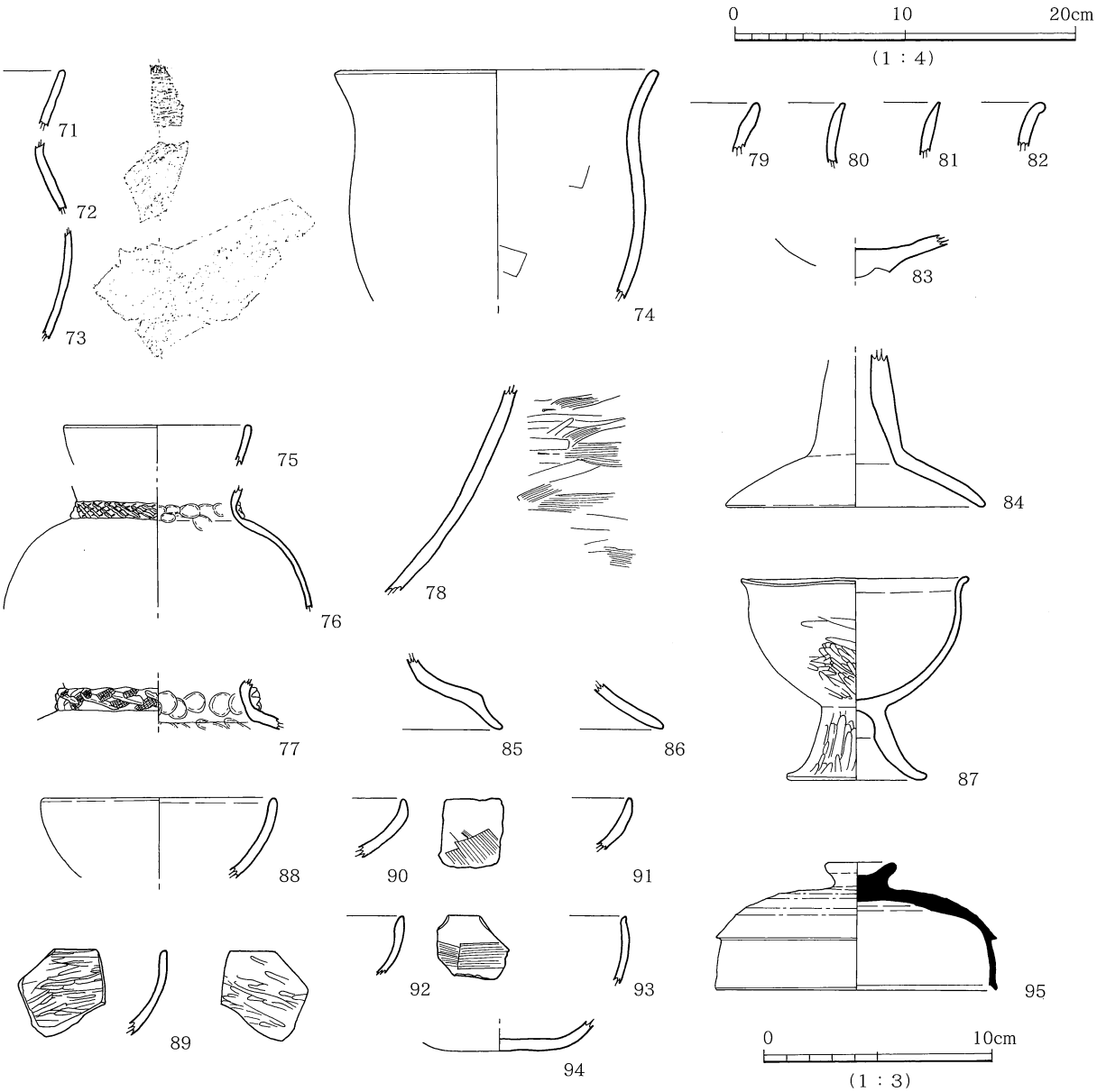
88～94は坏である。体部は一様に丸みを持ち、口唇部を丸く仕上げるもの、口縁部下で短く内湾するもの、先細りの口縁が小さく外半するものなどが見られる。

95は須恵器で、有蓋高坏の蓋である。床面直上から出土している。口径は12.2cmで、鋭い稜と口縁部端の段を有す。つまみを持つ天井部は、その３分の２程度まで回転ヘラケズリが施される。ＴＫ23に相当する。

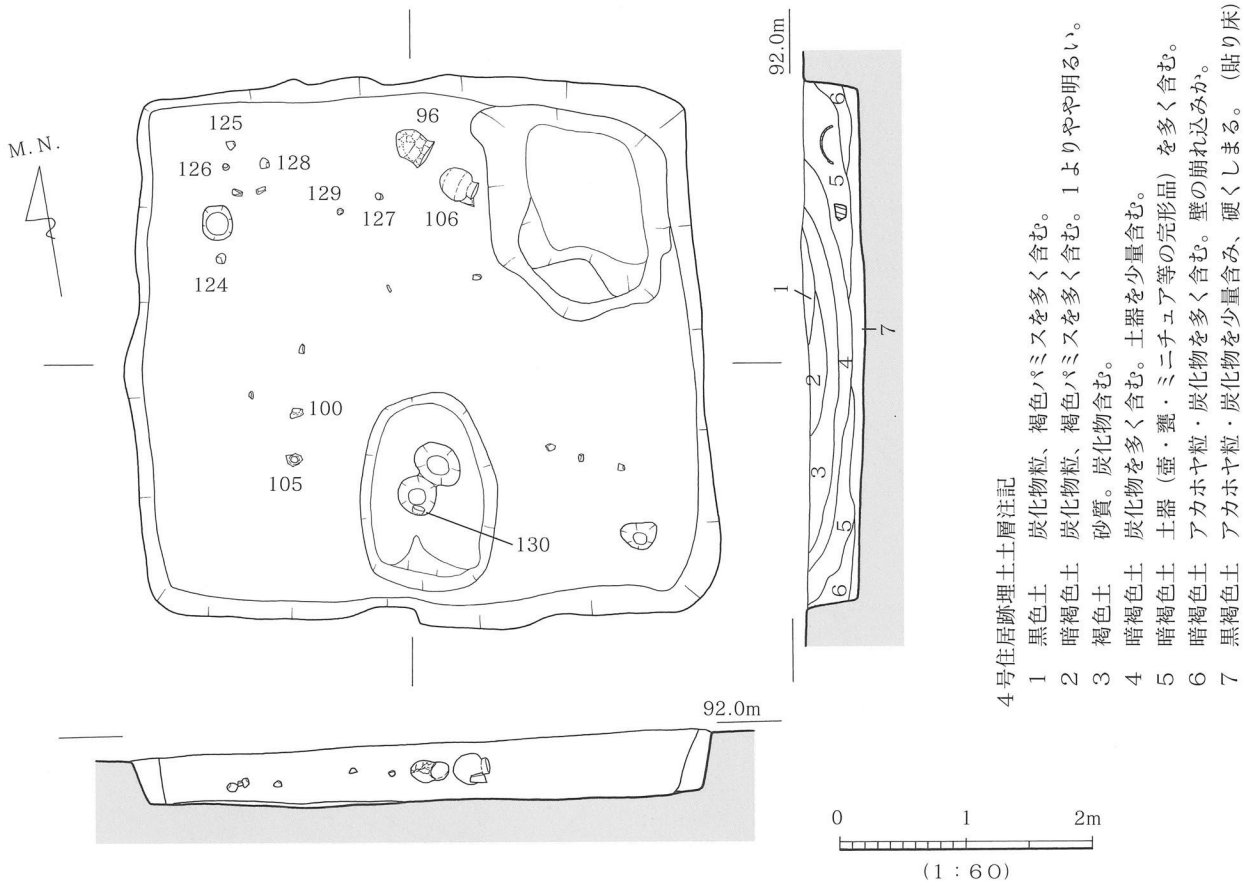


3号住居跡埋土土層注記

1　黒褐色土　しまりなく、乾燥すると脆く崩れる。白色のパミス（1～3mm）を含む。
2　黒褐色土　白・橙色のパミス（1～3mm）を含む。
3　暗褐色土　砂質。橙色のパミス含む。
4　暗褐色土　炭化物細粒を多く含む。
5　淡褐色土　砂質。炭化物粒を含む。
6　褐色土　炭化物粒含む。完形土器はこの層から出土する。暗褐色ブロック（やや硬）を部分的に含む。
7　暗褐色土　アカホヤブロック、炭化物粒を含む。



第14図　3号竪穴住居跡（1/60）、出土土器（95は1/3、他は1/4）



第15図　　4号竪穴住居跡（1/60）

4号住居跡（第15図）

調査区中央南寄りの位置に検出した。4.6×4.4mの方形プランで、検出面からの深さは50cmを測る。床は貼り床で、その上面では柱穴を検出し得なかった。貼り床を除去した時点で、柱穴4基と浅い土坑状の落ち込みを2ヵ所検出した。しかし、柱穴の配置は通有の2本柱や4本柱のような対称的なものではなく、いまひとつ不確定要素を残す。埋土はレンズ状の堆積を示し、貼り床面から多少浮いた状態（第5層中）で、ほぼ完形の甕・壺・ミニチュア土器が出土している。

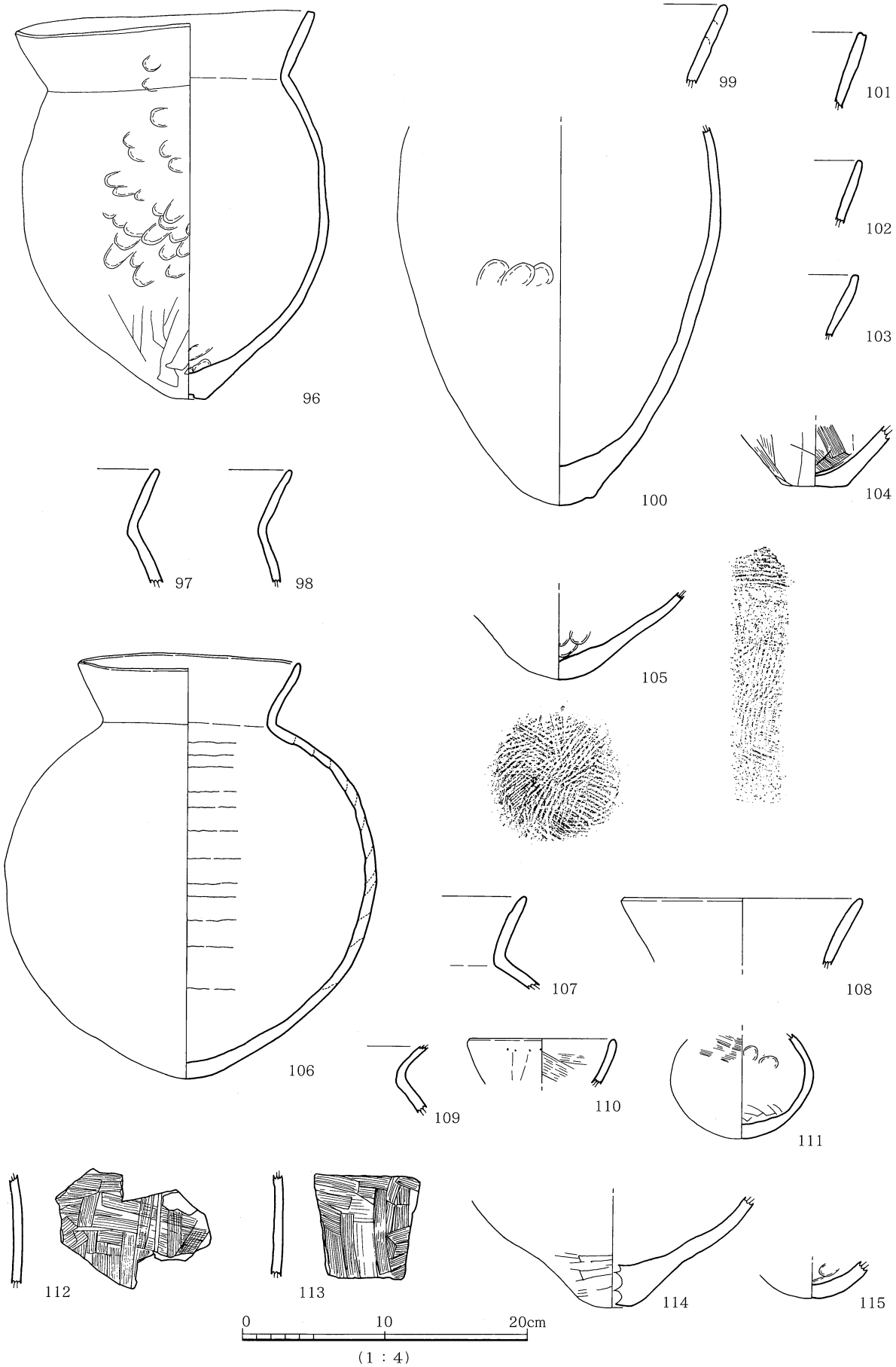
96～105は甕である。96は、明瞭に屈曲する頸部を有し、底部は小さな平底となる。口唇部は平坦に仕上げ、器面調整は粗いナデ、胴部には指頭痕が多く残る。口径と胴部最大径はほぼ等しい。99・100は、接点が見られないものの同一個体と考えられる。長胴で、底部は尖底に近い丸底となる。105は丸底で、底部を含めた外器面にはタタキが施される。

106～115は壺である。106は球胴に尖底に近い小さな平底を持ち、内器面に粘土の輪積み痕を残す。112・113は胴部片で、ハケ目が明瞭に観察される。114は、分厚く突出した小さな平底である。

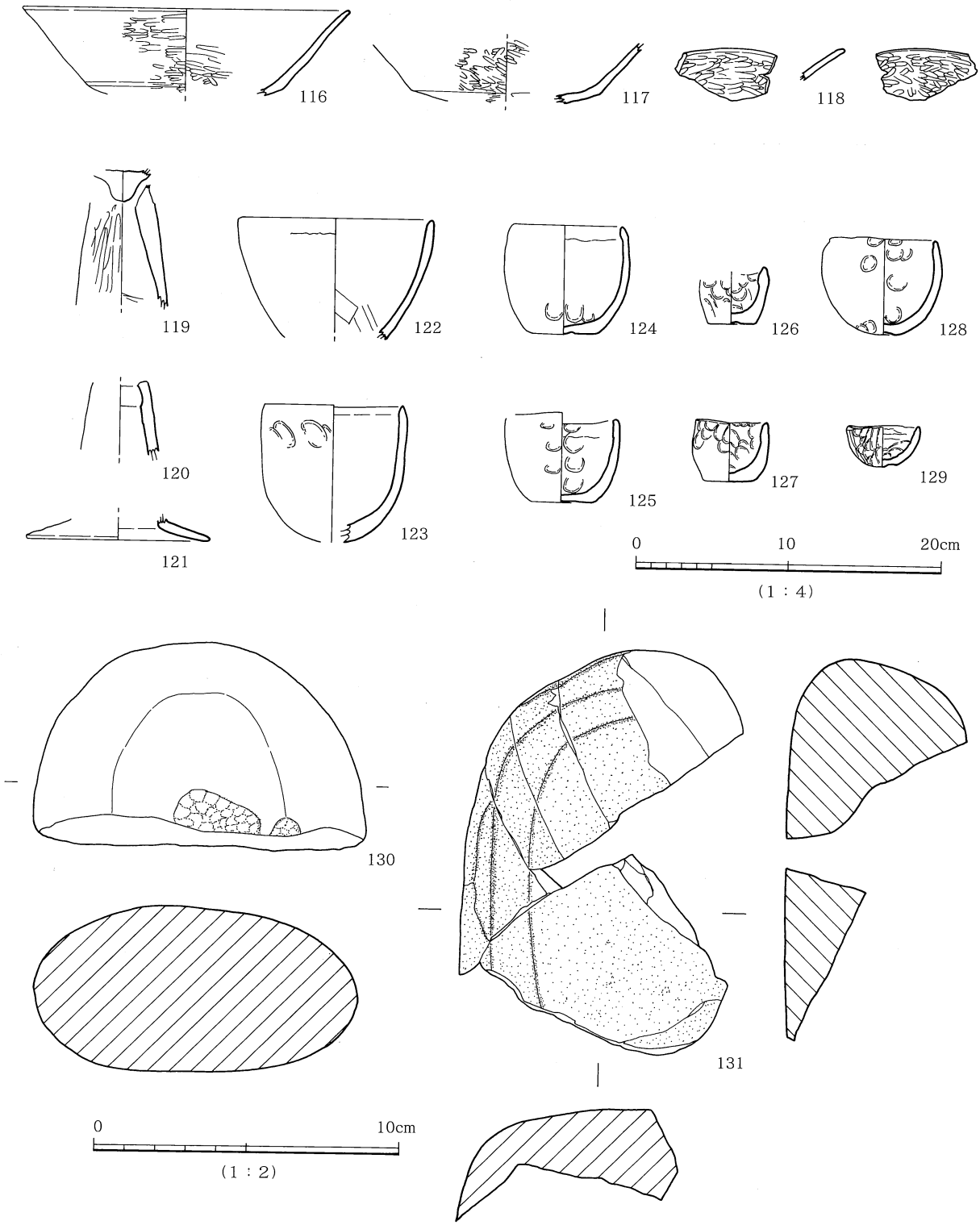
116～121は高坏である。坏部は屈曲が明瞭で、内外面は細かなミガキ調整である。脚部は、円柱状の脚に強く屈曲する短い裾部が付く。

122・123は鉢、124～129は小型の鉢・手づくね小坏である。平底と丸底の両者が見られる。

130は砂岩の敲石で、中央部に敲打痕が見られる。131は砂岩の石皿で、表面は研磨による滑面となる。30cmを超す大きさと思われるが、幅5cm程度の小片に砕けている。



第16図　　4号竪穴住居跡出土土器(1)（1/4）



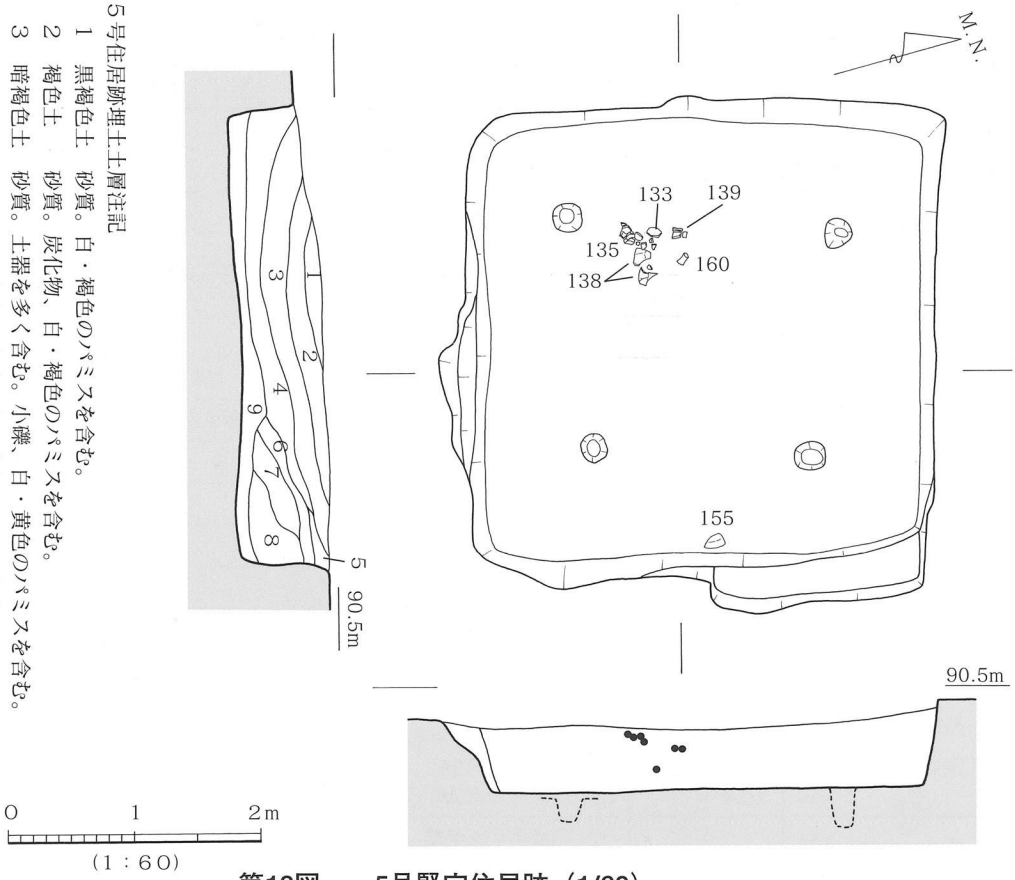
第17図　　4号竪穴住居跡出土土器(2)・石器（130は1/2、他は1/4）

第２表　上の原第３遺跡出土土器遺物観察表（２）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
45	土師器	壷 胴部～底部	SA2		2.4		横ナデ　工具痕　黒変	ナデ　ハケ目　指頭痕 粘土の継ぎ目	浅黄橙	浅黄橙	3.5mm以下の灰黄の砂粒	
46	土師器	壷 頸部～底部	SA2		3.0		ナデ　指頭痕　黒変	ナデ　指頭痕　粘土の継ぎ目	にぶい黄橙	明赤褐	1mm以下の乳白色　透明な砂粒	
47	土師器	鉢 口縁	SA2				ケズリ	ナデ	浅黄	灰黄	2.5mm以下の半透明　黒色光沢粒 1mm以下の透明光沢粒	
48	土師器	鉢 体部	SA2				ケズリ　黒斑	ナデ　粘土の継ぎ目	黄灰	浅黄	2.5mm以下の半透明　黒色光沢粒 1mm以下の透明光沢粒	
49	土師器	鉢 体部～底部	SA2		4.9		ナデ　指頭痕 粘土のかえり　スス付着	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の黒色光沢粒	
50	土師器	鉢 体部～底部	SA2		5.9		ナデ　粘土の継ぎ目 黒斑	剥離	暗灰黄	×	2mm以下の赤褐色粒	
51	土師器	高坏 坏部～裾部	SA2	20.6	15.3	16.2	ナデ　黒斑	ナデ　工具痕	橙 明黄褐	橙 にぶい黄橙	微細～0.5mmの透明・黒色光沢粒 2mm以下の灰白・褐灰の砂粒	
52	土師器	高坏 完形	SA2	17.0	11.6	12.6	ナデ	ナデ	橙	橙	光沢微細粒	
53	土師器	高坏 完形	SA2	14.6	10.3	12.9	横ナデ	横ナデ	橙	橙	微細な透明光沢粒 1mm以下の灰色・乳白色の砂粒	
54	土師器	高坏 坏部～脚部	SA2	19.9			ナデ　ミガキ	ミガキ　横ナデ	浅黄	浅黄 明黄褐	1.5mm以下の半透明光沢粒 黒色光沢粒	
55	土師器	高坏 坏部～裾部	SA2	20.7	14.0	16.2	横ナデ　ミガキ 指頭痕　黒斑	横ナデ　ミガキ 粘土の継ぎ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の柱状で黒く光る砂粒 微細な無色透明光沢粒	
56	土師器	高坏 完形	SA2	22.4	14.5	16.8	ナデ　ミガキ 黒変　黒斑	ナデ　黒斑　指頭痕 粗いナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明・黒色光沢粒 2mm以下の黒・灰・乳白・褐色の砂粒	
57	土師器	高坏 坏部	SA2	27.7			横ナデ　ミガキ 指頭痕	横ナデ　ミガキ　黒斑	にぶい黄橙 にぶい橙	浅黄 にぶい黄橙	極く細かな透明光沢粒 1mm前後の茶・褐・黒色粒	
58	土師器	高坏 完形	SA2	22.8	13.7	15.2	ナデの後にミガキ 粘土の継ぎ目　黒斑	ナデの後にミガキ　風化気味 工具ナデ　粘土の継ぎ目　黒斑	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の黒色光沢粒 2mm以下の灰色・橙色の砂粒	
59	土師器	高坏 坏部	SA2	18.2			横ナデ　黒斑	横ナデ　ミガキ 指頭痕　黒斑	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰・黒・褐色の砂粒 1mm以下の透明黒色光沢粒	
60	土師器	高坏 坏部	SA2	17.8			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒・灰白の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
61	土師器	高坏 坏部	SA2				ナデ　ミガキ	ナデ	橙	橙	3mm以下の半透明光沢粒　赤褐色粒 1mm以下の黒色光沢粒	
62	土師器	高坏 脚部	SA2				ナデ	粗いナデ　粘土の継ぎ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の半透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒	
63	土師器	高坏 脚部	SA2				横ナデ	ナデ　粘土のかえり	橙	黒褐	0.1mm以下の透明光沢粒 橙色・黒色・白色の砂粒	
64	土師器	高坏 裾部	SA2		14.3		横ナデ	横ナデ　指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰黄褐色・褐色・灰白色 透明光沢の砂粒	
65	土師器	高坏 裾部	SA2				横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒色・灰白色の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
66	須恵器	坏身 口縁	SA2				ナデ	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	1mm以下の黄褐・灰白・褐の砂粒	
67	須恵器	甕 胴部	SA2				平行タタキの後ナデ	同心円当て具痕の 上をナデ消し	灰	灰	1mm以下の乳白色・黄褐・灰白の 砂粒	
71	土師器	甕 口縁	SA3				タタキの後ナデ スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐色・褐色の砂粒 5mmの褐灰の粒	72、73と 同一
72	土師器	甕 胴部	SA3				タタキの後ナデ スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐色・褐色の砂粒 5mmの褐色の粒	71、73と 同一
73	土師器	甕 胴部	SA3				タタキの後ナデ スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐色・褐色の砂粒 5mmの褐色の粒	71、72と 同一
74	土師器	甕 口縁～胴部	SA3	18.5			横ナデ　スス付着	横ナデ　工具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐・黒褐色の砂粒	
75	土師器	壷 口縁	SA3	10.7			横ナデ　スス付着	横ナデ	にぶい黄橙	橙	0.5mm以下の褐色砂粒　透明光沢粒 1.5mm以下の柱状の黒色光沢粒	76と同一
76	土師器	壷 頸部～胴部	SA3				横ナデ　刻み目突帯 スス付着	横ナデ　指頭痕	にぶい黄橙	橙	3mm以下の褐色・黒色砂粒　透明光沢粒 1.5mm以下の柱状の黒色光沢粒	75と同一
77	土師器	壷 頸部	SA3				ナデ　刻み目突帯 ↙方向の布目押圧刻みの後 ↖方向の工具による刻み	ナデ　指頭痕	黄橙	黄橙	4mm以下の灰・褐色砂粒 2mm以下の灰白・灰・褐色砂粒	
78	土師器	壷 胴部～底部付近	SA3				粗いナデ	粗いナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒	
79	土師器	甕 口縁	SA3				横ナデ　スス付着	横ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐・黒褐色の砂粒	
80	土師器	甕 口縁	SA3				横ナデ　スス付着	横ナデ	浅黄橙	淡黄	3mm以下の灰・褐色の砂粒	
81	土師器	甕 口縁	SA3				横ナデ　スス付着	横ナデ	浅黄橙	淡黄	2mm以下の褐・黒褐色の砂粒	
82	土師器	壷 口縁	SA3				ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰・褐・赤褐色の砂粒	
83	土師器	高坏 坏部	SA3				横ナデ　工具痕	風化気味	にぶい橙 黄橙	黄橙	1.5mm以下の茶色の砂粒	
84	土師器	高坏 脚部～裾部	SA3		14.9		ナデの後ミガキ（単位不明） 黒斑	ケズリ　ナデ　黒斑	黄橙	黄橙 橙	2mm以下の茶色・透明光沢の砂粒	
85	土師器	高坏 裾部	SA3				横ナデ　スス付着	横ナデ　黒斑	橙	にぶい黄橙	1mm以下の茶・黒・灰白の砂粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
86	土師器	高坏 裾部	SA3				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の灰白・茶黒色の砂粒 1mm以下の黒色光沢粒	
87	土師器	脚付鉢 完形	SA3	13.3	8.2	11.9	横ナデ　ミガキ　黒変	ナデ	明黄褐	橙	3mm以下の茶色の砂粒 2mm以下の透明光沢・黒色光沢粒	
88	土師器	坏 口縁～体部	SA3	13.6			ナデ	ナデ	橙	橙	精良	
89	土師器	坏 口縁～体部	SA3				ミガキ　風化気味	ミガキ	橙	橙	精良	

第３表　上の原第３遺跡出土土器観察表（３）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
90	土師器	坏 口縁	SA3				ナデ　ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の赤褐色粒 1mm以下の半透明光沢粒	
91	土師器	坏 口縁	SA3				ナデ	ナデ	橙	橙	精良 1mm以下の半透明光沢粒	
92	土師器	坏 口縁	SA3				ナデ　ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の赤褐色粒　黒色光沢粒 微細な光沢粒	
93	土師器	坏 口縁	SA3				ナデ	ナデ	橙	暗灰黄	精良 1mm以下の半透明光沢粒	
94	土師器	鉢 底部	SA3		6.0		ナデ　ハケ目 木の葉底　スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の茶・黒色・灰色の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
95	須恵器	蓋 つまみ～口縁	SA3	12.3			ナデ　回転ケズリ 自然釉	横ナデ	灰	灰	3mm以下の灰白の粒 精良	
96	土師器	甕 口縁～底部	SA4	21.0	2.4	27.5	ナデ　工具ナデ 指頭痕　スス付着	横ナデ　指頭痕　黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4.5mm以下の褐色の砂粒	
97	土師器	甕 口縁～胴部	SA4				ナデ	横ナデ　粘土の継ぎ目	浅黄	灰黄	0.5mm～2mmの透明光沢粒 黒色光沢粒	
98	土師器	甕 口縁～胴部	SA4				横ナデ　黒変	横ナデ　ハケ目	灰	浅黄	1~3mmの灰・淡黄・茶・褐色の砂粒	
99	土師器	甕 口縁	SA4				ナデ　粘土の継ぎ目	工具ナデ	浅黄	浅黄	微細な透明の光沢の粒と2.5mm以下の褐灰・灰褐・にぶい褐の粒	100と同一
100	土師器	甕 胴部～底部	SA4				ナデ　指頭痕　スス付着	ナデ	浅黄 灰黄	灰黄	3mm以下のにぶい褐・橙・褐灰の粒 微細な透明光沢粒	99と同一
101	土師器	甕 口縁	SA4				ナデ	ナデ	浅黄	淡黄	1～2mmの灰・茶・褐の粒 1mm以下の半透明光沢粒　黒色光沢粒	
102	土師器	甕 口縁	SA4				ナデ　スス付着	ナデ	浅黄橙	黄橙	1～2.5mmの灰・褐色の粒 半透明光沢粒	
103	土師器	甕 口縁	SA4				ナデ　スス付着	ナデ	浅黄橙	淡黄	1～3mmの灰・茶・褐色の粒 1mm以下の光沢微細粒	
104	土師器	甕 胴部～底部	SA4		4.7		ハケ目　スス付着	ハケ目	にぶい黄橙	橙	2mm以下の褐色・灰褐色粒	
105	土師器	甕 胴部～底部	SA4				ナデ　平行タタキ スス付着　底部外面　タタキ	ナデ　指頭痕	明黄褐	浅黄橙	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 2mm以下の黒・灰・茶の粒	
106	土師器	壷 完形	SA4	15.4		30.0	ナデ　風化気味　黒斑	ナデ　粘土の継ぎ目 黒斑	橙 黄橙	黄橙 明黄褐	3mm以下のにぶい黄橙・赤褐及び褐灰の粒 1mm以下の透明及び黒色光沢粒	
107	土師器	壷 口縁～頸部	SA4				ナデ　工具痕	横ナデ	にぶい黄橙	明黄褐 にぶい黄橙	2mm以下の灰色の砂粒	
108	土師器	壷 口縁	SA4	16.6			ナデ　スス付着	ナデ　スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5mm以下の灰・茶色の砂粒	
109	土師器	壷 頸部	SA4				ナデ　黒斑	ナデ　黒斑	浅黄	灰黄	微細な透明光沢粒 3mm以下の褐色・灰・乳白色の砂粒	
110	土師器	壷 口縁	SA4	10.0			ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	浅黄	浅黄橙	1mm以下の黒・灰色の砂粒	
111	土師器	壷 胴部～底部	SA4				ナデ　ハケ目 工具痕　黒斑	ナデ　工具ナデ　指頭痕	橙	橙	1.5mm以下の黄白・灰色砂粒 透明光沢粒	
112	土師器	壷 胴部	SA4				ハケ目	ナデ	明黄褐	淡黄	微細な透明・黒色光沢粒 1mm以下の黒・灰・乳白・茶・褐色の粒	
113	土師器	壷 胴部	SA4				ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	淡黄	微細な透明・黒色光沢粒 1mm以下の黒・灰・乳白・茶・褐色の粒	
114	土師器	壷 胴部～底部	SA4				ナデ　工具ナデ	ナデ	浅黄	灰黄	4mm以下の褐色・灰褐色粒 8.5mm以下の黒色粒	
115	土師器	壷 底部	SA4				ナデ	ナデ　指頭痕	灰	灰白	1mm以下の黒色・無色透明の光沢粒 4mm以下の褐色・2mm以下の浅黄色粒	
116	土師器	高坏 坏部	SA4	21.2			横ナデ　ミガキ	横ナデ　ミガキ	黄橙	橙	2mm以下の乳白色・黒色光沢・茶色の砂粒 1mm以下の透明光沢・白色の砂粒	
117	土師器	高坏 坏部	SA4				ミガキ	ミガキ　工具ナデ				
118	土師器	高坏 坏部	SA4				ミガキ	ミガキ	橙	橙	1mm以下の透明光沢・黒色光沢粒	
119	土師器	高坏 脚部	SA4				ミガキ	ナデ	橙	橙	1mm以下の透明光沢粒　黒色光沢粒	
120	土師器	高坏 脚部	SA4				ナデ	工具ナデ	淡黄	暗灰	1mm以下の茶色の粒　透明光沢粒 黒色光沢粒	121と同一
121	土師器	高坏 裾部	SA4		11.8		横ナデ　黒斑	横ナデ　黒斑	浅黄	浅黄	1mm以下の白色・黒色光沢・ 透明光沢の粒	120と同一
122	土師器	鉢 口縁～底部付近	SA4	12.6			ナデ　粘土の繰ぎ目　スス付着	横ナデ	浅黄 灰黄	浅黄	1mm以下の褐・黒褐色砂粒 透明光沢粒　黒色光沢粒	
123	土師器	鉢 口縁～底部	SA4	9.1			横ナデ　指頭痕	横ナデ	灰白 灰	灰	2mm以下の灰白・灰・褐色砂粒　1mm以下の透明光沢粒　1.5mm以下の柱状の黒色光沢粒	
124	土師器	鉢 完形	SA4	7.1	4.5	7.1	ナデ　指頭痕　黒斑	ナデ　指頭痕　粘土の継ぎ目	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下で黄褐・灰褐・褐・灰白の砂粒	
125	土師器	鉢 完形	SA4		4.0	5.9	ナデ　指頭痕　黒斑	ナデ　指頭痕　粘土の継ぎ目	にぶい黄橙 黄灰	にぶい黄橙 褐灰	3mm以下で黄褐・灰褐・褐・ 黒褐・灰白・無色透明の砂粒	
126	土師器	小坏 完形	SA4		3.1		ナデ　指頭痕	ナデ　指頭痕	橙 にぶい褐	橙 にぶい褐	4mm以下の灰白・褐色の砂粒	
127	土師器	小坏 完形	SA4	4.6	3.4	3.9	ナデ　指頭痕　黒斑 スス付着	ナデ　指頭痕　赤色物付着	にぶい橙	にぶい橙 明赤褐	3mm以下の灰白・褐色の砂粒	
128	土師器	鉢 完形	SA4	6.8	2.0	6.3	ナデ　指頭痕	ナデ　指頭痕	灰黄橙 にぶい黄橙	灰黄橙	5mm以下で褐・黄褐・灰褐の粒	
129	土師器	小坏 完形	SA4	4.5	1.8	2.7	ナデ　指頭痕　黒斑	ナデ　指頭痕　黒斑	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	2mm以下の茶褐色の砂粒 4mm以下の黒褐色の砂粒	手づくね
132	土師器	甕 口縁～頸部	SA5	12.5			横ナデ　ハケ目　スス付着	ナデ　ハケ目　粘土の継ぎ目	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	極く細かな透明光沢粒 1mm大の褐色粒　3mm大の乳白色粒	
133	土師器	甕 口縁～胴部	SA5	19.4			ナデ　スス付着	ナデ　黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の半透明光沢粒 黒色透明光沢粒　2.5mm以下の赤褐色粒	



5号住居跡埋土土層注記

1　黒褐色土　砂質。白・褐色のパミスを含む。
2　褐色土　砂質。炭化物、白・褐色のパミスを含む。
3　暗褐色土　砂質。土器を多く含む。小礫、白・黄色のパミスを含む。
4　暗褐色土　土器を多く含む。小礫、白・黄色のパミスを含む。
5　暗褐色土　砂質。アカホヤ粒を多く含む。炭化物を含む。しまりなし。
6　暗褐色土　6層と同質。やや明るい。炭化物を含む。しまりなし。
7　明褐色土　砂質。褐色土とアカホヤの混土。しまりなし。
8　暗褐色土　アカホヤ粒を多く含む。炭化物を含む。やや硬。
9　黒褐色土　赤褐色パミス（1～2mm）、炭化物含む。

第18図　　5号竪穴住居跡（1/60）

5号住居跡（第18図）

調査区中央西寄りの位置に検出された。一辺約3.8mの方形プランで、検出された竪穴住居跡の中で最も小さなものである。検出面からの深さは約70cmを測る。貼り床は見られず、主柱穴は4基である。焼土・炉跡等は確認されなかった。埋土はレンズ状の堆積を示し、中位から上位にかけて遺物が出土している。

132～145は甕である。肩張りせず、胴部最大径を胴中位に持つ。132は頸部が「く」字形に屈曲し、短く外半する口縁部が付く。内器面に粘土の接合痕が残る。133・134は頸部に稜を有し、外半する口縁部が付く。135～138は胴部から口縁部にかけて緩やかにカーブし、頸部に稜は見られない。胴部最大径が口径を上回る。137の口縁部には、ヘラ状工具による刻線が見られる。139は138と同一個体と思われ、丸底に近い小さな平底を呈す。

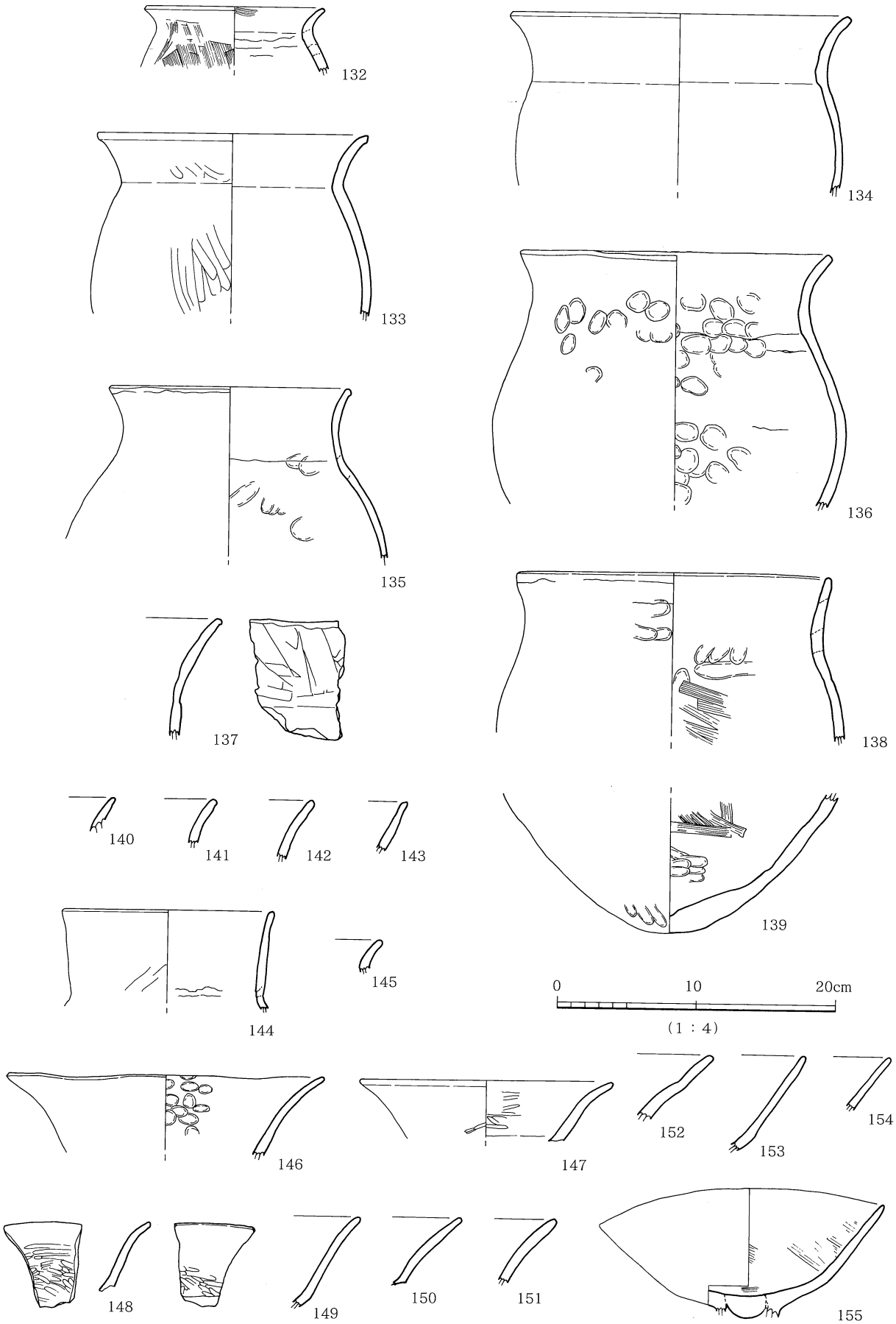
146～163は高坏である。坏部は、口縁部が緩やかに外半するもの、外傾する口縁部が僅かに内側に屈曲するもの、外傾し直線的に延びるものが見られる。155は、成形後に意図的に口縁部を挟むように歪ませ、楕円形状に変形させている。156は大型の高坏で、口縁部が長く延び坏部は深い。脚部はやや開き気味の円柱形で、屈曲し大きく開く裾部が付く。坏部と脚部の接合は粘土塊の充填である。162は大きく開く裾部で、下半部で内側に屈曲し稜を有す。

164～168は坏である。体部は丸みが強く、底部は平底と丸底の両者が見られる。

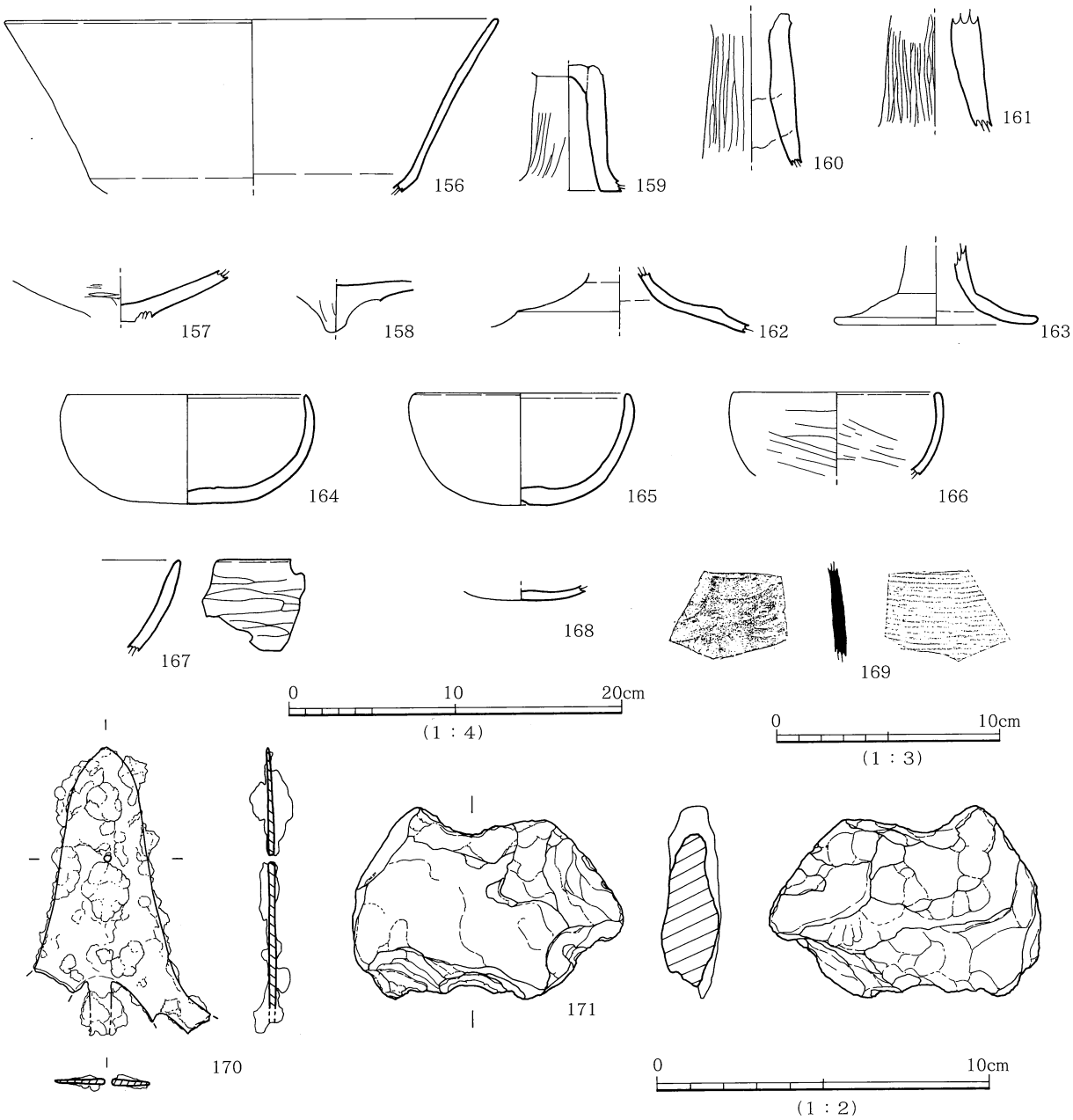
169は須恵器壺の胴部で、外面は細かな平行タタキ、内面は同心円当て具痕をナデ消している。

170は腸抉柳葉鏃で、二重逆刺と舌状の茎部を持つ。現存長8.7cm。鏃身中央に径2mmの穿孔が見られる。

171は溶結凝灰岩製の石錘で、上下からの打ち欠きにより分銅形に仕上げている。



第19図　5号竪穴住居跡出土土器(1)（1/4）



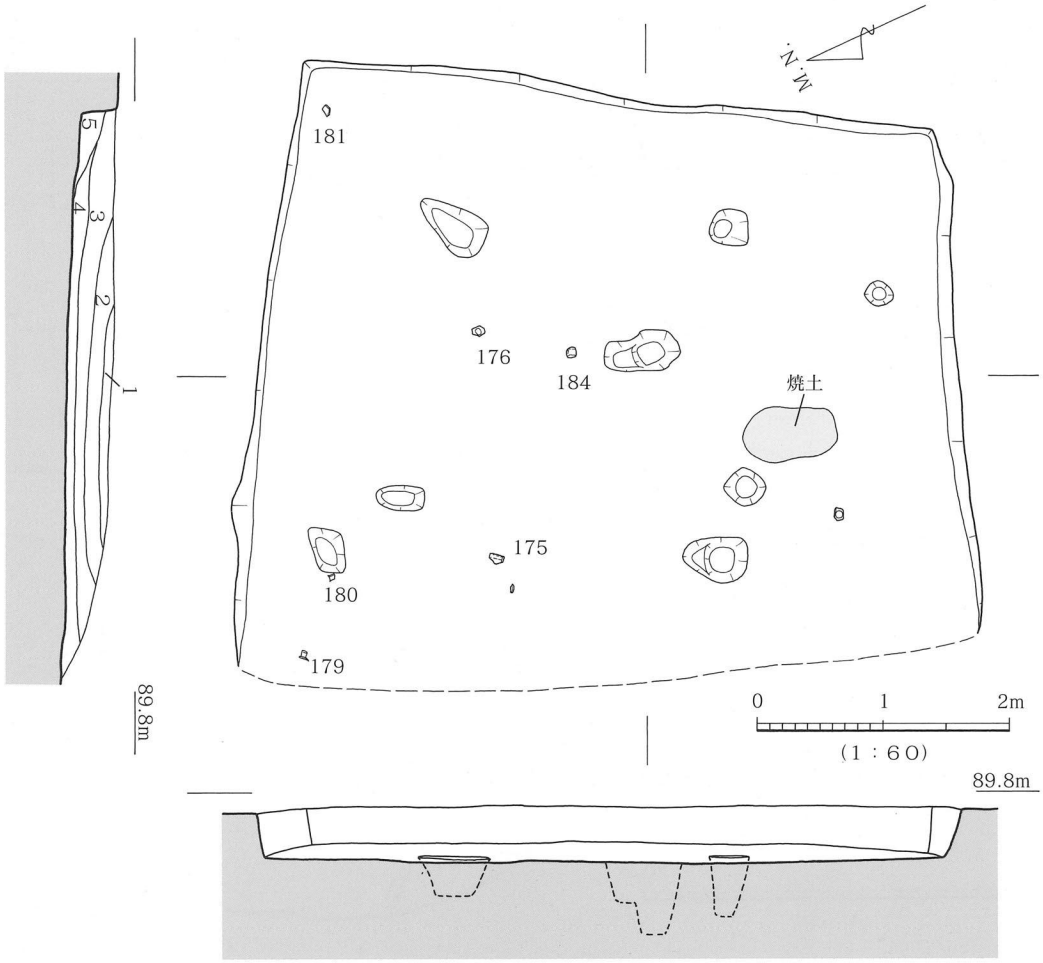
第20図　5号竪穴住居跡出土土器(2)・鉄器・石器（169は1/3、170・171は1/2、他は1/4）

6号住居跡（第21図）

5号住居跡の南西約16m、調査区西寄りの旧畑地境の段落ち部分に検出された。一辺約5mの方形プランであるが、南西壁はやや開き気味で、北西壁は段落ち部にかかるため検出されず、正確なプランは把握し得なかった。検出面からの深さは約45cmである。床のほぼ全面が貼り床で、柱穴は貼り床を除去した段階で8基を検出した。主柱穴は4基と思われ、南側柱穴間のほぼ中央の床面が被熱により赤褐色に変色していた。出土遺物は少なく、いずれも小破片であったが、床面直上あるいは若干浮いた状態で出土しており、住居と遺物の所属時期は近接したものと考えられる。

172～175は甕である。口縁部は、直線的に外傾し端部を平坦に仕上げるものと、緩やかに外半し端部が丸いものが見られる。底部は、厚みを持つ尖底気味の丸底である。

176は壺で、丸底に近い小さな平底で、内外面はミガキを施す。



第21図　　6号竪穴住居跡（1/60）

177～180は高坏である。坏部は浅く、水平に近い体部に明瞭な稜を有し大きく開く口縁部が付く。脚部は円柱状の脚に強く屈曲する短い裾部が付く。

181・182は坏で、ともにミガキを施す。182は口縁端部が短く外半する。

183は須恵器壺で、外器面は平行タタキの後にカキ目を施している。

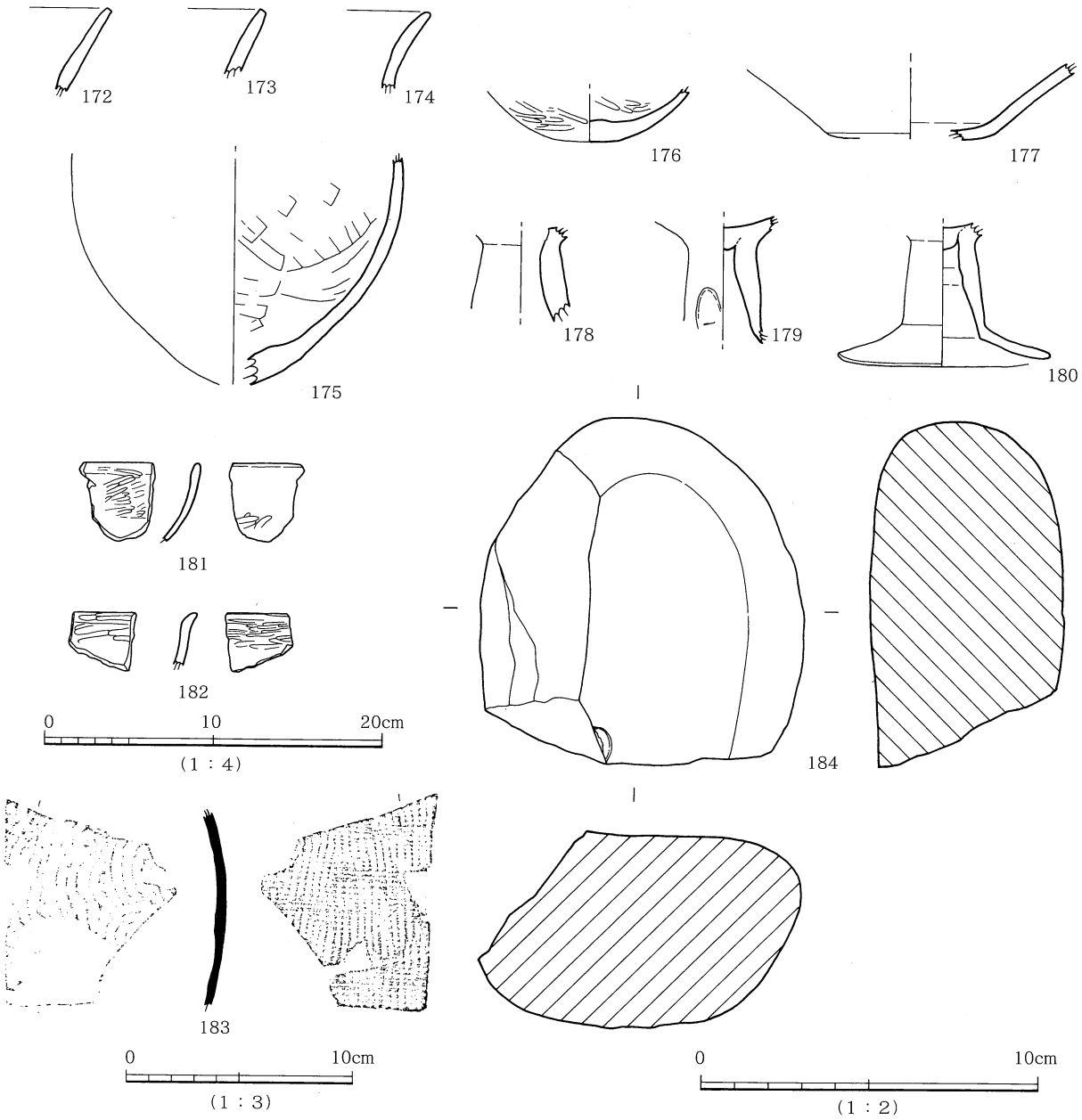
184は砂岩の磨石で、表裏面に研磨痕が認められる。

7・8号住居跡（第23図）

調査区西側、5号住居跡の西約20mに検出された。本遺跡中で唯一切り合った例であり、埋土土層断面の観察から、7号を8号が切っている。

7号は、5.1×4.8mの方形プランで、検出面からの深さは約40cmを測る。床面は貼り床で、焼土等は見られない。柱穴は、コーナー壁際に3ヵ所と床面南東寄りに1ヵ所の計4基を検出したが、主柱穴を認定するには至らなかった。他の住居の柱穴配置を参考に積極的に推定を行えば、8号に切られた部分に3基の柱穴を想定し、方形配置の4本柱と住居コーナーの補助柱とするのが妥当であろうか。

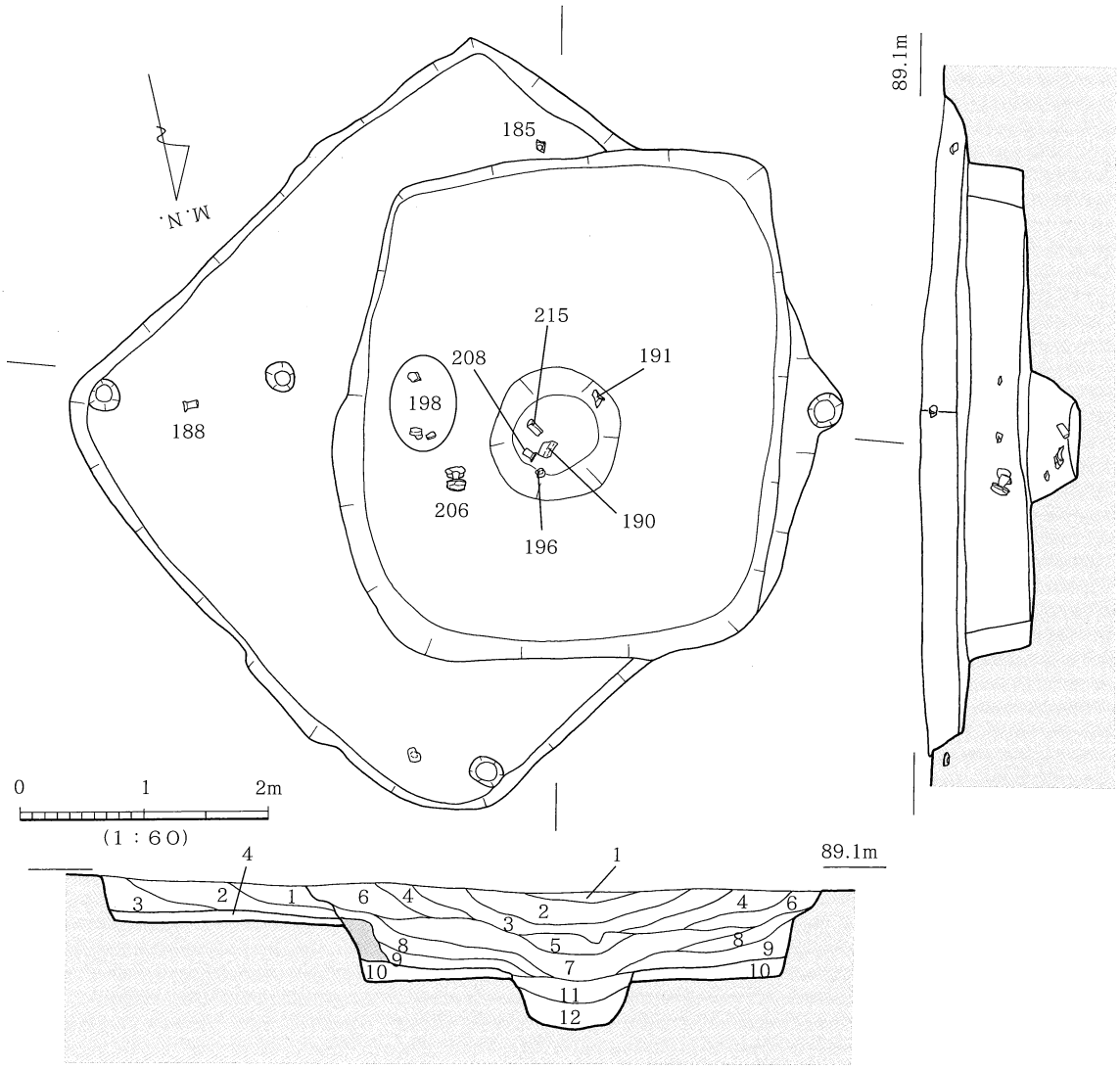
遺物は床面から浮いた状態で出土し、その量も少ない。185は平底の甕、186は丸底の壺である。187～189は高坏で、比較的短い口縁部と、円柱状の長めの脚が見られる。

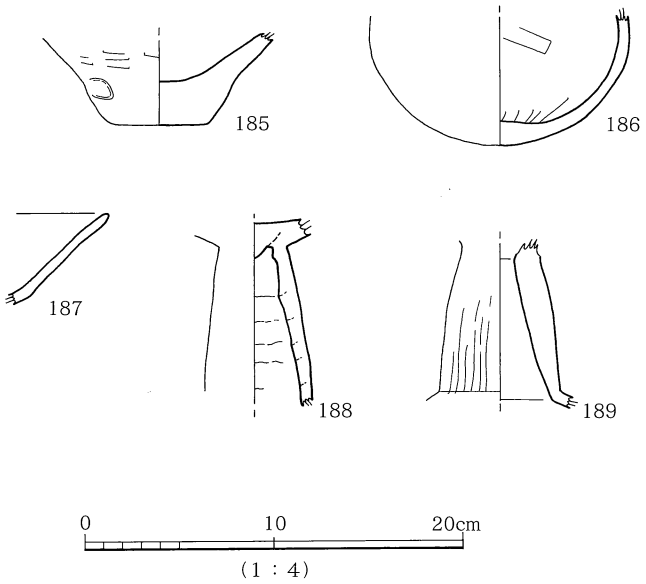


第22図　6号竪穴住居跡出土土器・石器（183は1/3、184は1/2、他は1/4）

８号は、4.0×3.5mのやや小ぶりな長方形プランで、主軸は７号と約45°異なる。検出面からの深さは約70cmを測り、床面は黒褐色土と褐色土の混土による貼り床である。床中央部には、直径１m・深さ40cmの円形土坑が検出された。埋土は、焼土・炭化物を多く含み軟質であった。柱穴は検出されていない。遺物は、土坑内および床面から約20cm程浮いた位置から出土している。

190～197は甕である。191は、口縁部が緩やかに外反するものの、やや内傾しているため口径と頸部径がほぼ等しくなり、胴部径がそれらを上回る。193は尖底気味の平底、194～197は平底となり、196・197は底部外面を押圧により凹ませている。





7・8号住居跡埋土土層注記

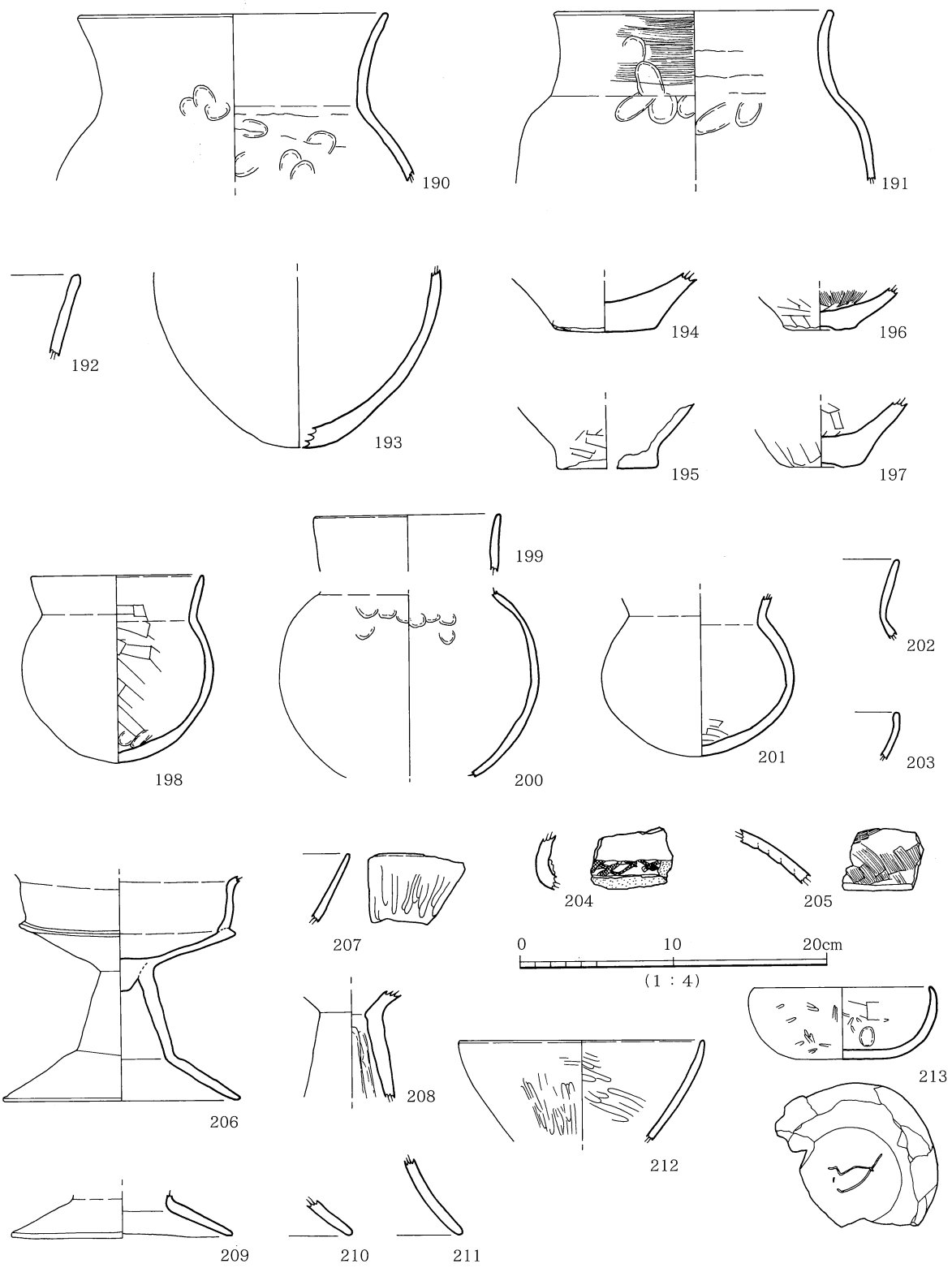
（7号）

1　暗褐色土　アカホヤ粒を含み、炭化物を少量含む。
2　暗褐色土　1より暗い。土器を含む。
3　暗褐色土　アカホヤを多く含む。壁の崩れ込みか。
4　明褐色土　貼り床。硬質。アカホヤと褐色土の混土。

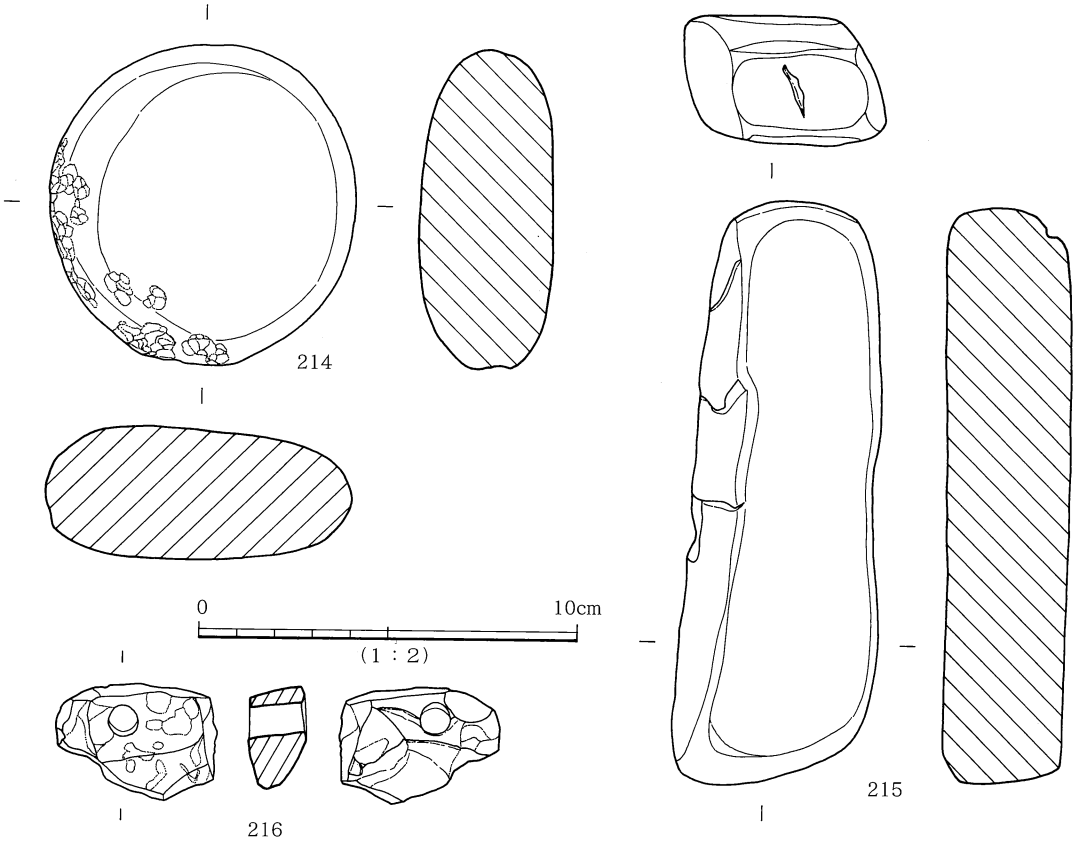
（8号）

1　黒褐色土　褐色・白色パミスを含む。
2　褐色土　炭化物、褐色パミスを少量含む。軟質。
3　褐色土　2層より暗い。土器片少量含む。軟質。
4　暗褐色土　3層に似るが、より暗い。軟質。
5　暗褐色土　4層より暗い。炭化物を含む。やや硬質。
6　暗褐色土　5層に似るが、褐色土を含みやや明るい。軟質。
7　暗褐色土　炭化物、褐色パミスを多く含む。土器片多。軟質。
8　暗褐色土　アカホヤ粒、褐色パミス少量含む。やや硬。
9　黒褐色土　炭化物、アカホヤを少量含む。しまり有り。やや硬。
10　黒褐色土　キメ細か。しまり有り。褐色土ブロックを若干含む。貼り床。
11　暗褐色土　炭化物、焼土を含む。土器片含む。軟質。
12　黒褐色土　炭化物、焼土を多く含む。礫、土器片を含む。軟質。

第23図　7・8号竪穴住居跡（1/60）、7号出土土器（1/4）



第24図　　8号竪穴住居跡出土土器（1/4）



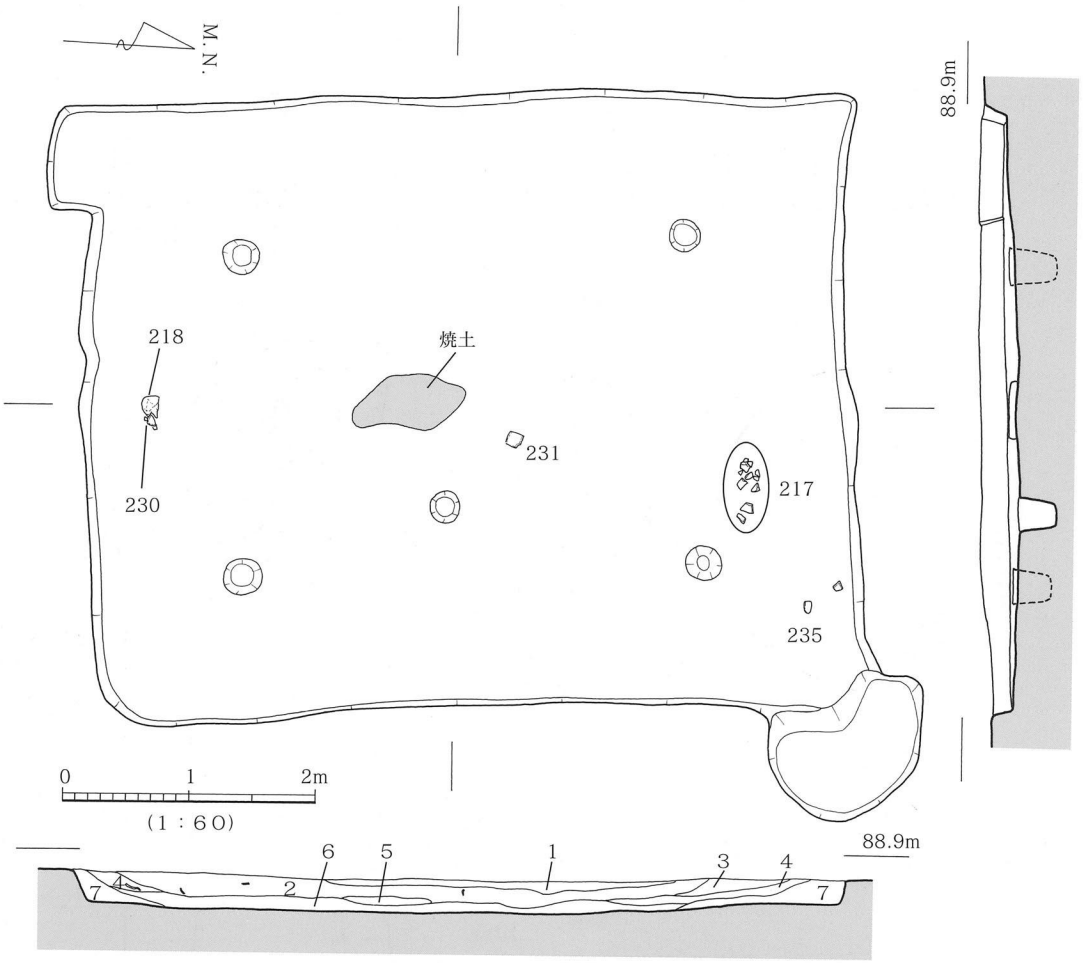
第25図　　8号竪穴住居跡出土石器（1/2）

198～205は壺である。198は小型壺で、頸部径が大きく球胴・丸底である。199・200は同一固体で、球形胴に直立する口縁部が付く。201は扁球形の胴部を持つ小型の丸底壺である。202・203は小型壺の口縁部である。204は布目圧痕の刻み目を持つ貼付け突帯である。

206～211は高坏である。206の坏部は須恵器のそれに類似し、受け部状の突出部の内側にほぼ垂直に口縁が立ち上がり、端部は外反する。脚部は円錐形の脚に強く屈曲する裾部が付く。接合は粘土の充填である。211の脚裾部は立ち上がりの角度が大きく、坏基部から屈曲せずに開くタイプである。

212・213は坏で、調整はミガキである。213は底部外面にヘラ描が見られる。

214は砂岩の磨石で、側面に敲打痕が見られる。215は砂岩の砥石。216は軟質の凝灰岩で、円形穿孔が施される。用途不明。



9号住居跡埋土土層注記

1　黒褐色土　白・褐色のパミス（1～2mm）を含む。
2　暗褐色土　炭化物、褐色パミスを含む。土器片、礫を含む。
3　褐色土　砂質。炭化物を少量含む。
4　暗褐色土　砂質。アカホヤ、炭化物を含む。土器片含む。
5　赤褐色土　焼土。炭化物を多く含む。
6　黒褐色土　キメ細か。しまり有り。
7　暗褐色土　壁の崩れ込み。黒褐色土ブロック混。軟質。

第26図　　9号竪穴住居跡（1/60）

9号住居跡（第26図）

調査区南西隅に検出された。6.1×4.8mの長方形プランで、南西コーナーがわずかに張り出す。北東コーナーには、時期不明の土坑が住居を切っていた。検出面からの深さは約30cmで、貼り床は見られなかった。柱穴は方形配置の４基の他に、中央やや東寄りに１基を検出した。床面中央やや南寄りの位置に焼土が見られた。遺物は、床面から10～20cm浮いた状態で出土している。

217～226は甕である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するが大きくは開かず、胴部最大径が口径を上回る。220は、球形の胴部に直立気味の口縁部が付く。頸部と口唇部には明瞭に指頭痕が残る。底部はやや厚みのある平底である。内器面には粘土の輪積み痕が残る。

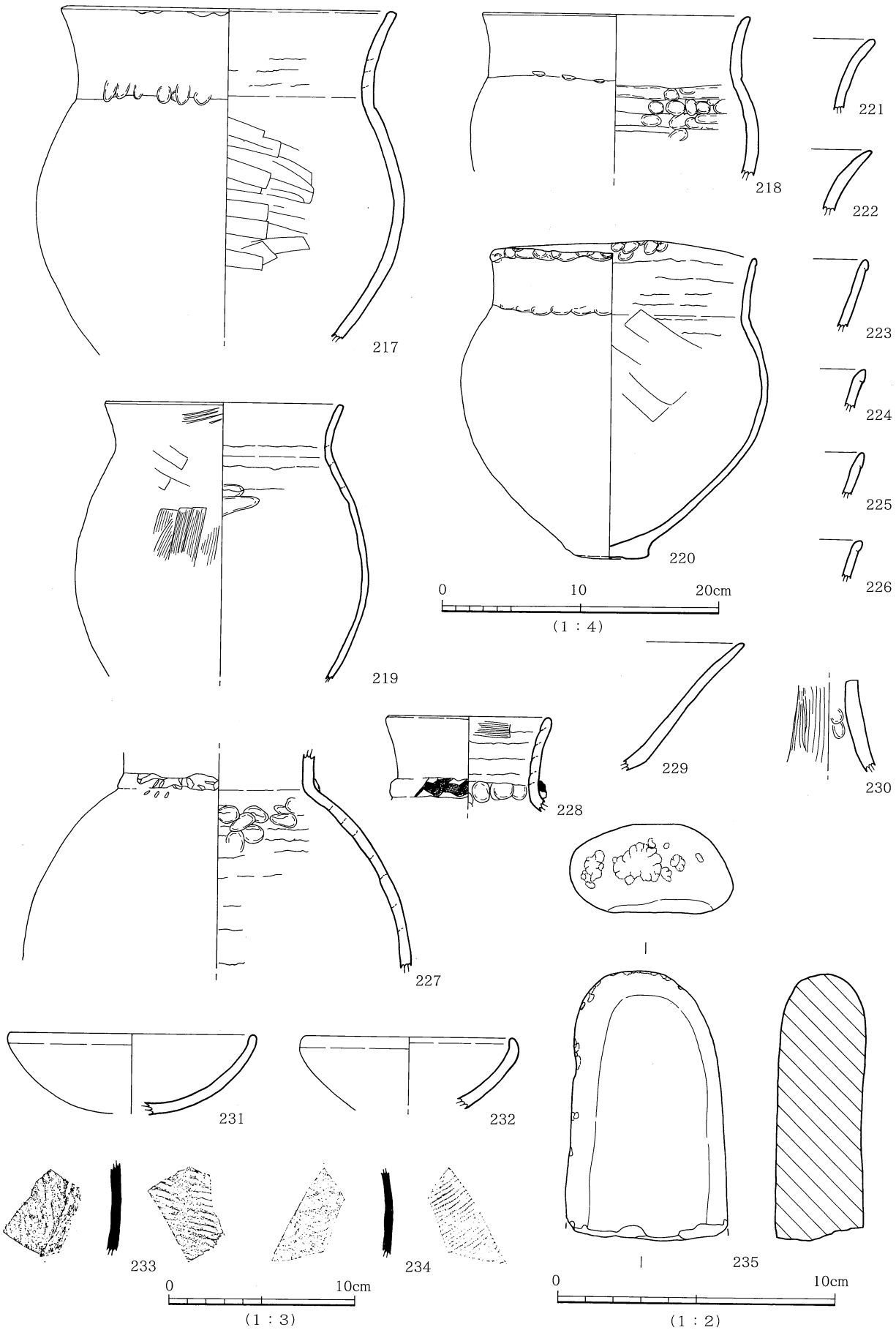
227・228は壺である。ともに頸部に貼付け突帯を有し、227はその大部分が剥離している。突帯下に刻みを施した際のヘラ痕が残る。肩部はあまり張らず、長胴となると思われる。228は突帯上の刻み目に布痕が見られ、内器面には粘土の輪積み痕が残る。

229・230は高坏で、口縁部が長く延びて深さのある坏部と、円錐形の脚である。

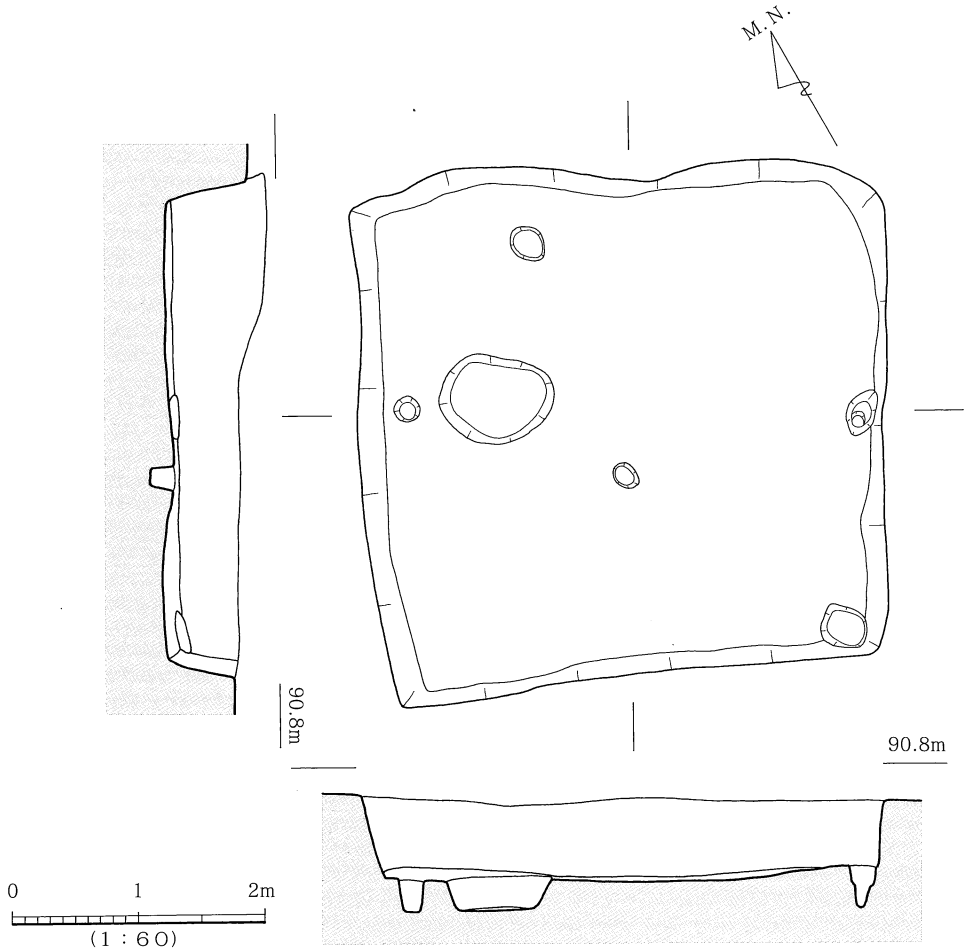
231・232は坏で、口縁部下にやや不明瞭ながら稜を有す。232は口縁部が内湾する。

233・234は須恵器の壺で、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕を残す。

235は砂岩の敲石で、側面に明瞭な敲打痕が見られる。



第27図　9号竪穴住居跡出土土器・石器（233・234は1/3、235は1/2、他は1/4）



第28図　　10号竪穴住居跡（1/60）

10号住居跡（第28図）

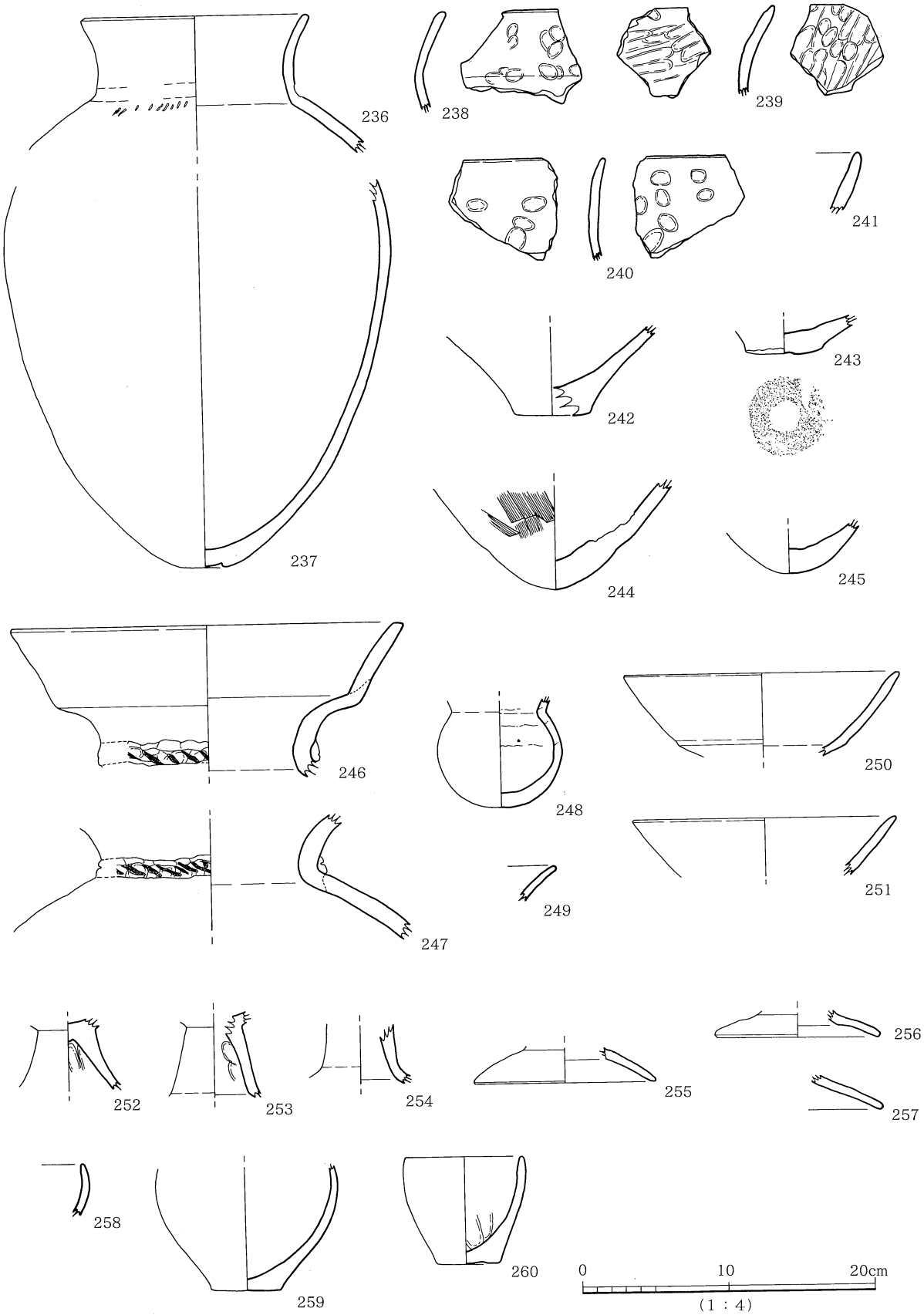
５号住居跡の東側２ｍに隣接して検出された。一辺約４ｍの方形プランで、検出面からの深さは約70cmを測る。貼り床は見られず、焼土・炉跡等も確認されなかった。柱穴は５基を検出したが、東西壁際の２基が主たるものと思われる。遺物は、床面から浮いた状態で埋土の中位から出土している。

236～245は甕である。236・237は同一個体で、長胴に尖底気味の平底を持ち、底部外面にヘラ状工具による押圧が見られる。頸部に貼付け突帯を有したと思われるが、全て剥離しており剥離痕と刻み目施文時のヘラキズが残る。頸部で明瞭に屈曲する口縁は、外反して端部を丸く仕上げる。242～245は底部で、平底と尖底気味の丸底が見られるが、243は底部外面を押圧により凹ませている。

246～248は壺である。246・247は接点が見られないものの同一個体である。外傾する二重口縁で、頸部に貼付け突帯を有し、布痕を残す刻み目を施す。248はミニチュアの丸底壺である。

249～257は高坏である。250は明瞭な稜を有する坏部で、口縁部は内湾気味で深さを持つ。252～254は脚部で、短脚で円錐形を呈す。255は丸みを持つ伏鉢形の裾部である。

258～260は鉢である。258・259は同一個体で、口縁部は内湾する。



第29図　　10号竪穴住居跡出土土器（1/4）

第４表　上の原第３遺跡出土土器観察表（４）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
134	土師器	甕 口縁～胴部	SA5	24.2			ナデ	ナデ	明黄褐 橙	明黄褐 橙	5mm以下の褐灰・灰褐の粒	
135	土師器	甕 口縁～胴部	SA5	17.1			ナデ　粘土のかえり 工具痕　スス付着	ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目	にぶい黄橙 にぶい黄褐	明黄褐	5mm以下の褐灰・灰黄褐の粒 2mm以下の褐灰・透明光沢粒	
136	土師器	甕 口縁～胴部	SA5	21.8			ナデ　指頭痕　黒斑	ナデ　指頭痕　黒斑 粘土の継ぎ目	橙 にぶい黄橙	灰黄 橙	5mm以下の茶褐色の粒と 灰色の粒	
137	土師器	甕 口縁	SA5				ナデ　線刻　工具痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 橙	5mm大の灰褐の粒 3mm以下の灰褐・褐灰の砂粒	
138	土師器	甕 口縁～胴部	SA5	22.3			横ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目　スス付着	横ナデ　ハケ目　指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の茶色・灰色の砂粒	139と同一
139	土師器	甕 胴部～底部	SA5		3.0		ナデ　指頭痕　スス付着	ハケ目の後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の灰色・黒・赤褐の砂粒	138と同一
140	土師器	甕 口縁	SA5				横ナデ　粘土のたるみ スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰・褐・透明光沢粒 5mmの茶色粒	
141	土師器	甕 口縁	SA5				ナデ　粘土のたるみ スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰・褐色粒	
142	土師器	甕 口縁	SA5				ナデ　風化気味	ナデ　風化気味	にぶい黄橙	浅黄橙	2mm以下の茶・灰・乳白色の粒 透明光沢粒　柱状の黒色光沢粒	
143	土師器	甕 口縁	SA5				ナデ	ナデ	淡黄	淡黄	2mm以下の褐色の砂粒　透明光沢粒 黒色光沢粒	
144	土師器	壷 口縁～頸部	SA5	15.1			横ナデ　工具痕	横ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目　スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm前後の乳白・うす茶・褐・ 黒色光沢・透明光沢粒	
145	土師器	壷 口縁	SA5				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の淡黄色の砂粒 半透明光沢粒　黒色光沢粒	
146	土師器	高坏 坏部	SA5	22.6			横ナデ	横ナデ　指頭痕	明黄褐	黄橙	2mm以下の黒色光沢砂粒	
147	土師器	高坏 坏部	SA5	18.1			ミガキ　ナデ	ミガキ　ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良（微細な光沢粒を含む）	
148	土師器	高坏 坏部	SA5				横ナデ　ミガキ	ミガキ　炭化物付着	明黄褐 淡黄	にぶい黄橙	1mm以下の透明光沢・黒色光沢の砂粒	
149	土師器	高坏 坏部	SA5				工具ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の乳白色粒　橙色粒 微細な光沢粒	
150	土師器	高坏 坏部	SA5				横ナデ　指頭痕 赤変　スス付着	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・透明光沢砂粒	
151	土師器	高坏 坏部	SA5				ナデ　赤変	ナデ　赤変	明黄褐 橙	明黄褐 橙	1.5mm以下の乳白色・1mm以下の黒色光沢 透明光沢・茶色・白色の砂粒	
152	土師器	高坏 坏部	SA5				ナデ　黒斑	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	精良（微細な光沢粒を含む）	
153	土師器	高坏 坏部	SA5				ナデ	ナデ　黒斑	橙	橙	3mm以下の褐色粒 1mm以下の黒色・透明光沢粒	
154	土師器	高坏 坏部	SA5				ナデ　黒斑	ナデ　黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良 （2mm以下の半透明光沢粒を含む）	
155	土師器	高坏 坏部	SA5	20.4			ナデ　風化気味	ハケ目　風化気味　黒斑	黄橙 橙	黄橙 橙	2mm以下の灰色の砂粒 4mm以下の明褐色の砂粒	
156	土師器	高坏 坏部	SA5	29.2			ミガキ（風化の為単位不明）	ナデ　風化気味　黒変	橙	にぶい黄橙	3mm以下の茶色・2mm以下の透明光沢 1mm以下の黒色光沢の砂粒	
157	土師器	高坏 坏部	SA5				ミガキ	ナデ　黒変	にぶい黄橙	黒	精良（微細な光沢粒を含む）	
158	土師器	高坏 坏部	SA5				ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の褐色粒 2mm以下の半透明光沢粒	
159	土師器	高坏 脚部	SA5				丁寧なナデ　ミガキ 黒変	ナデ	にぶい橙	浅黄橙 黄灰	1mm以下の赤褐色砂粒　透明光沢粒	
160	土師器	高坏 脚部	SA5				ミガキ　黒変	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の灰白・赤褐・黒色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
161	土師器	高坏 脚部	SA5				ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	1.5mm以下の黄白・赤褐色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
162	土師器	高坏 裾部	SA5				横ナデ　風化気味　黒斑	横ナデ	橙	明黄褐	1.5mm以下の茶色・黒色光沢の砂粒 1mm以下の透明光沢の砂粒	
163	土師器	高坏 裾部	SA5		12.2		ナデ	横ナデ	淡黄	浅黄	1mm以下の褐・黒色砂粒	
164	土師器	坏 口縁～底部	SA5	14.3	8.2	6.6	ナデ　工具痕　黒変	ナデ　黒変	浅黄橙	浅黄橙	1.5mm以下の赤褐の砂粒	
165	土師器	坏 口縁～底部	SA5	12.6	5.0	6.8	ナデ　黒変	ナデ　黒変	浅黄橙 黒	灰 オリーブ・黒	2mm以下の褐の砂粒	
166	土師器	坏 口縁～体部	SA5	12.4			ナデ　黒変	ナデ	淡黄 黄灰	浅黄橙	2mm以下の黒く光沢のある砂粒 1mm以下の赤褐の砂粒	
167	土師器	坏 口縁～体部	SA5				ナデ	ナデ　風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明の光沢粒 1.5mm以下の灰白の砂粒	
168	土師器	底部	SA5		4.6		ナデ	ナデ　黒変	黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の乳白色・黒の砂粒 微細な透明光沢粒	
169	須恵器	壷 胴部	SA5				平行タタキ	円心円当て具痕の後ナデ	灰	灰	精良	
172	土師器	甕 口縁	SA6				ナデ　粘土のかえり 黒変　スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4.5mm以下の褐灰、灰白の砂粒	
173	土師器	甕 口縁	SA6				ナデ	ナデ　黒変	浅黄橙	にぶい黄橙	微細の透明光沢粒 1mm以下の褐灰、灰白砂粒	
174	土師器	甕 口縁	SA6				横ナデ　スス付着	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 橙	2mm以下の褐灰、灰白砂粒 微細の透明光沢粒	
175	土師器	甕 胴部～底部	SA6				ナデ　黒変　スス付着	工具ナデ	にぶい黄橙	浅黄	4mm以下の黄灰、褐の砂粒	
176	土師器	壷 底部	SA6		3.3		ミガキ	ナデ　ミガキ　黒斑	浅黄	浅黄	1mm以下の灰色の砂粒 微細の透明光沢粒	
177	土師器	高坏 坏部	SA6				ナデ	ナデ	淡黄	淡黄	きめ細かな光沢微細粒	

第５表　上の原第３遺跡出土土器観察表（５）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
178	土師器	高坏 脚部	SA6				ナデ	ナデ	橙 にぶい黄橙	灰	微細の透明光沢粒 1mm以下の灰白、浅黄、褐灰の砂粒	
179	土師器	高坏 脚部	SA6				丁寧なナデ　指頭痕	ナデ　粘土の継ぎ目	淡黄	浅黄橙	きめ細かな光沢微細粒 1mm以下の黒色光沢粒	
180	土師器	高坏 脚部～裾部	SA6		12.6		横ナデ	ナデ	浅黄橙 淡黄	浅黄	2.5mm以下の淡黄 赤褐、褐灰の砂粒	
181	土師器	坏 口縁	SA6				ナデ　ミガキ	ナデ　ミガキ	橙	橙	1mm以下の灰、黒色の砂粒	
182	土師器	坏 口縁～体部	SA6				ナデ　ミガキ	ミガキ　ナデ	橙	橙	1mm以下の乳白色、黒の砂粒	
183	須恵器	壺 胴部	SA6				平行タタキの後カキメ	同心円当て具痕	黄灰	浅黄 灰白	精良 (1mm以下の黒色の粒を微量含む)	
185	土師器	甕 胴部～底部	SA7		5.3		ナデ　指頭痕　工具痕	ナデ　黒変　炭化物付着	浅黄	淡黄	1mm程の灰褐色、褐色、灰白色、 無色透明に光る粒、浅黄色の砂粒	
186	土師器	壺 胴部～底部	SA7				粗いナデ　黒変　工具ナデ	粗いナデ　工具ナデ 工具痕　黒変	浅黄	黄灰	2mm以下のにぶい黄橙 黒、褐色の砂粒	
187	土師器	高坏 坏部	SA7				ナデ　指頭痕　スス付着	横ナデ	灰白	灰白	1.5mm以下の灰白色の砂粒 1mm以下の無色透明に光る砂粒	
188	土師器	高坏 脚部	SA7				ナデ　黒斑	ナデ　粘土の継ぎ目	橙 灰	橙	2mm以下の黒、灰白、褐色の砂粒 1mm以下の光沢粒	
189	土師器	高坏 脚部	SA7				ミガキの後ナデ	粗いナデ	橙	橙	1mm以下の黒、灰白 褐色の粒及び光沢粒	
190	土師器	甕 口縁～胴部	SA8	20.0			ナデ　指頭痕　スス付着	横ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目	浅黄	淡黄	2mm以下の褐色 灰褐色、茶褐色の砂粒	
191	土師器	甕 口縁～胴部	SA8	18.1			ハケ目の後ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目	ナデ　指頭痕 粘土の継ぎ目	浅黄	にぶい黄橙	5mm以下の浅黄色 褐色、灰褐色粒	
192	土師器	甕 口縁	SA8				横ナデ　スス付着	横ナデ	にぶい橙	橙	3mm以下の暗赤褐 褐灰の砂粒	
193	土師器	甕 胴部～底部	SA8				ナデ　風化気味	ナデ　風化気味	明赤褐	橙	2mm以下の暗赤褐 褐灰、透明な砂粒	
194	土師器	甕 底部	SA8		6.6		ナデ　工具痕	ナデ　黒変	黄橙 浅黄	黄灰 にぶい黄	1.5mm以下の褐灰、灰褐の砂粒、 黒色、褐色光沢粒、透明光沢粒	
195	土師器	甕 底部	SA8		6.5		ナデ　工具痕　粘土のかえり	剥離	浅黄	浅黄	3mm以下の褐灰、灰褐の砂粒 2mm以下の透明光沢粒	
196	土師器	甕 底部	SA8		4.5		ナデ　底部外面方形の凹 粘土のかえり	ハケ目　放射状の工具痕	明黄褐 にぶい黄橙	明黄褐	1.5mm以下の赤褐、灰白、灰褐の砂粒、 透明、黒色光沢粒	
197	土師器	甕 底部	SA8		5.2		縦方向のナデ　工具痕 スス付着　底部外面に凹	ナデ　工具痕　スス付着	橙 にぶい黄	にぶい橙	2mm以下の褐灰、灰褐の砂粒 1mm以下の透明、黒色光沢粒	
198	土師器	壺 完形	SA8	11.1		12.3	ナデ　スス付着	横　斜め方向のナデ 指頭痕　黒変	浅黄橙	浅黄橙	微細な黒色光沢粒 5mm以下の茶、灰、乳白色の粒	
199	土師器	壺 口縁	SA8	11.3			横ナデ	横ナデ	明黄褐	明黄褐	1mm以下の赤褐の砂粒	200と同一
200	土師器	壺 胴部～底部付近	SA8				ミガキ（単位不明） ナデ　指頭痕　スス付着	ナデ　指頭痕	橙	橙	1mm以下の赤褐の砂粒	199と同一
201	土師器	壺 頸部～底部	SA8				ナデ　黒変	ナデ	浅黄	明黄褐	1mm以下の褐灰 明赤褐、灰白、淡黄の粒	
202	土師器	壺 口縁～頸部	SA8				横ナデ	横ナデ　指頭痕	橙	橙	1mm以下の褐灰 明赤褐の砂粒	
203	土師器	壺 口縁	SA8				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	0.5mmの赤褐、淡黄 褐灰の砂粒	
204	土師器	壺 頸部	SA8				ナデ　刻み目突帯（布痕）	ナデ　風化気味	にぶい黄橙	浅黄	2mm以下の黒色光沢粒、透明光沢粒、 灰白、淡黄、褐灰の砂粒	
205	土師器	壺 肩部	SA8				斜方向のハケ目	ナデ　粘土の継ぎ目	淡黄 灰	浅黄橙	1mm以下の明赤褐 褐灰の砂粒	
206	土師器	高坏 坏部～裾部	SA8		15.3		丁寧なナデ　黒斑	ナデ　風化気味 黒斑　粘土の継ぎ目	橙	橙	2mm以下の灰色、黒の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
207	土師器	高坏 坏部	SA8				ナデ　ミガキ 風化気味　スス付着	横ナデ　黒変	浅黄橙	浅黄橙 灰白	1mm以下の灰の砂粒	
208	土師器	高坏 脚部	SA8				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	2mm以下の乳白色、黒、灰色の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
209	土師器	高坏 裾部	SA8		14.2		丁寧なナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の灰白の砂粒	
210	土師器	高坏 裾部	SA8				ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	1mm以下の灰色の砂粒	
211	土師器	高坏 裾部	SA8				ナデ　風化気味	ナデ　風化気味	浅黄橙	浅黄橙 橙	2mm以下の赤褐色粒 光透明光沢粒	
212	土師器	鉢 口縁～体部	SA8	15.8			ナデ　ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	浅黄	精良	
213	土師器	坏 口縁～底部	SA8	11.35	6.3	4.7	ナデ　ミガキ 黒変　ヘラ記号	ナデ　↔方向の工具痕 ミガキ　指頭痕	にぶい黄橙 褐灰	明黄褐 褐灰	1mm以下の黒色の砂粒	
217	土師器	甕 口縁～胴部	SA9	23.6			ナデ　工具ナデの後ナデ 粘土のかえり　指頭痕　スス付着	ナデ　工具ナデ 粘土の継ぎ目　黒斑	橙 浅黄橙	浅黄橙 橙	8mm以下の灰褐色の粒 6mm以下の褐色の粒	
218	土師器	甕 口縁～胴部	SA9	19.2			横ナデ　指頭痕 スス付着	横ナデ　指頭痕	にぶい黄橙	浅黄橙	4.5mm以下の灰褐色 黒色、橙色の粒	
219	土師器	甕 口縁～胴部	SA9	16.8			ナデ　タタキの後ナデ ハケ目　スス付着	ナデ　粘土の継ぎ目 指頭痕	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	2mm以下の茶褐色 黒褐色の砂粒	
220	土師器	甕 口縁～底部	SA9	18.9	23.2	5.8	縦、横方向のナデ 口唇部　頸部に帯状の指頭痕 粘土のかえり　スス付着	ナデ　粘土の継ぎ目 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～6mmの灰、茶 淡黄、褐色の粒	
221	土師器	甕 口縁	SA9				横ナデ	横ナデ　黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の茶褐 黒褐、灰白の砂粒	
222	土師器	甕 口縁	SA9				横ナデ	横ナデ	灰黄	灰黄	0.5mm以下の茶、褐色の砂粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
223	土師器	甕 口縁	SA9				ナデ　粘土のかえり スス付着	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2.5mm以下の茶、褐色の砂粒	227と同一か

第６表　上の原第３遺跡出土土器観察表（６）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
224	土師器	甕 口縁	SA9				ナデ　粘土のかえり 指頭痕	ナデ　指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4.5mm以下の褐、黒褐の粒	
225	土師器	甕 口縁	SA9				ナデ　粘土のかえり スス付着	ナデ　スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色の粒	
226	土師器	甕 口縁	SA9				ナデ　粘土のかえり スス付着	ナデ　指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の灰白 3mm以下の褐色の砂粒	
227	土師器	壺 頸部～胴部	SA9				ナデ　刻み目突帯	ナデ　指頭痕　粘土の継ぎ目	暗灰黄 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	2.5mm以下の茶、褐色の砂粒	223と同一か
228	土師器	壺 口縁～頸部	SA9	11.6			横ナデ　刻み目突帯（布痕）	ナデ　横方向のハケ目の後ナデ 指頭痕　粘土の継ぎ目	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の灰白 茶褐色の砂粒	
229	土師器	高坏 坏部	SA9				ナデ　風化気味	ナデ　スス付着	浅黄橙	浅黄橙 橙	1.5mm以下の黒い砂粒 1mm以下の光沢の砂粒	
230	土師器	高坏 脚部	SA9				ミガキ　風化気味	ナデ　指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	精良	
231	土師器	坏 口縁～底部	SA9	17.45			ナデ　風化気味	ナデ　風化気味	橙	橙	2mm以下の灰色の砂粒 1mm以下の黒色の砂粒	
232	土師器	坏 口縁～体部	SA9	15.0			ナデ　風化気味	ナデ　風化気味	浅黄橙 橙	橙	1mm以下の黒色 灰色、光沢の砂粒	
233	須恵器	壺 胴部	SA9				平行タタキ	同心円当て具痕の後ナデ	黄灰	黄灰	3mm以下の白色の砂粒 1mm以下の黒色の砂粒	
234	須恵器	壺 胴部	SA9				平行タタキ	同心円当て具痕の後ナデ	灰	灰	1mm以下の白色砂粒	
236	土師器	甕 口縁～頸部	SA10	15.5			横ナデ 頸部に突帯剥離痕	横ナデ　剥離面多い	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の白、灰白、褐、赤褐色砂粒 透明、黒色光沢粒	237と同一
237	土師器	甕 胴部～底部	SA10		2.4		ナデ　黒変 剥離面多い	ナデ　大部分が剥離	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の白、灰白、褐、赤褐色砂粒 透明、黒色光沢粒	236と同一
238	土師器	甕 口縁	SA10				横ナデ　指頭痕　黒変	横ナデ	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙	1.5mm以下の灰白色、灰黄色、灰白色 透明光沢、黒色光沢の砂粒	
239	土師器	甕 口縁	SA10				ナデ　指ナデ	横ナデ　指ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐色 黒色、透明光沢の砂粒	
240	土師器	甕 口縁	SA10				ナデ　指頭痕　スス付着	横ナデ　指頭痕　粘土の継ぎ目	にぶい黄橙	浅黄橙	3mm以下のにぶい橙色、灰褐色、灰白色 灰黄色、黒色光沢、透明光沢の砂粒	
241	土師器	甕 口縁	SA10				ナデ	風化の為調整不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の棒状で黒色光沢、灰色 灰白色、透明光沢の砂粒	
242	土師器	甕 胴部～底部	SA10		4.9		斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄橙	灰黄 暗灰黄	5mm以下で黄褐 灰褐、乳白、褐の粒	
243	土師器	甕 底部	SA10		5.3		ナデ　木ノ葉底 底部に凹	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	5mm以下で褐 黄褐、灰白の粒	
244	土師器	甕 胴部～底部	SA10				斜方向のハケ目 ナデ　黒斑	ナデ　風化著しい	にぶい黄橙 黄灰	にぶい黄橙	5mm以下で黄褐 灰褐、茶褐、灰白の粒	
245	土師器	甕 底部	SA10				ナデ	ナデ	にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙	5mm以下で黄褐 灰褐、褐、無色透明の粒	
246	土師器	壺 口縁～頸部	SA10	26.7			ナデ　刻み目突帯（布痕）	ナデ　風化気味　粘土の継ぎ目	橙	橙 灰黄褐	微細な透明光沢粒 3mm以下の浅黄、灰褐、褐灰の砂粒	247と同一
247	土師器	壺 頸部～肩部	SA10				ナデ　刻み目突帯（布痕）	ナデ　風化気味	橙	橙 暗灰黄	微細な透明光沢粒 2mm以下の灰褐、浅黄、褐灰の砂粒	246と同一
248	土師器	壺 頸部～底部	SA10				ナデ　黒斑	ナデ　粘土の継ぎ目	にぶい黄	にぶい黄橙	精良 1mm以下の黒色、半透明光沢粒	
249	土師器	高坏 坏部	SA10				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい黄橙	精良	
250	土師器	高坏 坏部	SA10	18.7			ナデ　風化気味	ナデ　風化気味、黒斑	浅黄	浅黄 橙	2mm以下の半透明光沢粒 1.5mm以下の黒色光沢粒	
251	土師器	高坏 坏部	SA10	17.9			横ナデ　黒変　スス付着	ナデ　風化気味	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の半透明光沢粒	
252	土師器	高坏 脚部	SA10				ナデ	ナデ　指頭痕	浅黄橙 にぶい橙	橙	2mm以下の透明光沢粒 3mm以下の茶色、白、黒く光る砂粒	
253	土師器	高坏 脚部	SA10				ナデ　風化気味	縦方向のナデ　指頭痕	浅黄橙 にぶい橙	浅黄橙	1mm以下の黒色光沢粒 0.5mm以下の褐色、白色の砂粒	
254	土師器	高坏 脚部	SA10				ナデ　風化気味	縦方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐色の砂粒	
255	土師器	高坏 裾部	SA10		12.3		横ナデ　黒斑	横ナデ	橙 黒	橙	1mm以下の灰褐色、茶褐色の砂粒 微細な光沢粒	
256	土師器	高坏 裾部	SA10		11.0		横ナデ　黒斑	横ナデ　黒斑	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	1mm以下の黒褐色、灰褐色の砂粒 微細な光沢粒	
257	土師器	高坏 裾部	SA10				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒褐色、茶褐色の砂粒 微細な光沢粒	
258	土師器	鉢 口縁	SA10				ナデ	ナデ	橙	明黄褐	2mm以下の褐色、淡黄 灰色の砂粒 半透明光沢粒	259と同一
259	土師器	鉢 胴部～底部	SA10		4.9		ナデ　風化気味	ナデ　風化気味	橙	橙	3mm以下の灰、淡黄 乳白色の砂粒	258と同一
260	土師器	鉢 口縁～底部	SA10	7.9	4.2	7.4	ナデ　粘土のかえり 底部外面に凹	ナデ　指頭痕	明黄褐	明黄褐	2mm以下の褐色、乳白色の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
261	縄文土器	深鉢 口縁	Ⅳ層				口唇部にキザミ　地文に貝殻条痕 3～4段の横位の貝殻腹縁刺突文 胴部に縦方向の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	橙 にぶい橙	橙	1.5mm以下の乳白色 1mm以下の黒色光沢粒 透明光沢粒	知覧式土器
262	縄文土器	深鉢 口縁	SA4				口唇部にキザミ　地文に貝殻条痕 3～4段の横位の貝殻腹縁刺突文 胴部に縦方向の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の乳白色 灰色の砂粒	知覧式土器
263	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				地文に貝殻条痕 2段の楔形貼付突帯 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	にぶい黄橙	橙	1.5mm以下の赤褐 灰白の砂粒 1mm以下の透明光沢 黒色光沢粒	知覧式土器

２　Ⅳ層以下の遺構・遺物（縄文時代早期以前）

前章で述べたように、Ⅳ層以下（縄文時代早期以前）の調査については、トレンチを設定し遺構・遺物の検出された部分のみを掘り広げるという断片的な調査にとどまった。その結果、礫群２ヵ所と集石遺構９基を検出し、多少の遺物が出土した。

礫群

調査区北縁と中央部やや南よりの２ヵ所で礫群を検出した。これらは、礫がある程度のまとまりをもって検出されるものの、集石遺構のように密に集中したり土坑を伴なったりしないもので、疎らに広範囲に礫が検出された。礫群１、礫群２ともにⅣ層下半部で検出されている。調査区北縁の礫群１内で、特に礫が集中する部分が１ヵ所確認され、１号集石遺構として図化した。

集石遺構（第30図）

９基の集石遺構は、１号が礫群１内で、２・８・９号が調査区南東部で、３～７号が調査区中央部で、それぞれ検出された。このうち１・２・４・５・６号を図化し、他は写真と観察所見のみを記録した。

１号集石

１号集石は、100×90cmの範囲に礫が見られた。Ⅴ層上面に構築される。検出時は平面的に土坑を確認することはできなかったが、約15cmの厚みで重なった礫を除去すると、浅い皿状の落ち込みとなった。10cm前後の大きさの礫が使用され、全体に角張ったものが多かった。赤化した礫が多かったが、炭化物はあまり見られなかった。

２号集石

２号集石は、Ⅵ層に掘り込まれて構築される。直径70cmの土坑は深さ15cmと浅いものの、比較的明瞭な掘り込みとして検出された。埋土は炭化物を多く含む黒褐色土で、底面付近には焼土と思われる赤橙色のブロックが確認された。礫は45×35cmの範囲に疎らに見られ、ほとんどが赤化し破砕した３cm以下の小さなものである。

炭化物を多く含む土坑埋土や底面付近の焼土の存在などから、その場で火が使われたことが推定され、焼礫供給の場（火処）であった可能性が高い。また、付近に検出された８号・９号集石も、同じくⅥ層中に構築され、土坑や礫の状況が２号に近似していたことから、ほぼ同時期で性格を同じくする遺構と考えられる。また、周辺の同レベルから早期土器が出土しないことから、草創期以前の所産と考えられる。

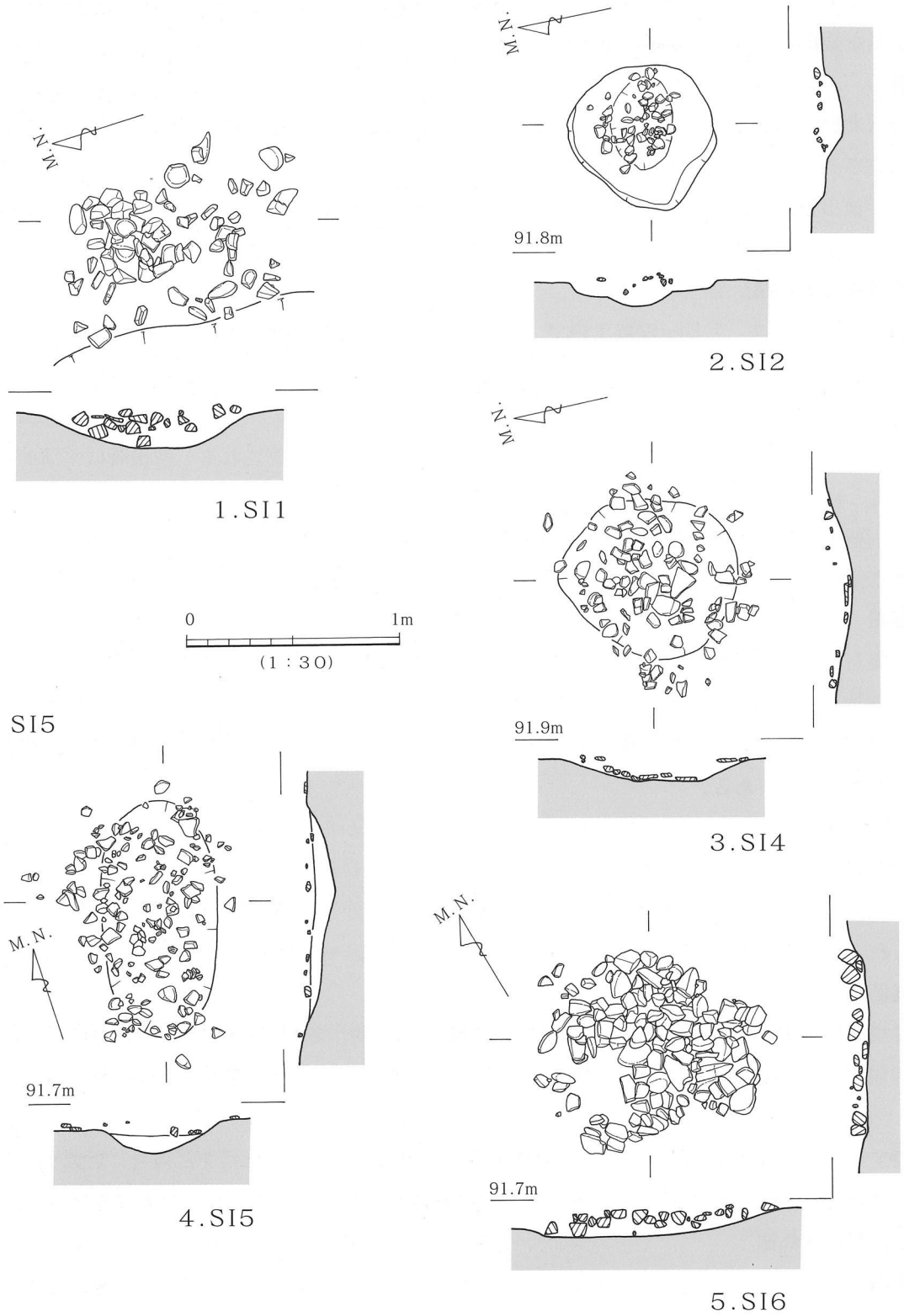
４号集石

４号集石は、85×75cmの円形土坑を有し、Ⅴ層上面に検出された。10cmと浅い掘り込みの底面には、比較的偏平な礫が並び、埋土は炭化物を多く含む黒褐色土であった。礫の多くは赤化し角張ったものである。

近接する３号集石はほぼ同一レベルでの検出で、礫の大きさやその形状など４号に近似するものの、掘り込みはなく平面的な礫の集積であった。炭化物もほとんど見られず、４号集石に対する準備礫としての性格が想定される。

５号集石

５号集石は、110×55cmと楕円形の土坑を有し、Ⅴ層上面に検出された。約15cmの厚みをもつ埋土は黒褐色土・褐色土の混土で、炭化物と屑礫を多く含んでいた。土坑上面に見られた焼礫は、３～５cmと小さく砕けた角礫が多く、そのほとんどが赤化していた。礫間に知覧式土器の破片が数点見られた。



第30図　　集石遺構（1/30）

6号集石

６号集石は、５号に近接して検出された。明瞭な掘り込みは持たず、110×95cmの範囲に礫が集中している。礫はほとんどが赤化しているものの、割れたものは少なく完形度が高い。礫間には炭化物がみられず、５号集石に対する準備礫としての性格が想定される。また、７号集石も５・６号とほぼ同レベルで検出されたが、６号同様掘り込みを持たず割れていない礫の集積であり、炭化物もほとんど見られなかった。その性格も６号のそれに共通すると考えられる。

出土遺物（第31・32図）

貝殻文円筒形土器を主体に、いくつかのタイプの早期土器が出土している。ここでは文様・器形をもとに分類を行う。

１類（261～274）

口縁部がやや外傾する円筒形で、薄手の器壁にやや厚みのある円盤状の平底がつく。文様は、口唇部に細かな刻み目、口縁部下に横位の貝殻腹縁刺突文がめぐる。その下にクサビ形突帯を縦位に２段ほど貼り付けている。胴部は斜位の貝殻条痕を地文に、縦位や斜位の貝殻腹縁刺突文を施す。底部には縦位の細沈線がめぐっている。「知覧式土器」と呼ばれる一群である。272は角筒となる。

本遺跡で最も多く出土した早期土器で、３号～７号の集石遺構はこの類の土器を伴う。

２類（275～281）

やや厚めの器壁に横位あるいは斜位の貝殻条痕を施す一群である。275・276は、口縁部下に縦位の条痕を施す。277は口唇部に刻みを施す。28は底部で、最下部まで横位の貝殻条痕が施される。

３類（282・283）

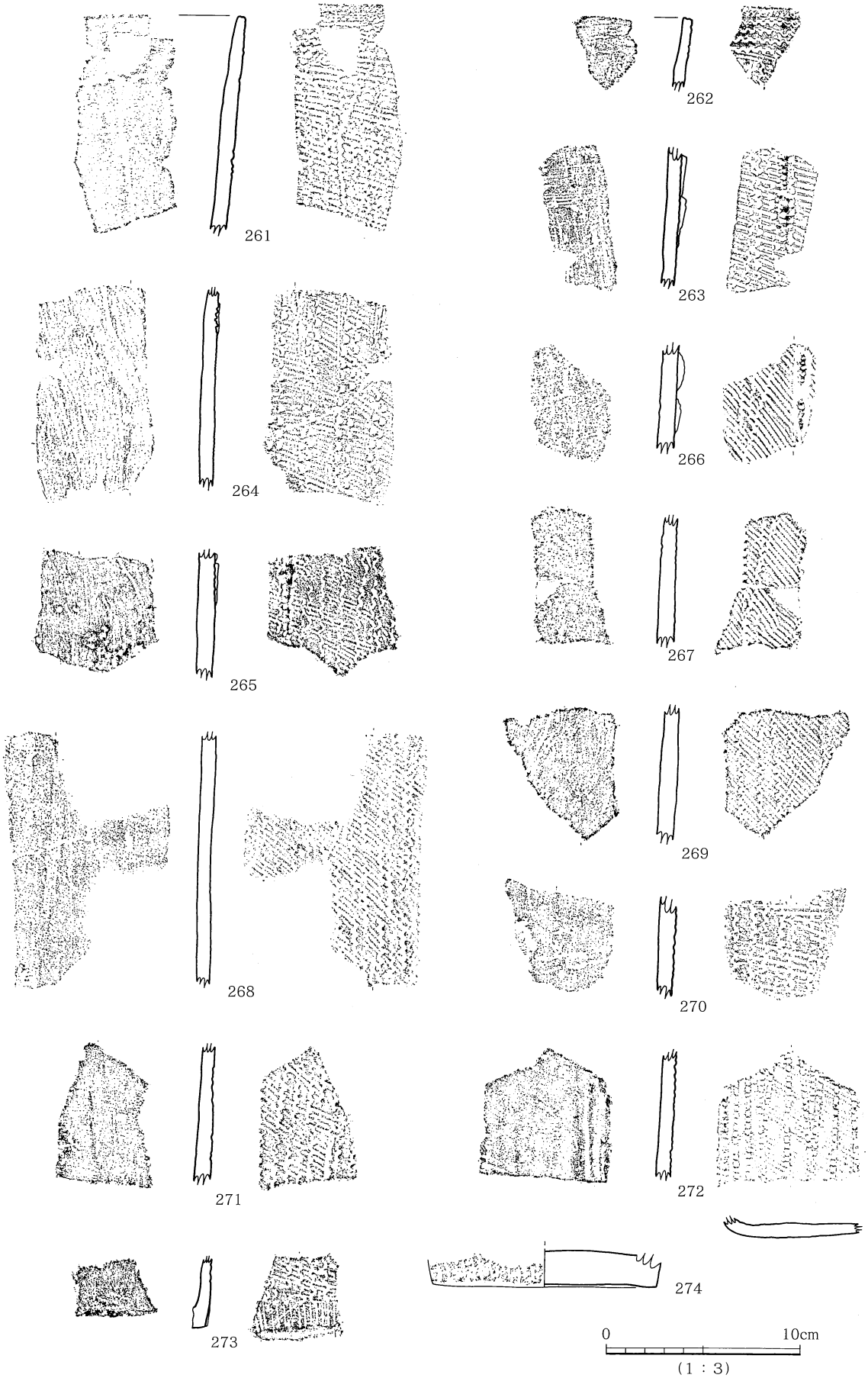
大きく外傾する口縁を持つもので、「平栫式土器」である。282は、やや肥厚気味の口縁帯に横位・斜位の凹線文を施し、その下に半裁竹管による連続刺突文を２段めぐらせている。283は、斜位の凹線文の下に刻み目突帯が見られる。

４類（284）

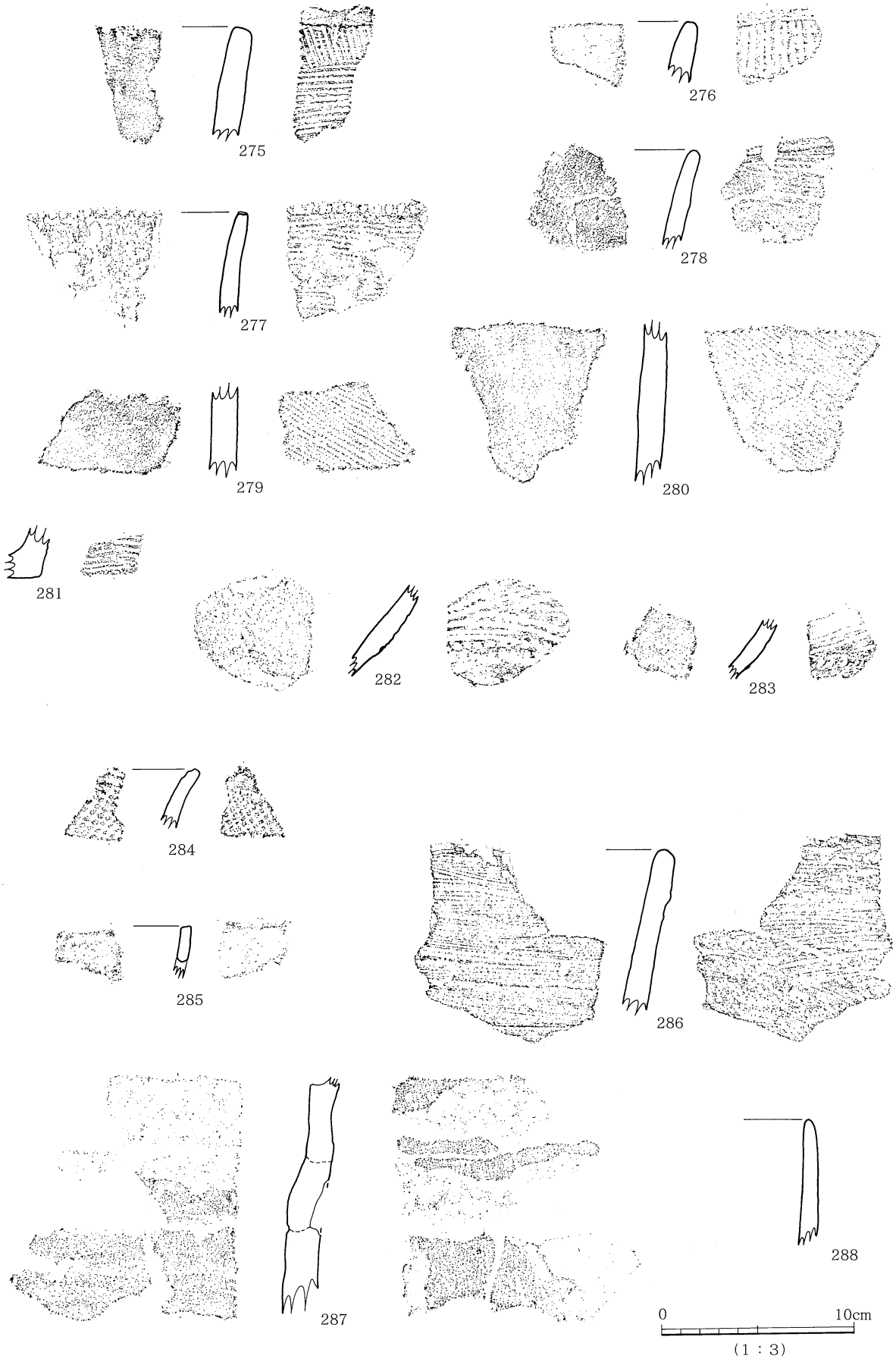
一点のみの出土であるが、押型文土器である。やや外反気味の口縁部の内外面に楕円押型文が施される。内面には口唇部付近に押圧が見られ、横位の押型施文、外面は斜位の施文である。

５類（285～288）

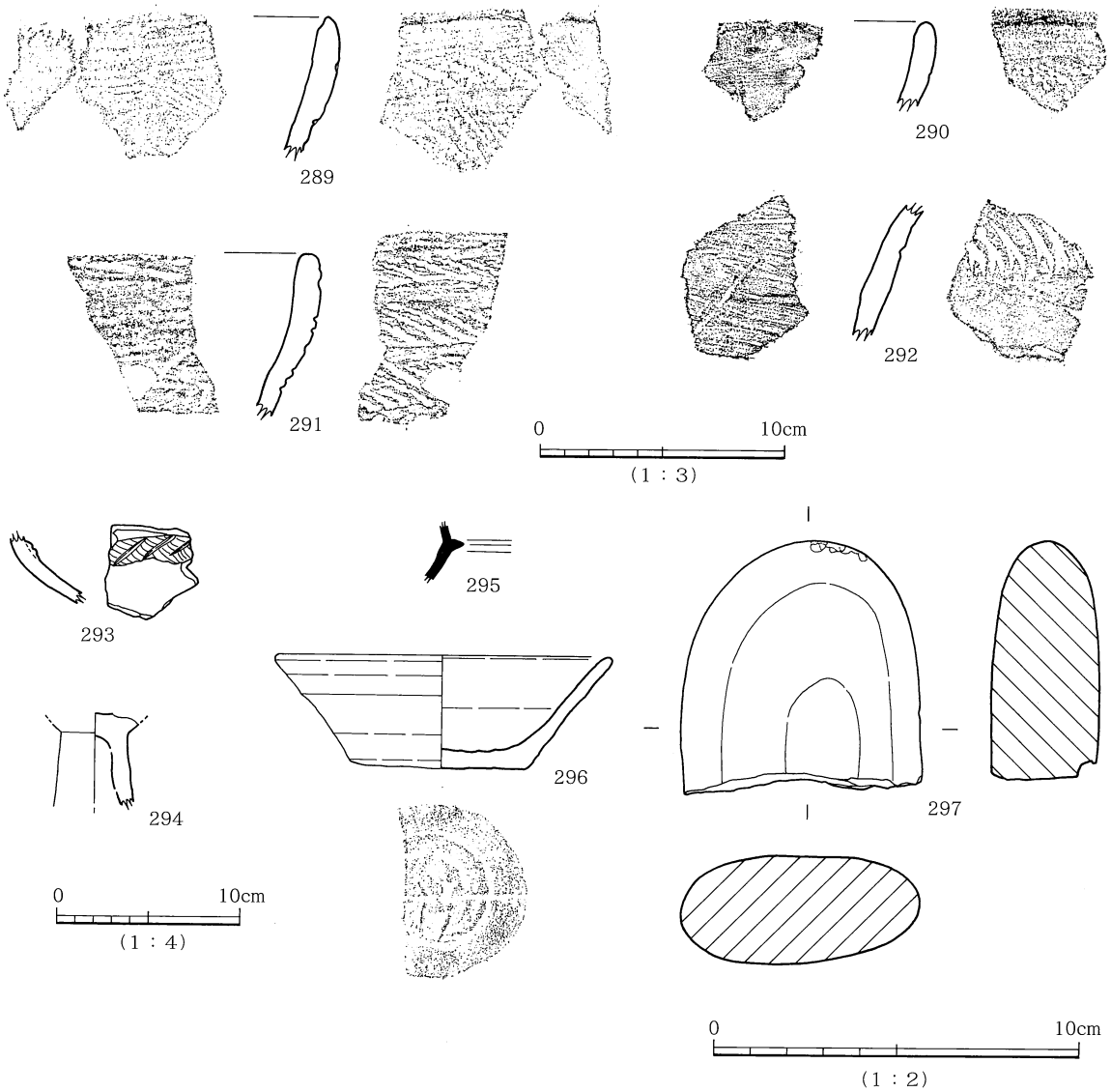
早期土器の範疇に入ると思われるが、明確にその分類的根拠を示し得ないものを便宜的に一括した。285は、やや内湾気味の口縁部で、口唇部を平坦に仕上げる。器壁は薄手で、両側から穿った円形の補修孔が見られる。外器面にわずかに斜位の条痕が観察されるが、その上をナデて仕上げている。286は、厚手の器壁の内外面に横位の貝殻条痕が施されるが、焼成は非常に硬質で色調は白っぽく、II類とは異なるタイプの土器である。口縁部下２cmのところに凹線状のものが確認されるが、口縁帯の区画の意図があるのか否かは判断し得ない。287は厚手の器壁で、焼成は軟質、内外面ともに剥離・風化が著しい。調整は粗いナデで、粘土の輪積み痕が明瞭である。288は、口唇部を丸く仕上げる直口縁の鉢で、調整は内外面とも丁寧なナデである。



第31図　縄文時代早期土器(1)（1/3）



第32図　縄文時代早期土器(2)（1/3）



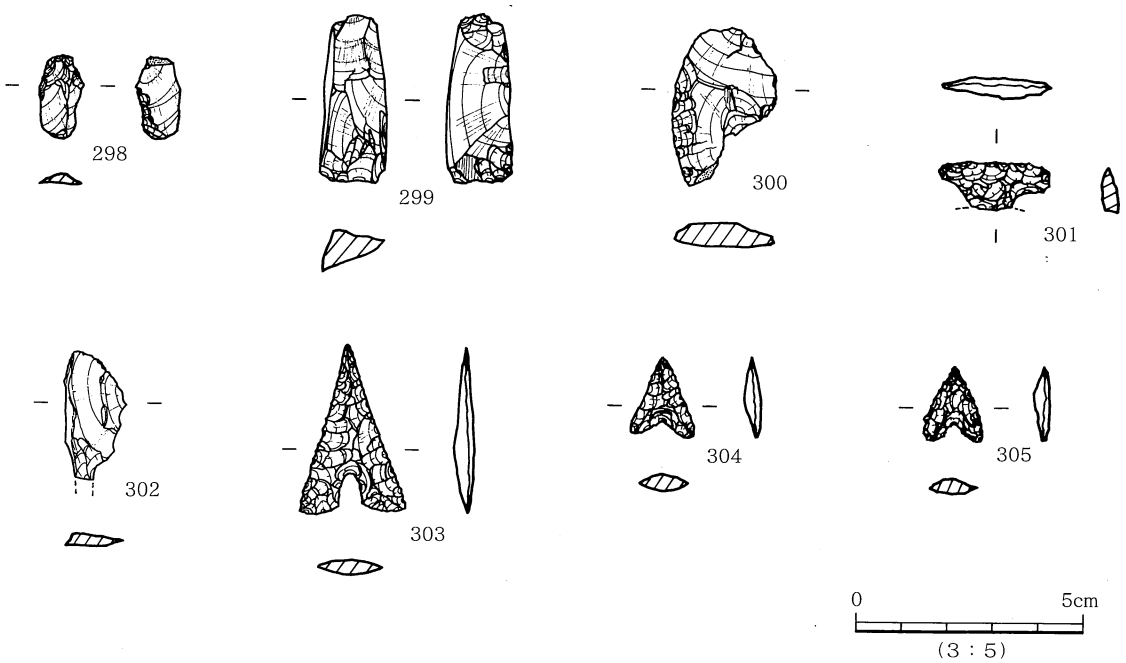
第33図　　表土出土遺物(1)（293・294は1/4、297は1/2、他は1/3）

3　表土出土の遺物（第33・34図）

289～291は、肥厚気味の口縁部に、斜位の貝殻腹縁刺突を２～３段やや間隔をおいて施している。292は、やや外傾する口縁に貝殻腹縁刺突によるロッキングが施されている。これらは縄文時代後期に比定される。

293～295は、古墳時代の遺物である。293は壺で、頸部に刻みを有する貼付突帯が見られる。294は円柱状の高坏脚部である。295は須恵器坏身である。受部はやや太めで、鋭さを失う。

296は古代の土師器坏で、直線的な体部に丸く仕上げた口縁部を持つ。底部はヘラ切りで、その後を軽くナデている。



第34図　　表土出土遺物(2)（60%）

297は磨石で、側面に敲打痕が見られる。砂岩製。298は黒耀石の細石刃で、頭部を残している。長さ1.8cm 、幅0.9cm で、背面左側縁に小剥離状の使用痕が認められる。299は黒耀石の二次加工剥片で、断面三角形の横長剥片の両側に細かな剥離を加えている。300は黒耀石製のスクレイパーである。光沢の少ない黒灰色を呈し、姫島産の石材と思われる。偏平な不定型剥片の片側縁に小剥離による刃部を作り出している。301は、黒耀石製の縦型石匙の基部と思われる。302チャート製の石錐である。303はチャート製の打製石鏃で、全面に細かな剥離を施す整美な鍬形鏃である。304は姫島産黒耀石製の打製石鏃で、乳白色を呈す。基部の抉りは山型で、さほど深くない。305は黒耀石製の打製石鏃である。小型のものであるが、基部をU字に抉る鍬形鏃である。

第７表　上の原第３遺跡出土土器観察表（７）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
264	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				地文に貝殻条痕 ２段の楔形貼付突帯剥離 突帯両側に列点文 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	明赤褐 にぶい黄橙	明赤褐	2mm以下の赤褐、灰白の砂粒 2mm以下の透明光沢粒 黒色光沢粒	知覧式土器
265	縄文土器	深鉢 胴部	SA4				地文に貝殻条痕 ２段の楔形貼付突帯 突帯両側に列点文 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	にぶい赤褐	橙	１mm以下の乳白色 灰色の砂粒	知覧式土器
266	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				地文に貝殻条痕 ２段の楔形貼付突帯 突帯頂部に刻み目 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	暗灰黄	にぶい黄褐	4mm以下の半透明光沢粒 1.5mm以下の金色光沢粒 2mm以下の乳白色粒	知覧式土器
267	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				地文に貝殻条痕 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	2.5mm以下の金色粒 半透明粒、乳白色粒	知覧式土器
268	縄文土器	深鉢 胴部	SI4				地文に貝殻条痕 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	橙 にぶい橙	橙	2mm以下の透明光沢粒 黒色光沢粒　乳白色の砂粒	知覧式土器
269	縄文土器	深鉢 胴部	SI5				地文に貝殻条痕 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	橙	橙	3mm以下の褐色、黒色、乳白色の砂粒 1.5mm以下の透明光沢粒	知覧式土器
270	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				地文に貝殻条痕 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	1.5mm以下の灰白、褐色の粒 1mm以下の透明光沢粒、黒色光沢粒	知覧式土器
271	縄文土器	深鉢 胴部	SA4				地文に貝殻条痕 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の乳白色の砂粒 2mm以下の黒色、透明光沢粒	知覧式土器
272	縄文土器	深鉢（角筒） 胴部	SA4				地文に貝殻条痕 縦の貝殻腹縁刺突文	粗いナデ	にぶい橙 暗灰黄	にぶい橙 褐灰	1mm以下の乳白色の砂粒 透明光沢粒	知覧式土器
273	縄文土器	深鉢 底部	Ⅳ層				地文に貝殻条痕 縦の貝殻腹縁刺突文 底部に縦方向の細刻線	粗いナデ	にぶい褐	にぶい褐	1mm以下の透明光沢、黒 乳白色の砂粒	知覧式土器
274	縄文土器	深鉢 底部	Ⅳ層		11.6		底部に縦方向の細刻線	粗いナデ	にぶい橙	橙	3mm以下のにぶい黄、灰白、黒色の砂粒 2mm以下の黒色光沢、透明光沢粒	知覧式土器
275	縄文土器	深鉢 底部	Ⅳ層				口縁部に縦方向の貝殻条痕 胴部は横方向の貝殻条痕	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙 褐灰	1mm以下の白色の砂粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
276	縄文土器	深鉢 口縁	Ⅳ層				口縁部に縦方向の貝殻条痕 胴部は横方向の貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の白、黒の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
277	縄文土器	深鉢 口縁	Ⅳ層				口唇部にキザミ 横方向の貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	1mm以下の透明光沢粒 0.5mm以下の乳白色の砂粒	
278	縄文土器	深鉢 口縁	SI4				横方向の貝殻条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい褐 褐灰	1mm以下の透明光沢粒 2mm以下の褐色、白色の砂粒	
279	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				斜方向の貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	橙	2.5mm以下の乳白色粒、半透明、 透明光沢粒　1mm以下の黒色光沢粒	
280	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				斜方向の貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の黒色 透明光沢粒	
281	縄文土器	深鉢 底部	SI2				横方向の貝殻条痕 底部外面綱代底	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の黒色 半透明光沢粒	
282	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				半裁竹管による羽状凹線 連続刺突文	ナデ	橙	浅黄	2mm以下の浅黄、黒、灰 褐色の砂粒及び光沢粒	平栫式土器
283	縄文土器	深鉢 胴部	Ⅳ層				斜めの凹線文 刻み目突帯	ナデ	橙	にぶい橙	2mm以下の黒、灰白色の砂粒	平栫式土器
284	縄文土器	深鉢 口縁	SI2				ナデ 楕円押形文	楕円押形文 押圧沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の黒色、透明光沢粒	
285	縄文土器	深鉢 口縁	SA9				ナデ　穿孔	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6.5mm以下の乳白色の粒 2mm以下の黒色光沢粒	
286	縄文土器	深鉢 口縁	Ⅰ層				貝殻条痕	貝殻条痕	浅黄	浅黄	3mm以下の黒、灰、灰白 橙、透明光沢粒の砂粒	
287	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	SA10				ナデ　粘土の継ぎ目 風化気味	ナデ　粘土の継ぎ目 風化気味	灰黄	灰黄	5mm以下の褐色の粒 3mm以下の乳白色、黒、透明光沢	
288	縄文土器	深鉢 口縁	Ⅳ層				ナデ　風化気味	ナデ	灰 にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白、透明光沢粒	
289	縄文土器	深鉢 口縁	SA2				横ナデ 貝殻腹縁による連続刺突文	貝殻条痕の後ナデ	明赤褐 にぶい赤褐	明赤褐 にぶい赤褐	3mm以下の橙、黄褐、灰白の砂粒 1mm以下の透明、黒色光沢粒	
290	縄文土器	深鉢 口縁	SA2				横ナデ 貝殻腹縁による連続刺突文	貝殻条痕の後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐、灰白の砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
291	縄文土器	深鉢 口縁	Ⅱ層				横ナデ 貝殻腹縁による連続刺突文	貝殻条痕の後ナデ	橙	橙	2.5mm以下の黄橙、灰褐、灰白の砂粒 2mm以下の黒色、透明光沢粒	
292	縄文土器	深鉢 胴部	SA1				ナデ　貝殻腹縁による連続押圧 （ロッキング）	ケズリ	橙	橙	1mm以下の灰白、褐、黄褐の砂粒 1mm以下の黒色、透明光沢粒	
293	土師器	壺 肩部	Ⅱ層				ナデ　貼付突帯の後ヘラ方向にヘラによる押圧刻み　その後↗方向にヘラによる刻み	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5mm以下の灰白、橙色の砂粒 2mm以下の黒色、透明光沢粒	
294	土師器	高坏 脚部	Ⅱ層				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒、灰黄 赤褐色の砂粒	
295	須恵器	坏 身	Ⅱ層				横ナデ 受け部に沈線	横ナデ	灰黄	灰	1mm以下の灰黄、黒 橙色の砂粒	
296	土師器	坏 口縁～底部	Ⅰ層	13.6	7.2	4.7	ナデ ヘラ切りの後ナデ	回転ナデ	橙	橙	3mm以下の橙、灰褐色の砂粒	

第８表　上の原第３遺跡出土石器・鉄器計測表

遺物番号	出土地点	器　種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　材	備　考
17	SA1	磨石	11.1	9.0	5.7	850	尾鈴山系　酸性凝灰岩	
18	SA1	石皿	38.9	26.7	10.0	2100	砂岩	
69	SA2	磨石	10.2	7.9	5.1	550	砂岩	
70	SA2	石斧	9.2	4.5	1.6	88	頁岩	
130	SA4	敲石	6.9	10.9	5.5	560	砂岩	
131	SA4	石皿	26.6	18.4	11.8	3990	砂岩	
171	SA5	石錘	5.9	8.2	1.7	59.2	溶結凝灰岩	
184	SA6	磨石	10.3	9.6	5.8	790	砂岩	
214	SA8	磨石	8.5	8.2	3.6	33.5	砂岩	
215	SA8	砥石	15.5	5.4	3.4	478	砂岩	
216	SA8		3.1	4.3	1.7	10.6	凝灰岩	
235	SA9	敲石	9.8	5.9	3.2	300	砂岩	
297	Ⅰ層	磨石	7.0	6.7	3.0	199	砂岩	

遺物番号	出土地点	器　種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　材	備　考
298	Ⅳ層	細石刃	2.0	1.3	0.3	0.5	黒耀石	
299	Ⅳ層	2次加工剥片	3.8	1.5	0.9	5.5	黒耀石	
300	SA8	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	3.5	2.3	0.6	3.8	黒耀石	
301	SA8	石匙	(1.1)	2.5	0.5	1.0	黒耀石	
302	SA9	石錐	3.0	1.4	0.3	1.3	チャート	
303	Ⅳ層	石鏃	3.8	2.3	0.5	1.8	チャート	
304	SA1	石鏃	1.8	1.4	0.4	0.5	黒耀石	
305	SA8	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.5	黒耀石	

遺物番号	出土地点	器　種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	鉄	備　考
68	SA2		(2.5)	(1.7)	0.12	1.3		
170	SA5	鉄鏃	(8.7)	(5.3)	0.2	19.9		

第９表　上の原第３遺跡竪穴住居跡一覧表

住居No	規模（長×短×深）(m)	床面積 (m²)	柱穴 (本)	貼床	住居内施設	出　土　遺　物
SA1	5.5×5.1×0.5	24.94	4	有	土坑、カマドか？	甕、壺、坏、ツキフタ、磨石、石皿
SA2	6.5×6.5×0.8	35.42	4	有		甕、壺、高坏、ツキミ、カメ、鉄片、磨石、石斧
SA3	4.2×　×1.0	(5.38)	(4)	無		甕、壺、高坏、鉢、坏、フタ
SA4	4.6×4.4×0.5	16.39		有	土坑	甕、壺、高坏、鉢、坏、敲石、石皿
SA5	3.8×3.8×0.7	11.60	4	無		甕、高坏、坏、鉄鏃、石錘
SA6	5.0×　×0.45	(24.8)	4	有	焼土	甕、壺、高坏、坏、カメ、磨石
SA7	5.1×4.8×0.4	(21.1)		有		甕、壺、高坏
SA8	4.0×3.5×0.7	11.35		有	土坑	甕、壺、高坏、鉢、坏、磨石、砥石
SA9	6.1×4.8×0.3	28.40	4	無	張出し、焼土	甕、壺、高坏、坏、カメ、敲石
SA10	4.0×4.0×0.7	14.23	2	無	土坑	甕、壺、高坏、鉢

（　）は現存値または推定。遺物のカタカナは須恵器

第Ⅳ章　まとめ

第Ⅱ章で述べた通り、時屋地区遺跡群の立地するシラス台地の広大な平坦面は、ほぼ全面が遺跡と言っても過言ではなく、各遺跡は小規模な谷地形等により便宜的に区分されているに過ぎない。各時期の本来的な人間活動の痕跡は、遺跡の区分を越えて広がっており、遺跡群として全体を見据えた検討が不可欠となる。

上の原第３遺跡では、縄文時代早期及び古墳時代中・後期の遺構・遺物が検出され、旧石器時代・縄文時代後期・平安時代の遺物も僅かながら出土した。これらを時屋地区遺跡群全体の中で見渡すと、旧石器時代から縄文時代については、椎屋形第１・第２遺跡、上の原遺跡(1)、上の原第１(2)・第２遺跡(3)、白ケ野第３遺跡(4)に分布の中心があり、平安時代については、上の原第２遺跡、白ケ野第３遺跡に遺構が検出されている。

上の原第３遺跡で検出された縄文時代早期の遺構・遺物は、時間的制約を受けた調査方法にも起因すると思われるが、その量は決して多いとは言えず、個別の検討を行うにはいささか材料不足である。他遺跡の報告を待って、群全体の中で検討を行いたい。

古墳時代については、上の原第１遺跡において前期～中期にかけての遺構・遺物が検出されている。上の原第３遺跡の竪穴住居群とは時期が相前後するものであり、遺構の形態にも若干の相違が見られる。ここでは、第３遺跡の遺構・遺物を検討し、時屋地区の古墳時代を考察する上での手掛かりとしたい。

・遺物について

10基の竪穴住居跡から土師器を中心とした多くの遺物が出土した。これらは、中期から後期にかけての資料であり、宮崎県内において住居出土としては数少ない貴重な資料である。特に２号住居からは、甕・壺・高坏の三器種が比較的良好な状態で出土している。これらの出土状況は、主なものを第９図に示したが、ほぼ床面直上のものと床面から浮いた状態のものが見られる。両者には同形態の高坏55・56が見られ、さほど大きな時期差はないものと思われる。この一群を軸に、他の住居出土資料と比較検討しながら、上の原第３遺跡の遺物群を考えてみたい。

２号住居の甕にはタタキ調整とナデ調整の両者が見られるが、ある程度全体形を知り得るのは後者である。やや不明瞭ながらも頸部に稜を持ち口径と胴部最大径がほぼ等しくなるものと、頸部に稜を持たず胴上部が最大径となるものが見られる。

壺は、球形あるいは扁球形の胴部と、丸底やそれに近い薄手の平底が見られる。小型丸底坩に系譜を持つ小型壺は、ナデ調整で平底となる。壺全体の出土量は安定している。

高坏はバラエティに富む。第Ⅲ章第２節で示した坏部と脚部の型式分類では、坏部に明瞭な稜を持つａ類に対し、やや不明瞭ながも稜を残し深さを増すｂ・ｃ類、稜の消滅するｄ類と新相を加える。脚部は内湾する裾部のａ類がより古相を示す。これらの組合せとしては、51はａ－ａ、52・53がａ－ｂ、55・56がｂ－ｃ、58がｃ－ｃとなる。出土状況をみると、53・56・58が床直上で出土しており、異なる形態の３点が確実に共伴していたと見なすことができる。また、51についても、出土地点の床面は貼り床が不明瞭で調査時に掘りすぎている危険性がある。レベル的には先の３点とほぼ同じであり、共伴の可能性もある。

１号住居には、流れ込みと思われる破片２点以外に壺は見られない。甕はいずれも平底で、全体に粘土の輪積み痕を残す。頸部は緩やかに湾曲し稜を持たない。小型の甕４は、頸部のしまりがほとんど見られず砲弾形となる。坏は深いものが多い。２号住居資料とは時期的な隔たりが感知され、須恵器坏蓋が示すＴＫ10の時期と考えられる。

３号住居は、部分的な調査に止まり遺物量も多くはないものの、２号住居に対応する器種がそろって出土している。甕には、タタキ調整で薄手のものが見られる。85の高坏裾部は、下半部が内側に屈曲し稜を有する。類例は宮崎学園都市遺跡群・熊野原遺跡Ｃ地区[5]ＳＡ10資料に見られ、古相を示すものと思われる。95の須恵器蓋は、鋭い稜、口縁端部内側の段、やや膨らみを持つ長めの口縁部、３分の２まで施される天井部のケズリなど古相を示し、ＴＫ23に相当する。

４号住居資料では、頸部に明瞭な稜を有し「く」字形に屈曲する96の甕、球形胴に尖底気味の小さな平底を持つ106の壺、明瞭な稜を持つ116・117の高坏坏部、裾部が強く短く屈曲する121の高坏脚部など、２号住居資料に対し古相を示すものと思われる。

５号住居資料の大半は埋土上半部からの出土で、あまり良好な資料とは言い難い。外半する甕口縁部や深さのある高坏坏部など、２号住居資料に併行あるいはやや新相を感知させるものであるが、162・163の高坏裾部はやや古相を示すと思われる。

６号住居資料は、高坏に４号住居資料に近似するものが見られる。

８号住居では、上げ底を意識した甕底部196・197が見られる。中・小型の壺はいずれも丸底である。206の高坏は、坏部のみ須恵器を模倣したものである。やや外傾気味に長く立ち上がり、口縁端部が外半する形状はやや古手の須恵器を模したものか。

９号住居では、タタキ調整をナデ消し器壁の薄い219や、薄手で球形胴・しっかりとした平底を持つ220の甕が古相を示す。

10号住居では、甕底部に尖底、尖底気味の平底、平底、平底の中央部を押圧にて凹ませたもの（上げ底の意識か）など様々なものが見られる。壺には大型の二重口縁（外傾）、小型の丸底壺が見られる。高坏は、短脚でやや新しい様相を示すもの、内湾する裾部でやや古相を示すものが見られる。

以上、上の原第３遺跡の遺物群を住居跡毎に概観したが、ＳＡ１が唯一６世紀代（ＴＫ10）に下る以外は、ほぼ同時期ととらえられる資料群である。ＳＡ２資料に対し古相・新相を示すものも含まれるが、ことさら時期の変遷を設定するほどではないと思われる。須恵器は良好な資料が少ないが、概ねＴＫ208～TK23の時期と思われる。

本遺跡２号住居資料と近接する時期のものとして、新富町八幡上遺跡[6] １号・３号住居資料、同上薗遺跡Ｅ・Ｆ地区[7] 資料、宮崎市学園都市遺跡群・熊野原遺跡Ｃ地区５号・７号住居資料、高岡町高岡麓遺跡[8] ２号住居資料等が上げられる。タタキ調整土器群の地理的偏在性などの点で若干の相違点を指摘し得るものの、大枠では共通項で括られよう。

八幡上遺跡では、遺物の詳細な出土状況が不明ながら、１号・３号の住居からタタキ調整の甕・壺、小型壺、高坏が出土している。直立する単口縁の壺や精製の小型丸底壺など、上の原第３遺跡よりもやや古い様相を示すが、平底化した小型壺や高坏の形態などに共通点を見い出し得る。

上薗遺跡Ｅ地区では、２号・４号・８号・14号・20号住居資料に近似するものを見い出し得る。甕は

頸部の稜がやや曖昧で、口径と胴部最大径が同じか後者がやや上回るものが多く、底部は丸みのある平底や尖底気味の小さな平底が目立つ。壺は量的に少ないものの、頸部に貼付突帯を有し長胴のものや、薄手で球形胴の中型壺、扁球形の胴部に平底となる小型壺などが見られる。調整はナデが主体である。高坏は、坏部に稜を残しながらも体部が立ち気味で深さの深いものが多い。脚部は、内湾する裾部を持つもの、強く屈曲し大きく開く直線的な裾部をもつものなどが見られる。須恵器にはＴＫ23～ＴＫ47の段階のものが目立つ。上の原第３遺跡と併行あるいはやや後出するものであろう。

上薗遺跡Ｆ地区では、土師器編年の見通しとしてⅠ期～Ⅴ期の時期設定がなされ、それぞれ布留式最新段階、ＴＫ208段階、ＴＫ23～ＴＫ47段階、ＴＫ10段階、ＴＫ43段階の時期が当てられている。そして、Ⅰ期とⅡ期、Ⅲ期とⅣ期（あるいはⅣ期とⅤ期）の間に大きな画期を見い出し、前者は須恵器の導入に、後者は埋甕の出現にその背景を求めている。報告者の谷口氏も自ら指摘するように、住居跡出土の資料をそのまま一括資料として扱っているため若干の時期幅を含む結果となっている。しかしながら、器種毎の変化の方向性や組合せには首肯させられ、当地域の編年基準として昇華されるべきものであろう。

熊野原遺跡Ｃ地区では、２基（５号・７号）の古墳時代竪穴住居が検出された。遺物のほとんどが床面から浮いた状態で出土しており、同一器種の形態差も大きい。甕は頸部屈曲が明瞭なものと曖昧なものが見られ、稜を持たず僅かに外反する程度の口縁も含まれる。底部は平底が優勢で、一部に上げ底気味のものや丸底化したものも見られる。壺は資料に乏しいが、小型丸底壺に伴って平底化した小型壺が存在する。また、直立あるいは若干外傾する二重口縁壺も見られる。高坏は、口縁が大きく開き体部との境の稜が不明瞭なものと、明瞭に屈曲し稜をなすものが見られる。脚部は、長く延びるものの他に、エンタシス状に中膨らみとなるものがある。これらはやや時期幅を含む資料と思われるが、全体的に上の原第３遺跡に先行するものであろう。中でも近接する時期のものとしては、頸部に稜を持たない甕や丸底化した球形胴の甕などが上げられ、布留式の新段階に併行するものと思われる。

高岡麓遺跡では、２基の竪穴住居とタタキ調整甕を主体とする遺物群が見られる。特に２号住居からは、床面からやや浮いた状態ではあるものの、甕・壺・高坏・鉢が多量に出土している。甕は粗いタタキ調整で、頸部に弱い稜を持つものと、頸部がしまらず砲弾形となるものがある。壺は、平底化した小型壺や中型で球形・扁球形の胴部を持つ丸底壺が見られる。高坏には坏部に稜を有するものが少なく、丸みを持ち深い坏部が目立つ。脚部は、ハ字形に緩やかに開き裾部との境に稜をなさないものが多い。須恵器は出土していないものの、上の原第３遺跡と併行あるいは若干後出する時期と考えられる。

上記の遺跡と上の原第３遺跡の遺物群を比較すると、八幡上遺跡・熊野原遺跡Ｃ地区がやや先行し、やや遅れて上薗遺跡Ｆ地区Ⅰ期が続く。上の原第３遺跡は、上薗遺跡Ｆ地区Ⅰ期～Ⅱ期に併行する。上薗遺跡Ｅ区は、同Ｆ区Ⅱ期～Ⅲ期にかけてピークを迎え、高岡麓遺跡もほぼこの時期に併行するものと思われる。

宮崎平野部の土師器の編年については吉本正典氏の論考がある[9]。吉本氏は、比較的資料に恵まれた児湯郡域を中心とする宮崎平野北部と、宮崎学園都市遺跡群を中心とする宮崎平野南部の小地域に限定し、土器組成中に一般的に須恵器が加わるＴＫ47型式以前の土師器を検討している。型式変化が緩慢である甕を基軸に据えながらも、各時期に普遍的に存在し、分化・収斂といった系統を複雑にする要因が少ないという観点から、二類四型式に分類し、２期５小期を設定している。氏の指摘のように、住居跡一括

資料とはいえ、その出土状況が不明確であるなど必ずしも資料的に精度の高くないものも含まれ、やや大きな時間幅を内包する。しかし、その分析手法や得られた型式変化の方向性は説得力を持ち、今後、より精度の高い資料との置き換えや他器種の分析を加えることにより、当地域の土師器編年の根幹をなすものと思われる。同氏は、予察として八幡上２期や熊野原Ｃ２期とＴＫ47型式期の間には１～２様式が存在することを指摘している。今回報告した上の原第３遺跡の資料群や、上薗遺跡Ｅ・Ｆ地区資料、高岡麓遺跡資料はその狭間を埋める資料であり、更なる詳細な検討を行う必要があろう。

・遺構について

10基の住居跡はいずれも方形プランで、主柱穴４本柱が６基、２本柱が１基、不明が３基である。貼り床は６基に、焼土は２基に見られた。壁帯溝はいずれの住居にも見られなかった。

床面積は、時期の異なる１号と一部のみの調査となった３号を除くと、最大で35.42m²、最小で11.35m²、ばらつきがあり一定の面積にまとまる傾向は見られない。

１号住居に見られた南壁沿の白色粘土塊は、被熱痕跡や炭化物・焼土が見られなかったものの、右側の土坑とセットでカマドの構造に類似するとの指摘もあった。宮崎県内におけるカマドの出現は、ＴＫ43段階での埋甕との併存が確認されており[10]、それらを遡る時期のものは知られていない。ＳＡ１出土の土師器は６世紀中葉に位置づけられ、須恵器もＴＫ10段階のものである。こうした年代観からみると、現段階ではＳＡ１の施設をカマド（あるいはその構築途中の段階）と見なすことは困難であろう。類例の増加を待ちたい。

<註>

(1) 宮崎市教育委員会　1996　『椎屋形第１遺跡・椎屋形第２遺跡・上の原遺跡』県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(2) 宮崎県教育委員会　1996　『上の原第１・第４遺跡、白ケ野第３遺跡』県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（2）

(3) 宮崎県教育委員会　1995　『上の原第２・第３遺跡』県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

(4) 宮崎県埋蔵文化財センター　1997　『白ケ野第３遺跡Ｂ地区』県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（3）　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第３集

(5) 宮崎県教育委員会　1985　「熊野原遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集

(6) 新富町教育委員会　1992　「八幡上遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集

(7) 新富町教育委員会　1995　「北原牧地区遺跡　上薗遺跡Ｆ地区」『新富町文化財調査報告書』第18集
新富町教育委員会　1996　「北原牧地区遺跡　上薗遺跡Ｅ地区（Ｉ）」『新富町文化財調査報告書』第19集

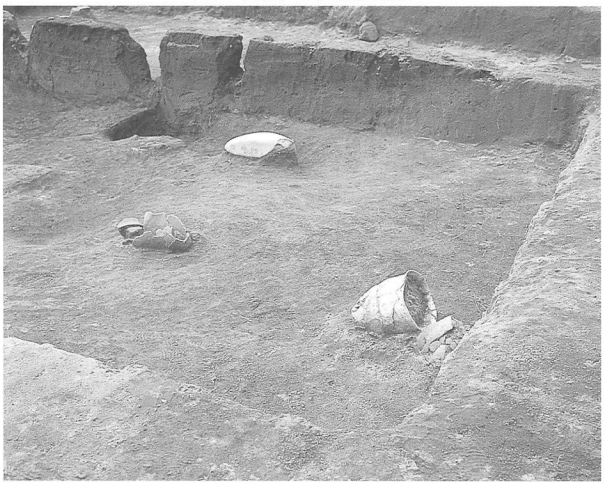
(8) 宮崎県教育委員会　1996　『高岡麓遺跡』高岡郵便局庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書

(9) 吉本正典　1995　「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察―須恵器出現以前の資料を中心として―」『宮崎考古』第14号　宮崎考古学会

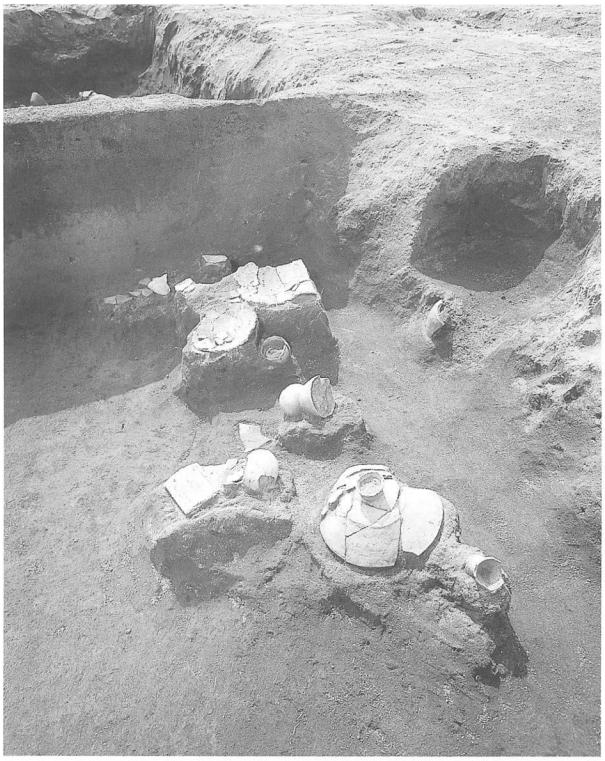
(10) 新富町教育委員会　1995　「北田地区遺跡」『新富町文化財調査報告書』第17集
西都市松本原遺跡においても同時期のカマドを有する住居が検出されている。（未報告）

図版1

上の原第３遺跡全景



SA1遺物出土状態（1）



SA2遺物出土状態（1）

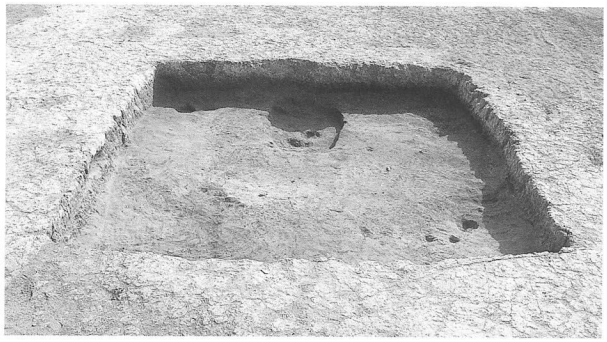
SA1

SA1遺物出土状態（2）

SA2

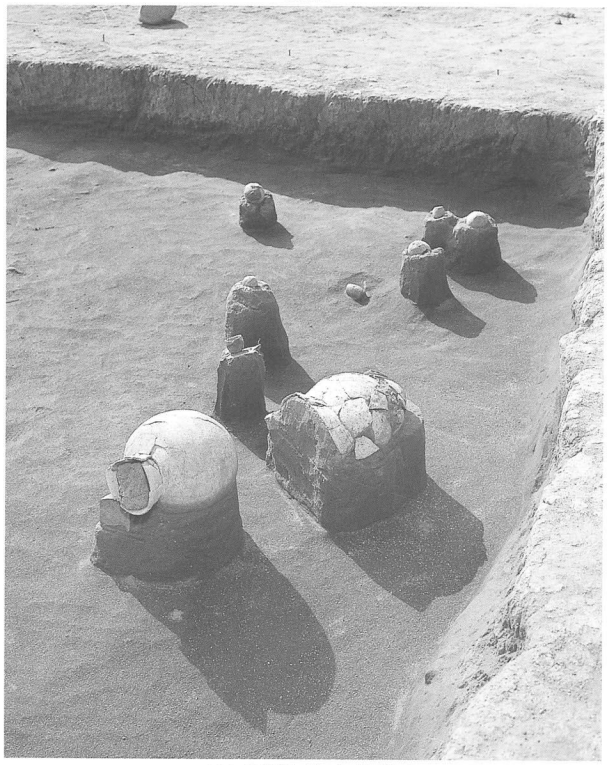
SA2遺物出土状態（2）

SA3土層断面

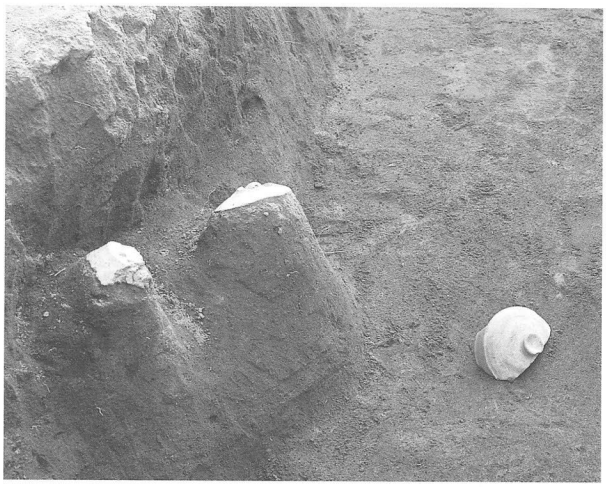


SA4

SA3



SA4遺物出土状態



SA3須恵器出土状態

SA5

図版3

SA6

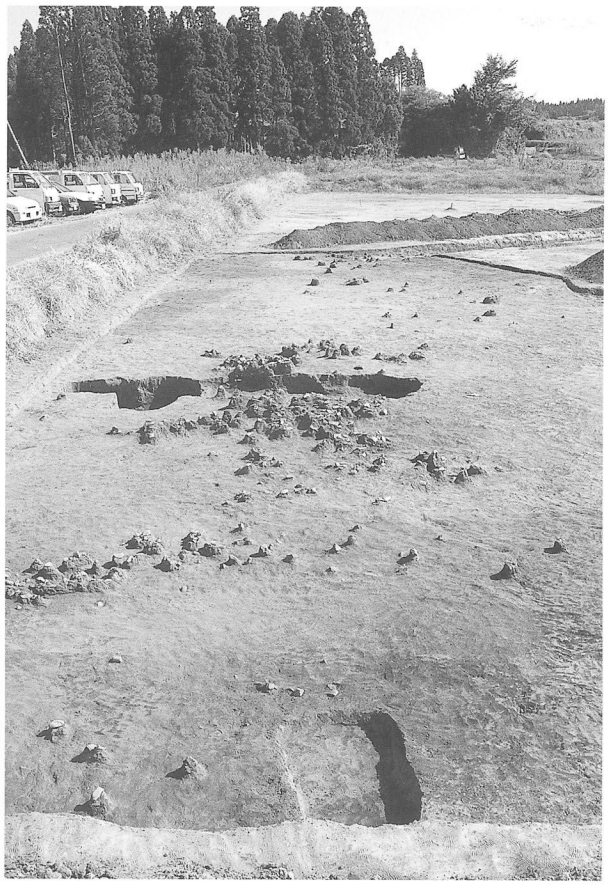
SA7・8

SA8遺物出土状態（1）

SA8遺物出土状態（2）

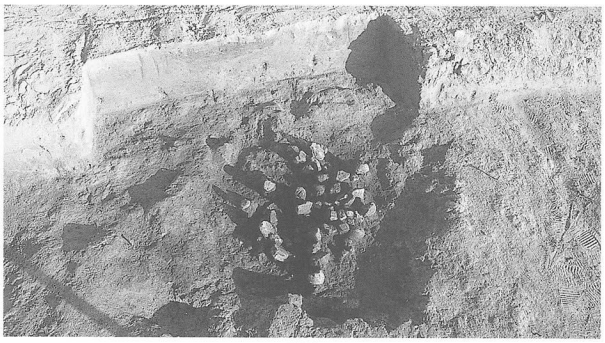
SA9

SA10



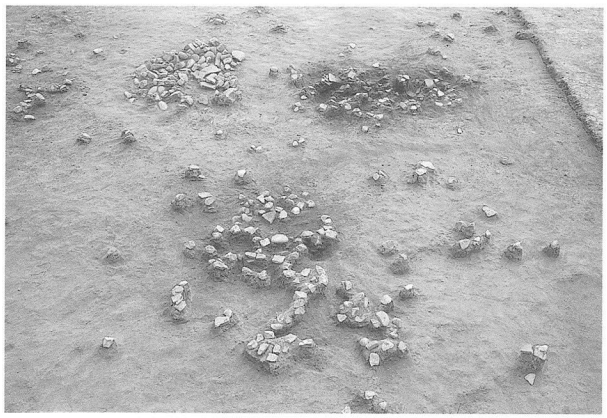
礫群1

礫群2



SI2

SI4（奥がSI3）



SI5・6・7

SI8・9

図版5

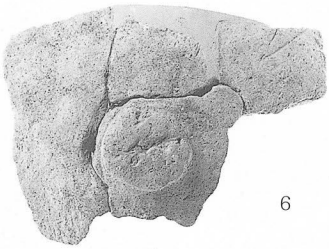
1

3

2

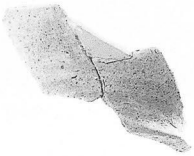
4

5



6

15



16

SA1出土土器

7

8

11

12

9

10

13

14

17

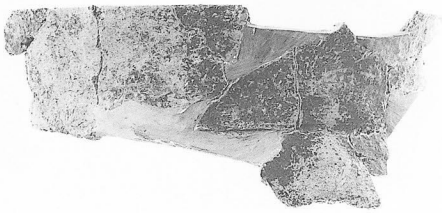
18

19

23

20

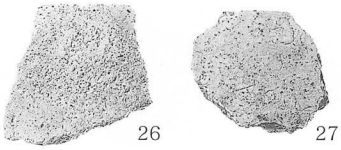
21

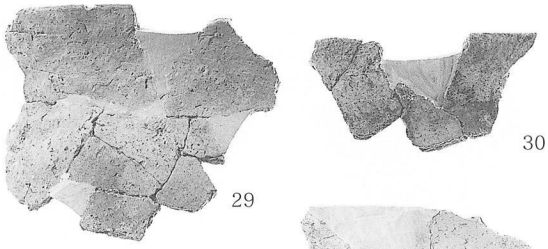

22

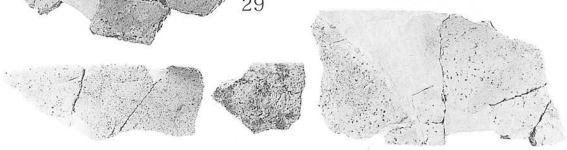
図版7

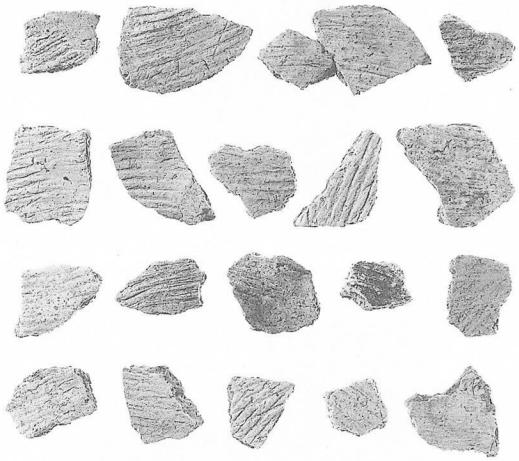
24

25


26 27 28

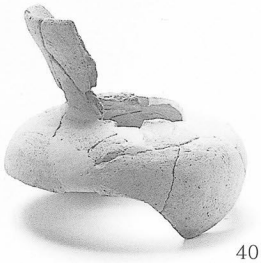

29 30


31 32 33


SA2タタキ調整土器

34

39


40

37

41

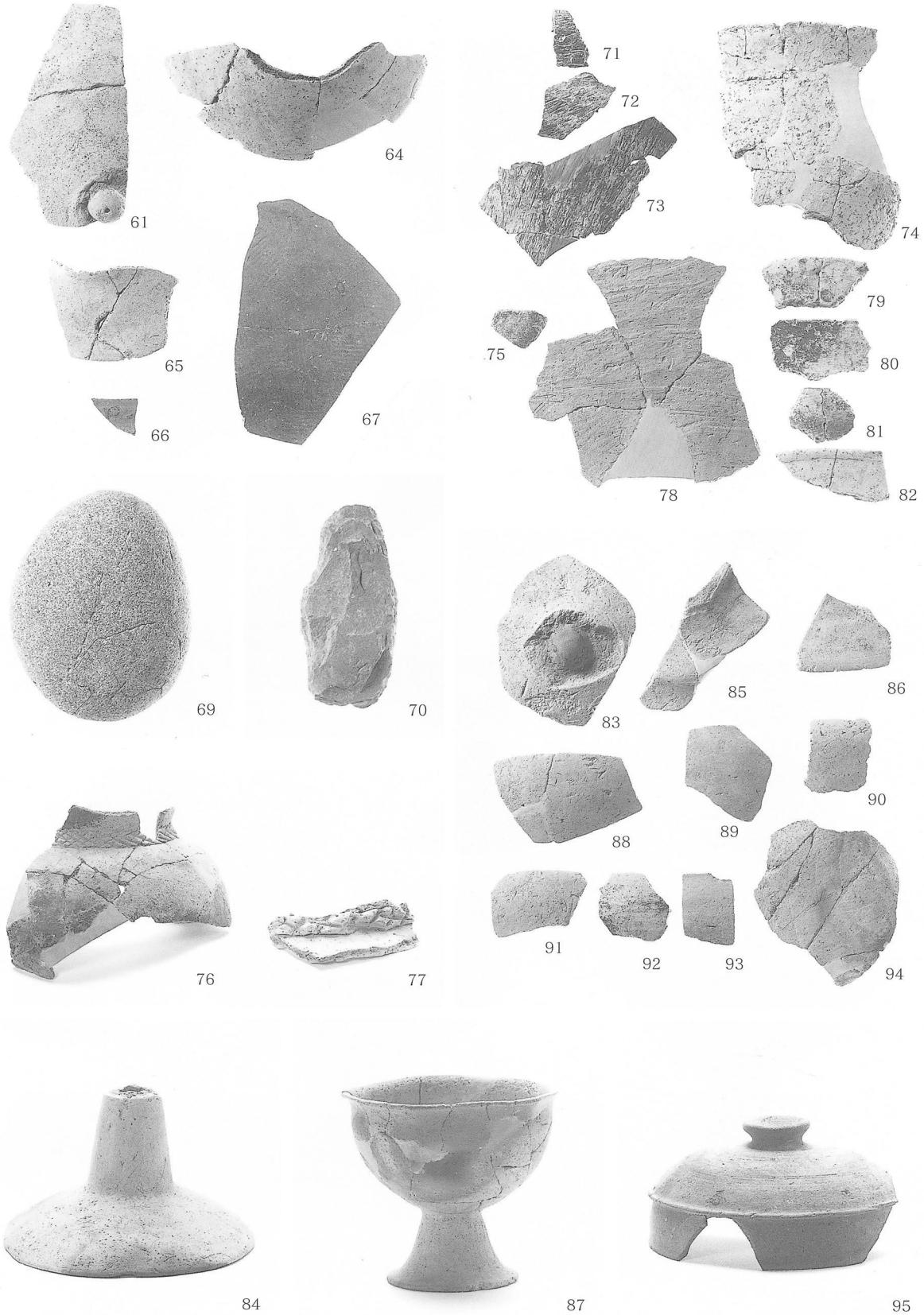
42

45

46

35
36
51
38
44
43
47
48
49
50
54
52
53
55
56
58
62
63
57
59
60

図版9


61
64
71
72
73
74
65
67
75
78
79
80
66
81
82
69
70
83
85
86
88
89
90
76
77
91
92
93
94
84
87
95

96

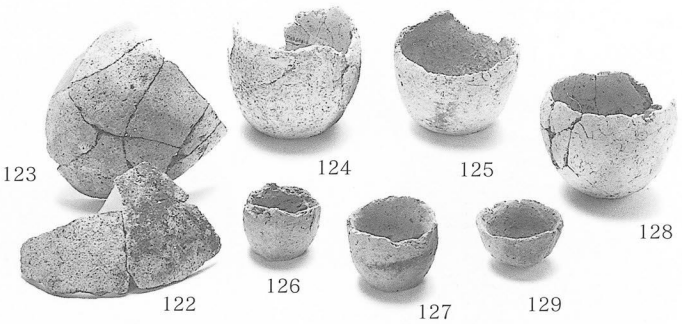
106

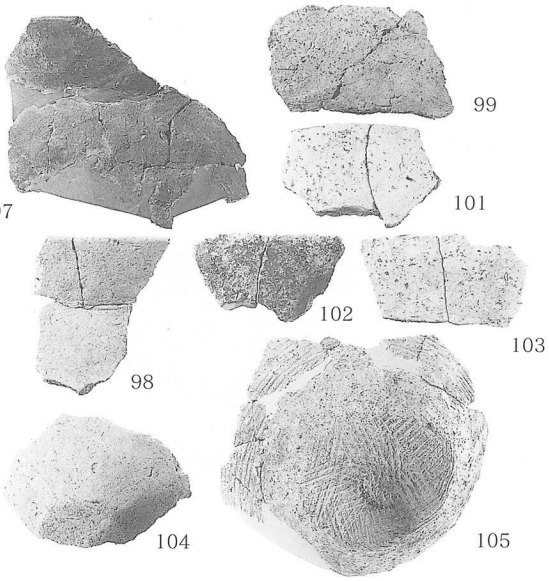
100

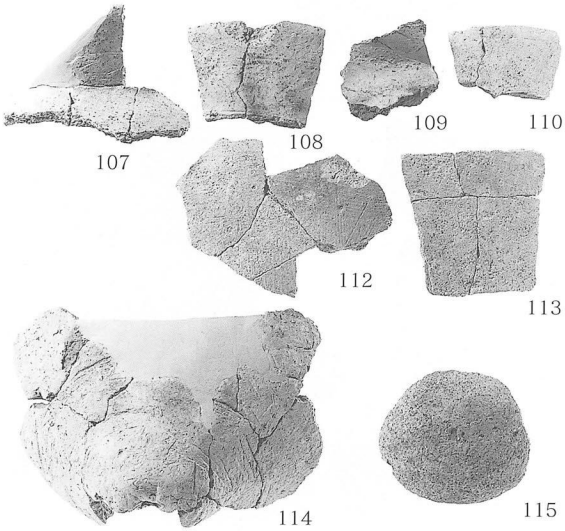
111b

104

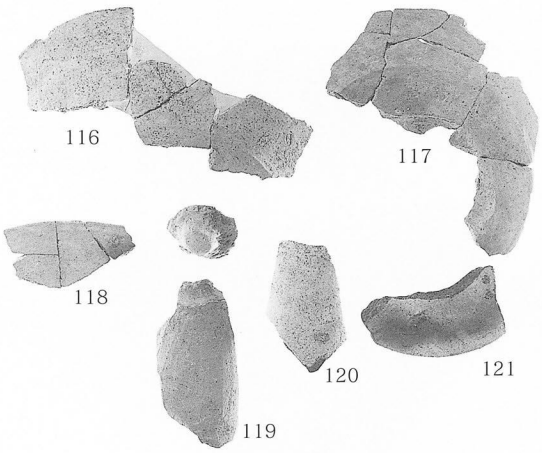
105







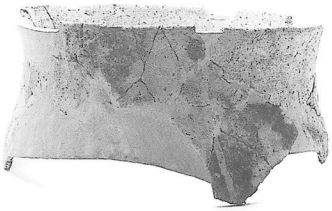
図版11


116
117
118
119
120
121

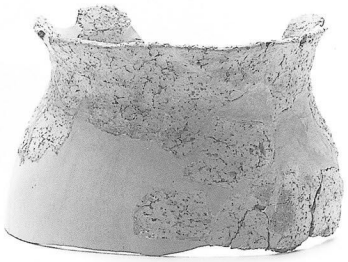
131

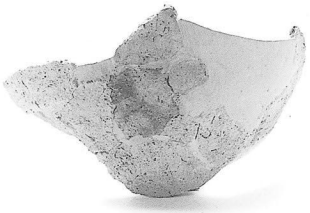
130

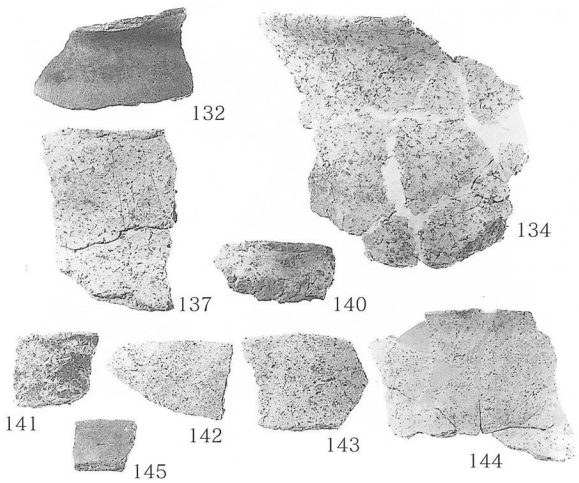
135


138

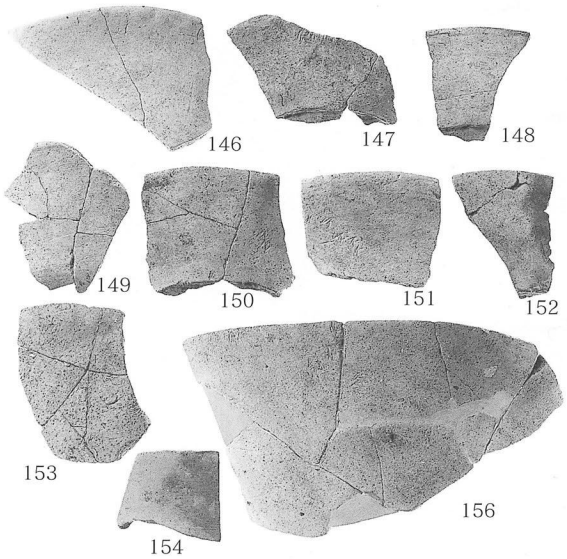
133

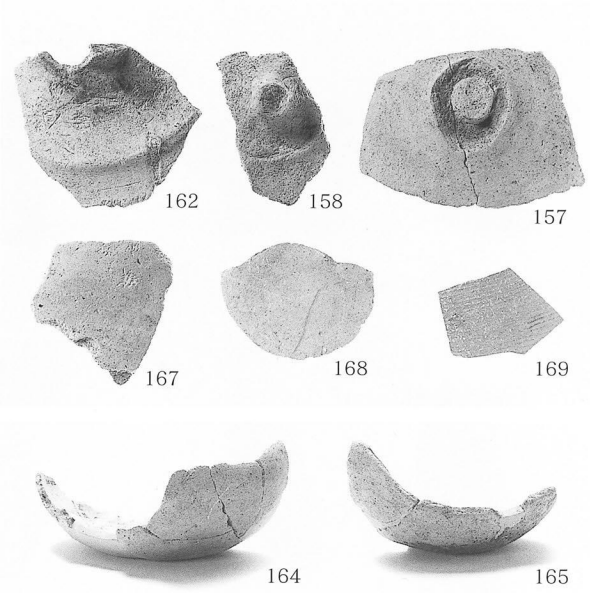

136

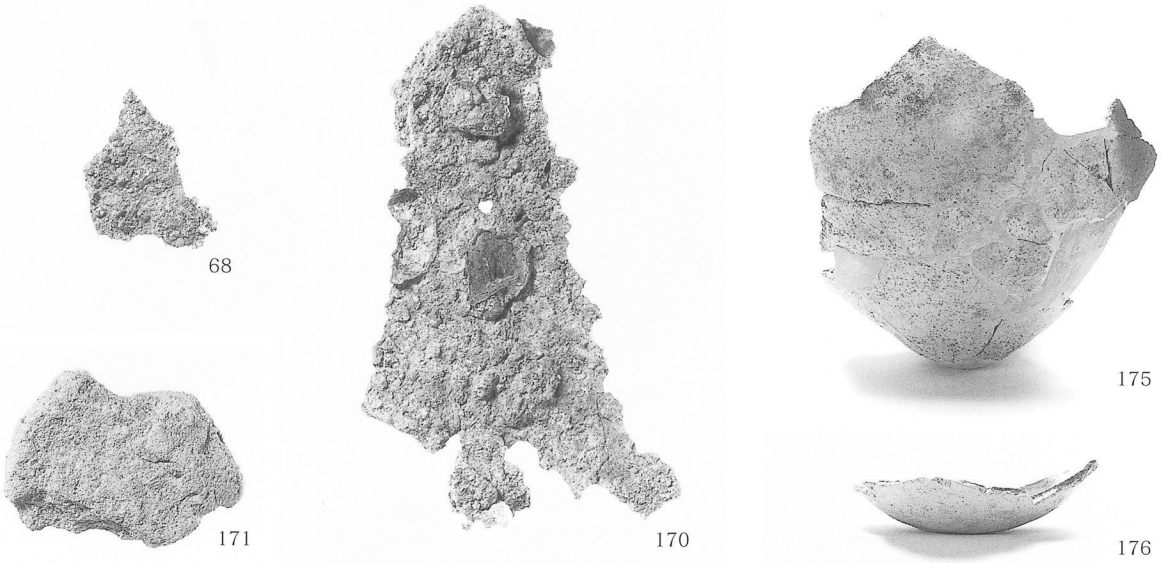

139

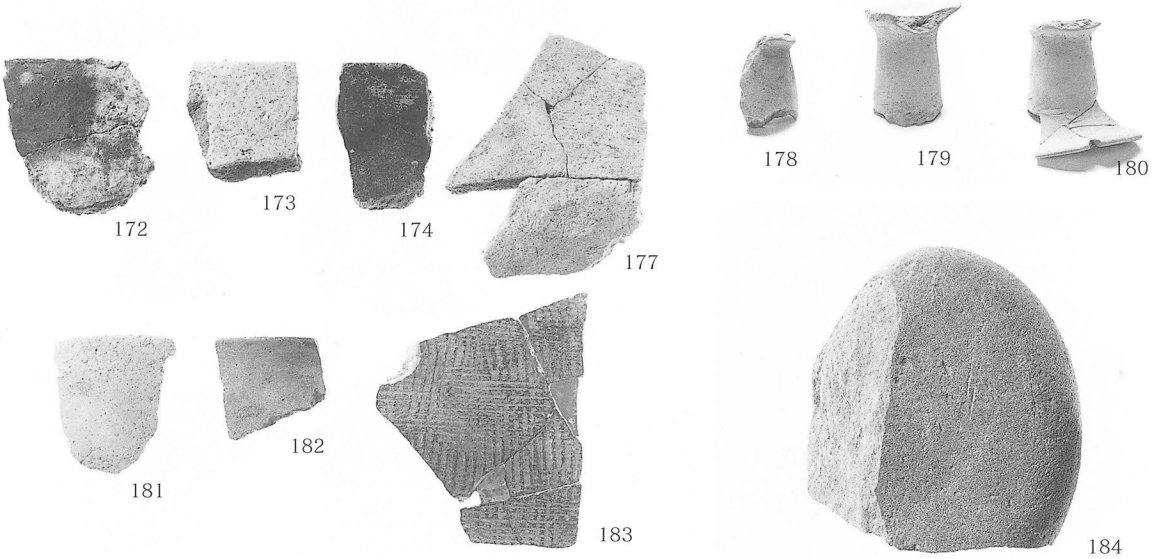

132
134
137
140
141
142
143
144
145

155


146
147
148
149
150
151
152
153
154
156


162
158
157
167
168
169
164
165


68
171
170
175
176

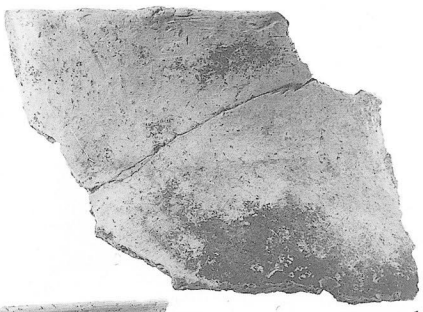

172
173
174
177
178
179
180
181
182
183
184

図版13

185

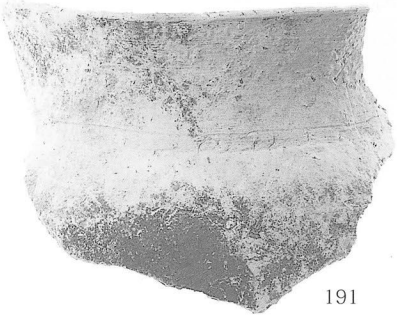
186

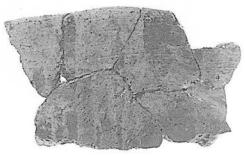
187


190

188

189


191


192

193

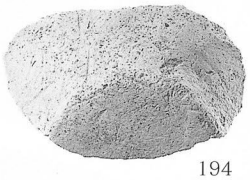
198

201

206

212

213

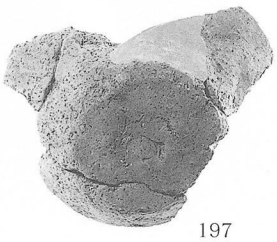

194

195

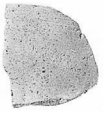
208

209

196

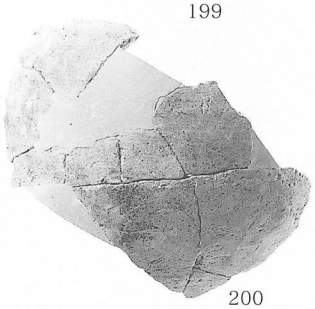

197

199

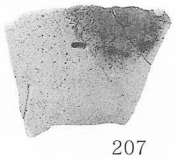

202

203

204

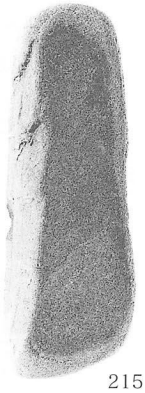

200

205


207

214

216


215

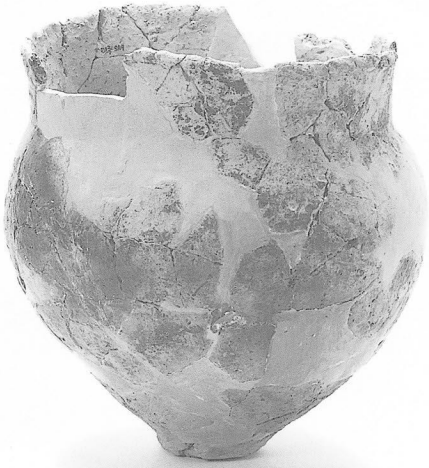
210

211

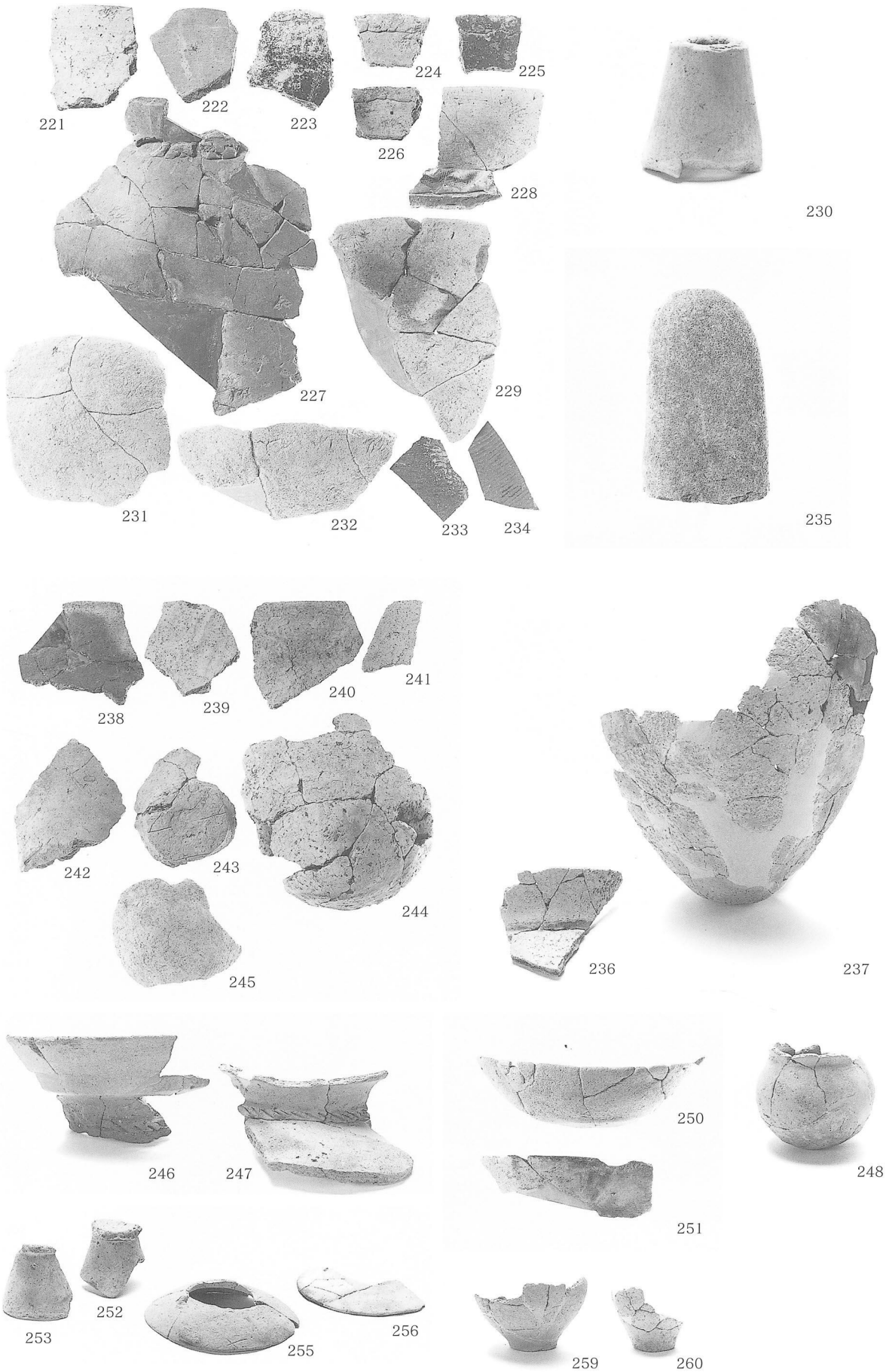
218

217

219


220

図版15


221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
250
251
252
253
255
256
259
260